

---

# 詩人とアヴナルレ

士郎従道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

詩人とアヴナルレ

### 【Nコード】

N8179Y

### 【作者名】

士郎従道

### 【あらすじ】

普通の高校生でありながらも、詩人になることを夢見る少年・青葉瑛<sup>はあき</sup>は夏休みのある日、近所の神社で不思議な外国人の少女・アヴナルレ（アナ）と出会う。

金髪碧眼に透き通るような白い肌、それでいてとても年格好には似合わない頭の良さをもつアナに自作の詩を気に入られた瑛。

クラスメイトの白咲茉莉<sup>しらいさきまつり</sup>も交えて図書館で勉強したり、ラムネを飲んだり、美しい夕立を眺めたり……

アナとの親交を深める中、彼女は突然「瑛に見せたいものがある」

と言い出した。

アナが瑛に見せたいものとはいったいなんなのか。

アナの正体が明らかになるとき、物語が動き出した……

## プロローグ『詩人は独白する』&第一章『詩人は少女と出会う』

プロローグ 『詩人は独白する』

高校二年の夏休み。

僕は近所にある神社の境内でただ独り、ひたすら詩を書いていた。

第一章 『詩人は少女と出会う』

### 1 アヴナルレ

「お前、ずっとここにいるんだな」

太陽の光を輝くように反射する白い地面と、その地面に落ちる木々の黒い影が強いコントラストを作り出していた。

そんな人気ない夏の神社の境内にいきなり現れて、女の子はそう言った。

緑の瞳が僕を直視している。西洋人形に似たヨーロッパ的な容姿が、恐ろしいほどの神社の風景に不釣り合いだ。暑さのせいで幻覚を見ているのかと自分を疑ってみるが、どうも違うらしい。

「あー……君、迷子？」

「そう見えるか？」

僕は首を横に振った。

このあたりに外国人の女の子が住んでいるという話は聞いたことがないし、旅行者が迷子になろうにもこの街はとても観光地になるような場所ではない。それに彼女の服装は टीーシャツ に短パン というふうな、そこらへんの小学生と同じような格好をしている。

困惑と混乱で、僕は訝しげな目を女の子に向ける。

「一日中なにをしているんだ？」

そんな邪険にしていると思われかねない視線も気にすることなく彼女は言った。照りつける日差しがビスクドールのように美しい乳白色の肌で反射している。

僕はきつとその光景を見て、頭のどこかで得体の知れない神秘や、唐突に始まる物語かなにかを感じてしまっていたのだろう。もしくは今度こそ夏の熱気に頭をやられたかのどちらかだ。

「詩を書いてるんだ」

そうでなければ、こんな返事はしなかったはずである。

このときばかりは、常々感じてきた詩を書くことへの気恥ずかしさがどこかへ消え失せた気がした。一人の詩人として堂々と、相手のリアクションも気にせずに、詩を書いていると言えたのだ。

「詩？ 詩というとヘコンズとかニグルザーファリミシュとかが書くような詩か？ というか一日中か？」

女の子はそれまでの怠そうな無表情から一転、嬉々としてそんな話題に食いついた。僕はその言葉の勢いにも啞然としたし、彼女の口から出た聞いたことのない詩人の名前に驚いてさらに眉をひそめた。ヘコンズ？ ニグル……なんだって？ いったいどの時代の、どこの国の詩人だ？

「いや、ごめん。その人たちは知らないや。僕はゲーテとかシラーとか、日本人だと北原白秋とかが好きだな」

「うむ…… どちらも聞いたことがないな」

白秋はともかく、ゲーテを知らないということは欧米人ではないのだろうか…… いや、僕が彼女ぐらいの年齢のときに白秋やゲーテ、シラーを知っていたかと聞かれれば、まったく知らなかったと断言できる。白秋は教科書で読んだかどうかというくらいだ。

女の子は僕と同じ木陰に入り、横に座った。外国人は日本人よりずっと大人びて見えるというが、実際の年齢はいくつなのだろう。服装や身長からは小学生にしか見えない。とにかく僕より年上でないことはたしかだ。

彼女は真横で僕を見上げながら言った。

「お前、名前は？」

「アキラ。青葉瑛」

ずいぶんと歳不相応なしゃべり方をするな、と思いつつ妙に緊張しながら答える。

「そうか。いい名前だな。私はアヴナルレだ。アナでいい」

頭の横で結んだ長い金髪をしなやかに揺らして、彼女は自慢げに名乗った。

「えっと、アナちゃんはハーフ？」

「いや違う」

「ずっと日本に住んでるの？」

「最近来たばかりだ」

尊大な印象を与える話し方は、まだ日本や日本語に慣れていないだけだろうか。とりあえず、僕に対する二人称が「お前」なのは人生の先輩として正したほうがいいかもしれない。

「アナちゃん日本語上手いね」

「パザナリス語に似ていてなかなか覚えやすかったぞ。あと名前はアナだけでいい」

それはいつたいどこの国の言葉なんだ。

僕はこの時点でこの少女——アナが何人なのか探るのを諦めた。パザナリスなんて単語が出てきた時点でもうお手上げだ。きっと次に「どこの国から来たの？」と訊ねたところで、聞いたこともないような国の名前が挙がるに違いない。それはそれで興味はあるが、この先の僕の人生においてなにか役に立つかどうかはわからない。あいにく、小学生のころから地理は苦手だったのだ。

「見せてみる」

ふいに、アナは右手を差し出してそう言った。彼女の目線が僕の間と、僕の手の中のノートをゆっくりと行き来する。

さっきはあんなにはつきりと詩人を自称したのに、少しためらう。ここ最近書いた詩にはあまり自信がない。

「いや……これは書きかけのばかりで」

「いいから見せる」

自信に満ちた、ある意味で威圧的な彼女の瞳が、僕の詩に期待を抱いているように見えた。そこまで僕の詩を楽しみにしていているのだと思うと、胸が熱くなる。

けれどもやっぱりこのノートを見せることには乗り気になれなかった。

スクラップブックのようなもので、ここ数日の、つまり夏休みに入ってから今日までにおける僕の葛藤がすべて露見しているような気がして恥ずかしいからだ。この感覚はつまり、未完成品を見せたくないという一種のプライドである。

それで僕はちよつと苦い顔をするが、アナはただじつとそのきれいな目で僕をとらえ続けた。

しばらくそんな無邪気な目とにらめっこをして、ついには根負けしてしまった。ため息について渋々ノートを手渡す。アナがにっこりと微笑んだ。

ノートのページが彼女の細い指でめくられていくに連れて、いつもなら気にならない蝉しぐれがやけに大きく聞こえてくる。緊張している自分がおかしかった。

アナは意外にもすらすらと字が読めるようで、澄んだ緑の瞳がせわしく動いている。てつきりアナは日本に来てから日本語を覚えただだと思っていたが、この様子だと日本に来る前からずっと勉強していたのだろう。

うん、そちらのほうがより自然だ。ということは留学生なのだろうか。いや、小学生で留学生というのもおかしいな。両親がよっぽど教育熱心なのか……アナが珍しい環境で暮らしてきたのはたしかだ。きつと真実はより驚くべきもので、僕がいくら考えても無駄だろう。どこかそんな気がした。

「ふむ」

ノートをパタンと閉じ、アナは僕に向き直る。

また彼女の口角がわずかにつり上がり、吸い込まれてしまいそう

なほど神秘的な笑みを形作った。そして、

「未完成だと言ったな」

「うん」

「もつと読みたい。明日は完成作を見せろ」

「明日？」

「そうだ。どうせ明日も来るんだろ？」

僕は頷いた。アナの「どうせ」という言葉には引かなかったが、たしかに毎日ほとんど予定はないし、宿題も当分片付けるつもりはないから、恐らく明日も僕はここにいるだろう。そしてなによりも、アナにまた会いたいと思ってしまったからだ。

「では、アキラ。また明日だ」

言いながらアナは立ち上がり、大きなステップで風のように駆けていった。僕も小さいころはあんなに身軽だったかな、と考えながらその様子を見送る。

アナが鳥居のところでふと振り返り、大きく手を振る。それにっられて僕も自然に手を振っていた。

「面白い子だな」

アナが見えなくなったあと、そんな感想が口について出た。「また明日」——アナは僕が書いた詩を気に入ってくれたのだろうか。

僕がゲーテの詩に心が震えたように、感動は国境を越えたのだろうか。そんなことを考えると、無性に嬉しくなってきた。

アナの太陽のような眩しい笑顔は、どこからかやる気を湧き出させる。不思議な力だ。

僕はペンを握り、再びノートを開いた。

## 2 岡原の陰謀

日が傾いて西の空が茜に染まり、星が見え始めるころまで僕は神社にいた。結局、あのあとは二、三のフレーズしか出てこなかった

が、いつもより満足感があるように思えるのは、やはりアナのおかげだろう。あんな子供でも感想をくれるなら立派な読者だ。明日はどんな詩を読ませてあげようかと、ここ最近忘れていた感覚がよみがえってくる。

神社から数分間そんなことを考えながら歩く。気づけば自宅前だった。

「おかえりなさい。岡原君から電話あったわよ」

外よりも乾燥していて涼しい家に入ると、母親がキッチンから顔を出して言った。僕はそれを生返事で返してリビングに入る。漂う香りが、今日はカレーだということを告げていた。

いつもこの時間ならば、一般的なサラリーマンである僕の父親が、数少ない趣味のテレビゲームに勤しんでいるはずだが、今日はその姿が見えなかった。

「父さんまだ帰ってないの？」

「飲み会で遅くなるだって。珍しいわね」

母さんは嬉しそうに笑って言った。酒が飲めない父さんが付き合いで飲み歩くことはあまり多くない。母さんが喜んでいるのは、そんな父さんの帰りが遅くなるからではなく父さんが酔って帰ってくるからだ。どうも母さんはその酔った父さんが好きらしく、正直に言って子である僕からしても理解に苦しむ性癖だった。

キッチンから流れてくる母さんの軽やかな鼻歌を聞いていると、その無国籍ふうのイーजीリスニングのせいかアナのことが頭によぎる。迷子じゃないと自分で言っていたし、明日も会う約束をしたということはこの近辺に住んでいるんだろう。

僕はテレビをぼんやりと見ながら母さんに訊ねた。

「ねえ、最近外国人の夫婦が親子が越してきたの知ってる？」

鼻歌が途切れ、うーんという小さなうなり声が聞こえた後、

「いいえ。聞いたことないけど」

と母さんは陽気に答える。

地区が違うのかな。僕は単純にそう思ってそれ以上は聞かなかった

た。母さんはわりと近所付き合いを大切にするほうだが、世の中が世の中なだけにこの街でも街区が違えば住人の家族構成もわからないということはある。それにどうしても知りたければ明日アナに直接聞けばいいのだ。

ほどなくして食卓に運ばれてきた茄子たっぷりのカレーを食べたあと、僕は自室に退いた。外と比べるとリビングもずいぶんと涼しく感じたが、やはり夏はクーラーの効いた部屋が一番だ。僕の部屋は狭いぶんだけよく冷えている。

僕は疲れているのか、ただの夏バテか区別できない体をベッドに沈めた。

今日はそのまま眠ってしまったおうかと思ったが、岡原から電話があったと聞いたのを思い出す。明日になれば電話があったことすら忘れていそうだったので、今のうちにかけ直すことにした。

岡原は高校でできた友人の一人で、部員がたった一人しかない天文部の部長を務めている。最初に仲良くなったのも一年のときに席が近かったことと、僕自身も星や宇宙のことが好きだということからだった。

二年に進級してからは僕は文系、岡原は理系のクラスに配属された。一日に顔を合わせる機会は減ったが、今でも頻繁に昼の弁当と一緒に食べたり、家に遊びに行ったりする仲だ。

岡原の奴も、僕の携帯に直接かけてくればいいのに。そう思いながら呼び出し音を聞き流していると、四コールほどで軽快な声が電話に出る。

『おー、瑛か。終業式ぶりだな』

「なんか用事だった？」

岡原は電話の向こうでなにかごそごそ動いて、「そうそう」と前置きをしながら続けた。

『お前さ、来週の課外授業受けるんだろ？』

「うん……そうだったかな」

『どっちだ、はっきりしろよ』

課外授業。思い出さなきゃよかったものを思い出してしまった。家から近いという理由だけで僕が入学した神辺高校は、誰もが認める中途半端な進学校で、たいした進学実績も残せていないというのに教師陣の指導熱だけは高く、長期休暇には必ず課外授業が開講される。受講率は半分以下らしいので、実際にどの程度の効果があるかは不明だ。

僕はたしか夏休み直前に帰ってきた期末試験の結果に打ちひしがれ、これはマズいと数学の講座を取っていたはずだ。今思えば面倒なことに参加したと思う。

「受ける。今思い出した」

『オーケー、了解した。それならいいんだ』

「了解して何？ お前も受けるの？」

『まさか。わざわざ夏休みのだ真ん中に学校なんて行きたくないね』  
それにはまったく同意見だ。せめて夏休み一週目の講座にしておけばよかった。

僕が自嘲の乾いた笑い声を出すと、岡原はまたも「そうそう」と言ってから話題を変える。

『近いうちに天体観測しようと思うんだけどさ』

「いいね。僕とお前だけってわけじゃないだろ？」

夏休みの高校生が遊びに行こうという意味で天体観測というのも少し地味な気もするが、実を言うと僕はそれを待ち望んでいた。岡原は自前で大きな天体望遠鏡を持っているし、天文部が自由に使えるという学校の望遠鏡もあるので、奴と行つて観測は星を見る迫力がまったく違う。それに夜の学校をほとんど占拠できるという高揚感と優越感。行かないわけがない。ついでに岡原によるうるさいほどの解説もついてくる。

『まあ、野郎だけじゃ俺も嫌だからな。茉理でも誘ってみるか』

「マツリ……っでもしかして白咲茉理？」

僕はその名前に一瞬戸惑った。まったく予想していなかった名前だったからだ。同時に、この岡原の野郎に彼女ができて、僕が後れをとったか、というような焦りも感じてしまう。

白咲茉莉——彼女も僕と岡原の一年のときのクラスメイトで、僕とは今でも同じクラスだ。接点らしい接点といえばそれくらいであり、僕のイメージとしては静かで、物腰柔らかな女の子だった。

「お前たちそんなに仲よかったっけ」

そんな彼女の名前が、岡原の口から唐突に出てきた。そのせいで、このときの僕の言葉には『もし岡原が白咲さんと付き合っているとかならぶん殴ってやる』、とそんな殺気がこもっていたに違いない。奴が僕よりも先に彼女をつくるなんて考えられない、考えたくない、嫌すぎる。

『いや、俺あいつと保育園から一緒……てか家が隣だ。言ってなかったか？』

その殺気が電話越しに伝わったかどうかはわからないが、岡原は鼻で笑ってから否定した。僕がほっと胸をなで下ろし「知らなかった」と答えると、

「そっか」

岡原はそう答えたきり、なにかを考えているような無言の間を置いた。まったくの想像だが、奴のにやけ顔が頭に浮かんた。不愉快だ。

そしてやっと口を開いたかと思えば、

『まあいいや。詳しいこと決まったらまた電話するよ』

というふうになささと会話を切り上げる。僕は岡原のその態度に若干の違和感を覚えたが、深くは追求しなかった。

「昼間は携帯にかけろよ。家にはいないことが多いから」

『んー。わかった』

岡原の返事を合図に、僕たちはお互い「じゃあ」と言い合って電話を切る。結局岡原が何の要件で最初に電話をよこしたのかわからなかった気がするが、奴のことだからさりとて用事はなかったに違

いない。

それよりも僕にとっては、課外授業を受けることになっているということを思い出したほうが大きい。

「面倒だな」

そうは思うものの、月曜日になれば僕はサボらずにちゃんと学校にいるだろう。変に律儀な自分が恨めしくてしょうがない。これで成績が良くならないのが不思議だ。

中途半端なあくびが出る。

勉強のことを考えると、急に眠気が襲ってくるのはなぜなんだろう。なんだかもう、一気にすべてのことに閉じてやる気がなくなってしまう。一瞬だけアナの顔が浮かんだ気もするが、この気だるさと睡眠欲の衝動でかき消されてしまった。

僕はその衝動に逆らっても、なんら利益がないということを実体験からして知っていたので、そのまま目蓋を閉じる。これからの勉強のことは明日、もしくは明後日、それができなければまた別の日にでも考えよう。そうだ、それがいい。

僕はそうして、いつもより少し早めに眠りについた。

### 3 滅亡の光

翌日、昼前になってようやくベッドから出た。今日も外では太陽が呆れるほど燃え盛っていて、これもまた呆れるほどセミたちが鳴いている。

リビングからキッチンに入り、冷蔵庫の中からランチになりそうなものを探した。母さんが作っておいてくれたオムレツとトーストを食べながら、リビングでテレビをつけニュースを観た。

内容は政治家の汚職問題、普段は気にもとめない外国で起きている紛争、有名人のスキャンダル……あまり明るいニュースは少なかった。眺めているだけで気分まで淀んでしまいそうだ。

『……次のニュースです。日本時間での昨夜、ヘルクレス座のM13星団にある星の超新星爆発が観測されました。暗い夜であれば肉眼でも見られることから、北半球の各地で話題となっています……』

しかし、その超新星が観測されたというニュースは気になった。

僕は夜空に浮かぶ一際明るい輝きを想像して、その輝きをどう表現しようかと考える。星の命が尽きた光、そして新たに生まれ変わる光。詩的で心震える光に違いない。あとでメモに加えておこうと思った。

シャワーを浴びて着替えた後、トートバッグに一冊のノートとゲーテの詩集、それと夏休みの宿題冊子を詰めて家を出た。ノートはもちろん、アナが読みたいと言ってくれたものだが、昨日持っていたスケッチ用のそれとは違い完成した詩の清書がしてある。

ゲーテの詩集は夏休み前に市立図書館から借りてきたものだ。丁寧で頑丈な装丁のハードカバーで、今日が返却日となっていたからついでにと思いバッグに入れた。そうだ、返す前にアナに見せてあげてもいいだろう。彼女はゲーテを知らないようだし、ぜひ読んでほしい作品もいくつかある。

僕はアナに会うことを昨日以上に楽しみにしていることに気がついた。彼女と会って何を話そうかとあれこれ考えている姿は、初デートを控えた中学生のようだと自分でも思う。なんというか、舞い上がっているみたいで恥ずかしい。

何度かにやにやした顔と苦々しい顔を交互に繰り返していると、いつの間にか神社の鳥居前に立っていた。

少し見渡してみても人気はなく、ここが神社であるということ以上に神秘的に感じる。僕が小さいころは友達と一緒にここでよく鬼ごっこや缶蹴りをして遊んだ記憶があるが、今の子供はそんなことをしないのだろうか。

いつものように拝殿前の階段にかかる木陰に座る。暑いのは嫌いだ、同じく無為に時間を過ごすのならば、家の中にいるよりはいい。そんな意味で健全なはずだ。幸いどうやら昨日よりは一、二度気温

が低いようで走りでもしない限り汗が噴き出るといふようなことはない。こうして静かに夏の風を感じるのとはなかなか心地がいい。

西の空に見える雲の、もくもくと広がっていく様子を無言で眺めていると、

「どうした、アキラ？」

アナがぼーとした僕の視界の中に突然顔を覗かせそう言った。

僕が驚いて口をぱくぱくさせていると、アナは耳にかかった細い毛を掻きあげながらにっこりと笑い、昨日のように僕の横に座る。

「ちよつと遅かったか？」

「いや、僕も来たところだから」

なんだ？　ほんとにデートみたいじゃないか。思わず苦笑してしまふ。

アナは今日もティーシャツに短パンのとてもラフな格好（と、同じくシャツにジーンズの僕が言えたことではないが）で、それがまた妙に似合っていた。袖口からすらりと伸びる腕が子供らしくて健康的だ。

「完成作は持ってきたのか？」

口調もまた相変わらずで、流暢な日本語なのにどこか岩のように堅いというおかしなものだった。

「うん。これ」

ノートを受け取ったアナの表情が、一瞬はあつと明るくなる。なんて嬉しい反応をしてくれるんだ。そう思っただけにやける。

アナは愛おしそうにノートを開き、縦書きの詩を目で追う。長く整ったまつ毛に思わず見惚れてしまった。

彼女は最初に書かれた作品を読んだ後に、

「アキラは暖かい詩を詠むんだな」

ぼつりと言った。

僕はただ困惑することしかできなかった。それはその評価が気恥ずかしかつたのかもしれないが、彼女の言い方がごくもの悲しさうだったからでもある。

まるで暖かみのない、冷たくて退廃的な詩しか読んだことがないような、そんな表情だった。この世界の幸せなものや美しさに触れたことがないような、そんな目だ――

なんて、考えすぎだろうな。優しい微笑みを取り戻し読み進めていくアナを見ると、そんなのは僕の思い過ごしだとは思えない。ただのセンチメンタリズムというやつだ。アナは頭も良さそうだし、詩も好きだと言っていたから、きっと文学的な感性がませているだけに違いはない。

たしかに中原中也やランボーといった、いわゆる退廃的な詩を詠む詩人は好まない。もちろん、彼らが評価されてきてその詩が多くの人を感動させたり、共感を得てきたことは事実だ。しかしやっぱ僕は、激しさや絶望の中にも光を見いだすような詩が好きだし、そんな詩を詠みたいと思う。そういう意味ではアナの批評は正しいはずだ。

「アナはすごいね」

「ん？ 何がだ？」

「その歳で詩が好きで、しっかりした意見が言えて。なんだかっこいい」

「そうか。だが好きなのは詩だけじゃないぞ。音楽も絵画も……この宇宙の芸術と呼ばれるあらゆるものが私は好きだ」

自信たっぷり肯定し、ちよつとした啖呵を切ったアナはさらに鼻を鳴らした。僕は思わず拍手をしてしまふ。しっかりと、恥ずかしげもなく言い切るアナが羨ましかったのかもしれない。

その拍手の乾いた音で、アナはまたも満足げで気品に満ちた笑顔を僕に向けた。

着ているものは僕の小学生時代とそっくりなアナだが、こんなふうに芸術を愛し、頭も良く、それでいてどこか品性を感じさせるということは、きっとというかやはりというか、かなりいい家柄のお嬢さんなのだろう。なんでこんなところで、僕と一緒にいるのが本当に不思議だ。

アナは得意になって評価を続ける。

「この冬の夜空を詠った詩が面白いぞ。柔らかな文体なのに韻律もあつて格調を感じさせる。なによりも宇宙や星に対するアキラの強い憧れがちゃんと伝わってくる」

といったように、ノートの中頃に書かれているその詩に関してはえらくベタ誉めだった。

その詩は僕もかなり気に入っているもので、何度も何度も推敲し、かなり時間をかけて書き上げたのだ。だから自信はものすごくあつたし、アナのこういう評価も嬉しいと思う反面、当然とも思えた。これくらいの高慢さは許されてもいいはずだ。

「ふむ……こっちの詩も星を詠ったものか。よつばど好きなんだな」

「そうだね。なんていうか、完全な夢物語じゃないってあたりが余計にもどかしいのかも。ほら、今はさ、宇宙旅行とかできなくはない時代だし」

そういえば、岡原と意気投合したときにも同じような言葉を使つたな、と去年の春を思い出しながら言つた。

「……そうか。つまりアキラは宇宙へ行つてみたいんだな」

「そういうことになるのかな？」

アナはノートのページをめくる。

「まあ、そりゃ、生きてる間には行つてみたいよ。昨日の超新星出現のニュースだって、地球からじゃなくて宇宙で見たいと思つたしね」

「超新星？」

その言葉を聞いてアナは字を追う目を止め、真剣な面持ちで僕を見上げた。

「ん？ ああ、超新星っていうのはね……」

「それが何かは知っている。昨日の、というのは昨日この星で観測されたということか？」

超新星がどんなものかを知っている子供もすごいな、と思いつつ頷く。

「どちらの方向だ？」

「方向はわからないな。ヘルクレス座のM13星団だったかな。詳しいことは僕も友達に聞かないとわかんないんだけど」

友達というのはもちろん岡原のことだ。あいつのことだからきつと今ごろ必死になって情報をかき集めているだろう。

「なるほど」

「アナも星に興味あるんだ」

「いや……気になっただけだ」

アナは穏やかな笑顔を作りまたページを進める。そのノートのページがもう残りわずかなのに気がついて、僕はトートバッグからゲートの詩集を取り出した。『西東詩集』——伸びやかな文体で、ゲートの東方への強い憧れが描かれている詩集だ。

「これも読んでみるといいよ」

詩集をさりげなくアナに手渡す。アナは無言で、しかし明らかに嬉々とした表情でノートと引き替えにして手に取り表紙を開いた。その様子がまるで、楽しみにしていたケーキの箱を開けるようで、妙にほほえましい。

「これはお前が好きだと言っていた詩人のものか」

「うん。本自体も古いから古語調になってるけど読めるかな」

「む……たしかに私が覚えた言葉とは違うな……」

そう言いつつもアナはうつとりした目で詩集を眺めている。彼女のことだ、少しぐらいわからない部分があったとしても、詩自体からにじみ出るゲートの瑞々しい憧れや強い意志を肌で感じているのだろう。詩というものは概ねそういうものだ。なぜだかわからないが鳥肌が立ち、いつの間にか涙を流している。僕も、いつかそんな詩を書いてみたい。

しばらくして、楽しそうに読んでいたアナは、その詩集を小脇に抱えて急に立ち上がった。何ごとかと見上げると、

「よし、勉強がしよう」

と言い出した。

「は？」

「勉強だ。こんなすばらしい詩の意味が完全に理解できないなんて悔しいじゃないか」

きらきらとした、純粹無垢そのものの瞳が僕を見つめていた。

力強くて、美しくて、その眼差しだけで、心が洗い流されるような目だ。

「……えっと、じゃあ一緒に図書館に行こうか。ちやうどその本も返さなきゃダメだし」

「図書館？　なるほど、図書館か。とても良い考えだ」

アナがなにかぼそつと言ったが、短い上に僕に向かって言ったことではなかったせいかほとんど聞き取れなかった。図書館がそんなに珍しいのだろうか。

「行こう、図書館へ。もっともつと知識が欲しい」

知識が欲しい——なんて高尚な言葉なんだ。そう思いながら僕は快く頷いた。

#### 4　図書館にて

市立図書館は、神社から僕の通う高校の脇を抜けるとすぐに見える。古めかしい赤レンガの建物がいかにも文化の砦というような趣を持つていた。

外国人の少女と一緒に歩く男子高校生が周りからどう映っているのかと考えつつ、ひよつとして誘拐に間違われなかと心配になっていたが、特に難なく図書館までたどり着いた。

「ほほう。なかなか立派な図書館だ」

三階建ての図書館を見上げながらアナが言う。

「そうでもないよ。ここからだとかかなり遠いけど、県立図書館はもっと大きい」

「いや、図書館の立派さは大きさに由来するものではないぞ。その

図書館が存在する理由、歴史、そして建物が建つ場所。それらが重要なのだ」

「……アナは物知りだなあ」

「ふふふ。褒めても何も出ないぞ」

苦笑いしか出なかった。

図書館に入つてすぐの広い閲覧室は寒いほどの冷房が効いている。机で勉強をする学生や、新聞を読みながらそのまま寝てしまった人、書架の整理をする職員がちらほらと見えた。

「手続きなしで読んでいいのか？」

「うん。見える範囲の本は自由にとって……」

言い終わる前にアナは早足気味にでくと歩き出して、すぐに書架の狭間に消えてしまった。図書館であまり危ないことが起こると思わなかったので、僕は彼女の後を追わずに空いている机を探した。今日はここでアナと一緒に勉強しよう。

六人が座れる椅子と机のセットは、全部で四つあった。そのうち閲覧室の入り口から見て一番奥の机はすでに人がいっぱいいて、僕はその隣りの机にスペースを確保する。その席からは偶然にもアナが「日本語」と記された書架の前で本を物色している姿が見えた。

アナは僕に気がつき仕草で興奮を表現して、歩いてきて僕の横の席に着く。手に持っていたのは『総合古典入門』だった。それは、僕が学校で参考書として使っているものとまったく同じで、入門と題が打つてあるものの、ところどころの設問は意外に難しい。

「いろいろ目移りしてしまったが、解説も訓練用の問題も充分でこれがよさそうだ」

アナは心底嬉しそうに言っただけで読み始めた。ペンとルーズリーフを貸してやると、見たこともない文字でさらさらとなにかを書き連ねる。数学で使うような樹形図や、古典文法とどう関係しているのかわからない幾何学模様。

「それ、なに？」

「生成文法という言語学の解析理論だ。最近覚えた。いくつか致命

的な不備はあるが、あらゆる言語に当てはまる普遍的な文法という考え方は面白いし、特定の範囲では有用だな」

「言語学ね…… アナはなんでそんなこと知ってるの？」

「ん？ まあ、専門だからな」

「ふうん」

小学生の専門分野にしては高度すぎるな。僕はやはり苦笑いしかできなかった。

かりかりと文字を書き連ねていくアナの横で、僕は英語の夏休みの宿題を黙々と解いていく。

そのまま一時間近く経ったころだろうか。

「よう」

と、閲覧室の静寂を崩さぬようにこっそりと僕に声をかけたのは、昨夜話したばかりの岡原だった。

「図書館で会うなんて珍しいな」

岡原は僕の左横の席に座って上半身を傾けながら声を殺す。持っていた本は予想通り天文学関係である。

「そろそろ宿題するのもいいかなって思ってたね」

そうは言ったものの、もちろんそれは嘘であって、僕がここにいる本当の理由は本を返すためとアナに付き合っているためだった。

岡原はにやりと笑って続ける。

「なんだ、考えることは一緒か」

言って岡原はやおら手を挙げた。奴の視線の先を見ると、小柄な女の子が何かを探すようにきよるきよるとしている姿が目に入る。栗色のセミロングヘア、淡い桃色のシャツ、体のラインをくっきりと浮き上がらせるジーンズに肩から袈裟掛けされた小さなポーチ。その女の子は岡原が振る手に気がついて、こちらに歩いてくると歩いてくる。そして安心したようなトーンで岡原に向かって言った。

「もう、健くんすくなくなっちゃうんだから。びっくりした」

それに対して嫌みな口調で答える岡原。

「さすがに図書館で行方不明にはなれないだろ。それにいつもいな

くなるのは茉理のほうだ」

「それはそうかもしれないけど……でも探したんだからね！」

「たまには一人にしてくれ」

僕はその光景に呆然とするほかなかった。なぜならば、今岡原がかなり親しそくに話している女の子は――

「それよりさ、ほら」

岡原は親指で僕を指す。

つられて女の子が僕に視線を向ける。

小首をかしげる女の子。

そして一秒後。

「瑛くん!？」

――白咲茉理は、僕の名前を叫んだと同時にここが図書館だということ进行い出したようにで瞬時に口に手を当て、辺りを見渡す。いくつかの視線が白咲さんに集まったがすぐになくなり、入れ替わりに白咲さんが耳まで真っ赤になってしまった。

「あ、えつと……こんにちは」

真っ赤なままでうつむいた白咲さんは消え入るような声で言った。僕はまだ呆然としていたが、白咲さんの挨拶で我を取り戻し、肘で岡原の腹を小突いた。奴はすぐに小声で「本当になんでもないつて」と笑って見せる。

「あの、わたしと健くんは家が隣で、その……小さいころからよく一緒に遊んでたからそれで」

「まあとりあえず座ろう、な」

岡原があたふたとする白咲さんをなだめるように言うと、白咲さんはためらいがちに頷いて恐る恐る僕の正面に座る。

白咲さんは一向に顔をあげようとしない。彼女になにか悪いことでもしただろうか。記憶を探ってみるが、そんな覚えはまったくなかった。

岡原に視線で助けを求めると、

「今度の天体観測の打ち合わせも兼ねて図書館で宿題しようってこ

とになったんだ。まあ俺は宿題なんてする気はないんだけど」

岡原の言葉に、再び白咲さんはゆっくりと頷いた。

「てことで、早く宿題終わらせて観測しようぜ。今ならまだ超新星が見えるんだ」

そう諭す岡原に従い、赤べこのように頷き続ける白咲さんは、いそいそと鞆からテキストと筆箱を取り出して僕と同じように広げる。岡原は岡原で、持っていた本を嬉しそうに読み始める。

正直なところ、白咲さんとの関係について岡原はなんでもないと言っただが僕にはどうも信用できなかった。だいたい、こんな仲の良さそうに話すところを見せつけられて、信じるというほうがおかしい。

たとえば、岡原の野郎が普段からどんな女の子にも親しく話していたとしたら話は別だが、奴のそんな姿はこれまで見たこともないしかも白咲さんは岡原はただの幼なじみだと言うのに、奴のことを「健くん」と親しみを込めて呼んでいるのを僕の耳は逃していなかった。ただの幼なじみだとしても、高校生にもなってそんな愛称で呼びあうなんてありえるのだろうか。ていうか岡原の名前ってなんだっけ？

面白くない。

僕のそんな感情を知ってか知らずか、しばらく傍らで静かにしていたアナが、つんつんと僕の腕を突く。そして僕や岡原、白咲さんがそうしたように小声で、

「アキラ、この言葉はどういう意味だ？ 現代語の意味では文脈にそぐわないと思うのだが」

と僕に問いかけた。

それを見て、間抜けな声と共に目を丸くしたのは、岡原だった。いや、目を丸くしただけなら白咲さんもそうだ。僕は岡原と白咲さんのそのリアクションの意味が理解できず、首をかしげつつアナに古語の意味を教えてやる。

「なるほど。単純な音韻変化だけではないんだな」

アナはそう頷き、「こっちは？」と別の語を指さす。

そこへ岡原が割って入ってきた。

「待て待て待て。瑛、お前こそどういうことだよ」

「何が？」

「その女の子だよ！ 知り合いなのか？ どこから誘拐してきたんだ？」

人聞きが悪い。声が大きい。

そう怒りつつ、頭の片隅ではやはりそう見えるのも仕方がないかと納得してしまった自分が恨めしい。

「誘拐なんかしてないよ。家の近くの神社で知り合って……ちょっと仲良くなっただけ」

我ながら到底理解してもらえそうにない説明だと思った。しかし実際にはこれ以上ないほど明解な解説なのだ。白咲さんはアナを見つめて信じられないというような表情をしていた。

「いや仲良くなったって、その子外国人じゃないのか？ てかいくつだ？ 小学生？」

「失礼だな、私はれっきとした大人だ……アキラ、『れっきとした』の使い方はあっているか？」

岡原の言葉にアナがそう噛みつく。自分を大人だと思っていた年頃なのだろう。僕も中学生になってすぐはこんな感じだった。アナが付け加えた質問に軽く頷いてあげる。

「あ、えつと……お名前はなんていうの？」

ぼーっとしていた白咲さんが、アナの崇高な態度に怯えるようにして訊ねた。言葉遣いと声の抑揚がまったくちぐはぐだ。

「私はアヴナルレだ。アナでいい」

対してアナは一見この上ないほど清々しく、かつ強さを兼ね備えた口調で自己紹介をする。岡原はそんなアナの一挙一動に面喰らったようで、数秒ごとに面白い顔をしている。

「そっかあ。アナちゃんはどこから来たの？ 日本語上手だね」

「うむ、その……ハンガリーだ」

ハンガリー？

僕の頭上にそうクエスチョンマークが浮かんだ。はてどこだっけ、ヨーロッパらしいということはうっすらと覚えていたが、それ以上がわからない。岡原を見るとんうん頷いているが、あいつに限っては本当に理解しているかどうかは怪しい。

「すごいね、ハンガリー！」

白咲さんは本当に感心したような笑顔で手をぱちぱちと打った。よく考えればいったい何がすごいのかはわからないが、こういうときに「すごい」と言ってしまう気持ちは充分理解できる。

「あ、あのね、わたしは白咲菜理。よろしくね」

「ああ。よろしく。ところで、この言葉の意味はわかるか？」

アナは語句を指さしながら白咲さんに示した。よっぼどその意味が知りたいのだろう。

「アナちゃん難しい本読んでるんだね……ちょっと待って」

それに嫌な顔ひとつせず、白咲さんは鞆から電子辞書を取り出しアナのために意味を調べ、そしてすぐに「どうぞ」とアナに電子辞書を差し出してにつこりと笑う。かわいらしい、という言葉がすっかり当てはまるそんな笑顔だった。

「携帯情報端末？ いや、携帯情報照会機か」

ぼそぼそと、アナは独り言のようにその電子辞書を操作しながら呟いた。わざと難しい言葉を選んでいるような、まったく珍妙な言葉づかいだ。「電子辞書っていうんだよ」と白咲さんがくすりと笑いながら正しい名前でもフォローするほどである。

アナはその「電子辞書」という言葉を咀嚼するように呟いて、一度首を縦に振った。いったい何を納得したのだろうか。その眼光は明らかに好奇心に満ちている。

「ハンガリーにはこういうのなのかなあ？」

「ないことはないんじゃないか？ 使い方はわかるみたいだし」

岡原の言うとおり、アナは辞書の名前こそ知らなかったものの、彼女の指はなんの迷いもなく動いていて、的確に言葉の意味を調べ

ている。まるでスポンジのように新しい知識を吸収していく。こういう人を天才というに違いない。

語句調べに没頭するアナと、それを聖母のように見守る白咲さんを視界にとらえたまま、岡原は僕に耳打ちする。

「お前……ロリコンだったのか？」

岡原の野郎、何を思っでそんなことを口にしたのか。そんなふうになんかでも思われたことがとてつもなく心外である。

「そんなわけないだろ！ アナは僕の詩が好きだって言ってくれて、それで仲良くなったただだから」

「お前の？ はあ……それは物好きな子だな」

物好きとは失礼な言い方ではあるが、僕も共感できるところがあることには変わらない。

ほんと、不思議な女の子だ。

そんなふうになんか僕も視線をアナに移したちようどそのとき、閲覧室の西の壁にあった大きな柱時計の鐘が重々しく鳴り響いた。午後三時を知らせるその音はそれまでの涼やかな静寂を終わらせて、ほんの少し人々を慌ただしくさせる。新聞を持って寝ていたおじさんは目を覚まし伸びをしたあと、その新聞を戻して出て行きたし、奥の机の学生は広げていたノートや本を片付け始めた。

そして僕たちが使っていた机ではアナが立ち上がり、鐘の音が聞こえてくる方向を眺める。

「どうしたの？」

白咲さんが優しい笑顔のままアナに訊ね、

「すまない。帰らなければいけない時間だ」

アナはそう答えた。柱時計の針を見つめる表情が、どこか哀しげだ。

僕と白咲さんを見据えたアナは「ありがとう」と一言だけ言っで出口へ向かっていった。

## 5 白咲茉理

「ホント、びつくりしたぞ」

図書館の二階、自販機前の休憩スペースでアイスコーヒーの缶を片手に岡原は僕に冷たい目線を向けていた。一人がけのソファにふてぶてしく座り込んで、アナの感想をつらつらと並べていく。そのほとんどは「びつくり」という単語で修飾されていて、語末はそろって「びつくりした」であるという具合だ。

「でもすごく賢そうな子だったよね」

白咲さんもまたアナについて感想を述べているが、岡原と違ってアナのことをかなり好意的に思っているようだった。

「あの子はどこら辺に住んでる子なんだ？」

「あ、そうそう、気になる」

向かい合わせに座って、僕を覗き込むように身を乗り出した岡原と白咲さんに少し仰け反りつつ、

「いや、わかんない」

と、ため息混じりに答えた。そう言えば今日もまた訊くことができなかつたな、と思つたからだ。

「なんだそれ？ 仲良くなつたんじゃないのかよ」

「昨日知り合つたばかりだよ。それに今日は神辺神社で待ち合わせだったし」

岡原の奴が呆れた顔をして首を横に振つた。あいつは僕とアナの間にいったいどんな関係を望んでいたのだろうか。対して白咲さんはどこか空を眺めてアルカイックスマイルを浮かべている。

「アナちゃんの肌真つ白で、目も青くてお人形さんみたいで……可愛かつたなあ」

「茉理は子供好きだよな」

「うん、大好き！ 将来はたくさんの子供に囲まれて……！」

そう言つた瞬間、ふいに僕と白咲さんの目が合った。すると彼女はまたもみるみるうちに顔を赤くして手と首の関節を奇妙に動かし、

複雑な心境をジェスチャーで表現する。言うまでもなく、僕はその動作の意味と白咲さんの心の内を理解することはできなかった。

それをかたわらで眺めながらケタケタとからくり人形のような笑い声を立てているのは岡原である。何がおかしいのか。いや白咲さんの言動がおかしいに決まっているのだが、そんな笑い方は明らかに失礼じゃないか。

「ちよつと健くん笑いすぎ!」

顔は真つ赤なままで白咲さんの抗議。

岡原は涙目で笑いをこらえて答える。

「はいはいごめん」

この野郎絶対謝る気がない。

だが白咲さんは、「もう」と一言付け加えただけで抗議を止めた。まるでそれが日常茶飯事かのようにやり過ぐす。見ていてどこか嫉妬を覚えてしまう仲睦まじい光景だ。

「さて」

と、岡原が伸びをしながら勢いよく立ち上がる。その顔は不愉快な笑いを湛えたままだ。

「俺は帰るから」

「は?」

白咲さんと僕は立ち上がった岡原を見上げて言った。奴の言ったことがあまりにも唐突だったからだ。僕たちは今勉強の合間に一息吐いているわけだし、そもそも岡原はずっと本を読んでいて宿題にはまったく手を付けていない。それなのに帰るとは、こいつは図書館に何をしに来たんだ。

「お前らは宿題あるだろ? 俺はテキスト持ってきてないし」

岡原がそう自信たっぷりと言ったものだから、つい僕は納得してしまう。持ってきていないならしょうがないじゃないか。うん、まあたしかにそうだ。

「じゃあな茉理、瑛」

「ち、ちよつと待って健くん!」

制止する白咲さんの声に岡原は気障ったらしく手を挙げて応え、そのまま消えてしまった。

岡原が下りていった階段を凝視したまま停止する白咲さん。その表情には何から来ているのかよくわからない緊張が浮かんでいた。白咲さんを置いていった岡原も変だが、追いかけない白咲さんもどこか奇妙だ。どうやら岡原の言うとおり恋人関係ではないことはたしかである。

「えっと……どうしようか？」

停止したままの白咲さんにそう問いかけても彼女からは憂いに満ちた笑顔しか返ってこない。僕の声が届いているだけまだましだろう。

「岡原と白咲さんが幼なじみだったなんて全然知らなかったよ」

返事はあまり期待せずに僕は呟くように言った。

「あ、うん。その、健くん高校に入ってからのはあんまり相手してくれなかったから」

そんな僕の考えとは裏腹に、白咲さんは嬉しいのか恥ずかしいのかどちらともつかない口調で、やはり微笑を浮かべながら答えた。よく考えれば白咲さんとまともな会話をしたのは今日はこれが初めてだ。

「そうなの？　すごく仲良さそうに見えたけど。二人が付き合っているのかと思った」

「そんな！　全然だよ！」

わずかに身を乗り出すようにして白咲さんは強く否定する。

「……えっと、ホントにただの幼なじみだよ」

まるで花がしおれるように目を伏せた。最後のほうなんかはほとんど言葉になっていない。

どう返事をしようか考えていると、白咲さんは潤んだ瞳で僕を見つめて、

「わたしたちも帰ろっか」

そして岡原と同じように伸びをする。その拍子にパステルピンク

の टीーシャツとローライズのジーンズの隙間から覗いた肌に僕は思わず目をそらしてしまった。白咲さんは首をかしげたが、僕は苦笑いでやり過ごしてただ「うん」としか言えなかった。

それから僕は無言のままトートバッグを肩にかけて出口へ歩き出す。

「ねえ、瑛くん」

図書館を出て外の酷暑を再び感じた瞬間、白咲さんはまっすぐ前を向いたまま僕の名を呼んだ。

「明日からの課外、取ってるんだよね」

僕は白咲さんから話しかけてくれたことに若干安堵しながら、

「うん。白咲さんは？」

「わたしも取ってるよ。その、なんていうか……がんばろうね」

白咲さんは期末の順位が一桁だったな、と思い出しながら僕は彼女の「がんばろう」と言う言葉を噛み締める。実際に努力している人間から言われると本当にやる気が出てくるから不思議だ。それが白咲さんの頑張りが伝播されているのか、それとも僕が単純だからなのかはわからないが。

「白咲さんは進路って決まってるの？」

「ううん。まだ進学するってことぐらい。志望校とかはまだ全然だよ」

「そっか」

白咲さんはばつが悪そうに愛らしいはにかみ笑いをみせた。恐らく彼女も僕と同様に、担任から口酸っぱく明確な進路希望を出せと言われているのだろう。しかし、それでも僕みたいな未だにまったく何も決めていない奴からすれば、進学を希望しているだけではないか先に先行っている。白咲さんが、すごく眩しく見えた。

「瑛くんは、えっと、将来のこととか考えてるの？ その……たとえば、詩人になるとか」

「ん……」

僕は何になるんだろう。詩人だろうか。それとも、普通の人だろ

うか。

それを決めるのは僕だが、自分でもよくわかるほど迷っていたのだ。

夏休みに入ってから今日まで、ずっとあの神社で詩を書き殴っていたのもそんな迷いからくる鬱憤を振り払うためだった。

薄々わかってもいたのだ。ずっとこんなことを続けるわけにもいかない。この夏が終われば、僕は嫌でも受験を気にしなければならぬし、それにこのまま大人になれば、いつかは詩は書けなくなる……いや、正しくは書かなくなる、だ。今よりもっと詩からはなれていく。僕にはヘッセのように『詩人になれなければ、他のなににもなりたくない』とは言い切れない。

……なんて、夕焼けに染まっているわけでもないのに、妙な感傷に浸るのは僕の悪い癖だ。夏の夕焼けはまだ遠い。そういえば、白咲さんはどうして僕が詩を詠むことを知っているのだろうか。彼女に話した憶えはない。

「瑛くん」少し大きな声で白咲さんが言った。「あのね、わたしね、今週はずっと課外の後図書館で勉強するつもりなの」

駐輪場で、白咲さんは赤いフレームの自転車の鍵を解除する。

「だからその……」

またうつむきそうになるが、背後から誰に叱咤されたかのようにすぐ背筋を伸ばす。白咲さんの頬は桜色に染まっている。それが日に焼けたからなのか、紅潮なのか判断がつけづらい——彼女は大きく息を吸った。

「よかつたら一緒に、宿題とか課外の予習しませんか」

僕を毅然にまっすぐ見つめる、けれどもどこか脅える子犬のような白咲さんの視線。

不思議な感情が湧き上がった。頭の中が沸騰するような、心が急いて今にも壊れてしまいそうな、そんな感覚だ。

これがどういうことか、僕は理解できない。いや、頭のどこかで理解しているのかもしれないが、今ここでそれを表現することが

できない。何もかもが唐突で、あらゆる感情と情報が津波のように押し寄せてくる。これは思考の停止でもあると同時に、感動ですらある。それを言葉で表現できないなんて僕は……

詩人失格だ。

「うん、よろこんで」

やっとでた言葉がそれだった。いかにも気障ったらしい言い方で我ながら嫌気がした。言った瞬間に僕はいったいどんな表情を浮かべていたのだろう。ひとつ確実なのは、自分の表情が気になったその途端に、とんでもなくごちない笑顔を作ったということだ。

白咲さんは僕の返事を聞くまで無意識に息を止めていたようで、返事と同時に大きなため息を漏らした。

「ほんと？ よかったあ……」

「僕も、そろそろ気合い入れて勉強しなきゃだめかなって気がしてたから」少し嘘をついた。「だから白咲さんが誘ってくれて、いきっかけになると思う」

「そうだよね、二年生の夏は大事って言うもんね」

さっきの緊張しきった表情とはうって変わって、白咲さんは心から安堵した笑顔を僕へ投げかける。

真夏の湿った風が吹いた。その風で揺れた前髪を押さえる白咲さんと目が合う。自分でも意識しないで彼女を見入っていたのだ。かわいらしく目線を外してうつむく白咲さんは、まくし立てるようにそれじゃあまた明日、と今日一番の軽い語調で言った。それから小さく手を振って自転車にまたがり、僕の帰る家とは反対の方向へと走り出す。

彼女のピンと伸びたその背中を、僕は彼女が角を曲がるまで固まっていたように見つめていた。僕の心臓の鼓動は、まだ速いままだった。

今日もまた快晴だ。

眠たい目を擦りながら、父さんが出勤するのを見送り、適当に朝ご飯を詰め込んだあと、久しぶりに制服のワイシャツに袖を通した。それから何度か深呼吸をして、家のドアを恐る恐る、静かに開ける。滑稽なほど大げさだが、これを無意識のうちにに行っていたのだから笑えない。僕はそれほどにまで学校に行きたくないのだ。

学校が嫌いなわけではない。夏休みとはいえ課外授業だし、また部活動も行われているだろうから、学校に行けば少なくとも一人は友達と会えるだろう。それは退屈になりがちな長期休暇のよいスパイスとなる。けれども体が動かない。墮落しきった僕の体は、あと四時間は睡眠を欲している。

一歩家の外に出ると、まだ八時過ぎだというのに蒸し暑い。この勢いじゃ昼過ぎには猛暑だろうな、そう考えただけでフラフラとめまいがした。

それでも僕は、確実に足を進めた。距離にして数百メートル。学校に行けば、気分が変わるはずだ。白咲さんが僕を待っているのだから。

「おはよう、瑛くん」

白咲さん教室に入ってすぐに声をかけてくれた。その澄んだ声を聞いて、できるだけの笑顔を作る。彼女のブラウスが輝いて見えた。

「おはよう、白咲さん。早いね」

白咲さんがふわりと笑う。挨拶はバツチリだ。

「授業の始まる時間、勘違いしちゃって……朝ご飯食わずに急いで来ちゃった」

恥ずかしそうに目を伏せて言う姿が妙にかわいらしい。

課外授業が行われる教室は、二階の僕と白咲さんのホームルームではなく三階にある、学期中は一年生が使う教室だった。授業開始まであと十分ほど、集まっている生徒は僕たちを入れて九人で、僕

が知り合いと呼べるような顔は白咲さんしかない。やはり盆休み直前にわざわざ学校まで出向くほど、勉強熱心な生徒は少ない。ここにいるのはよっぽど間抜けな奴か、よっぽど勉学に真面目な人かのどちらかだ。もちろん僕は前者で、白咲さんは後者なのだろう。僕が窓際の真ん中あたりにある席に着くと、白咲さんもその隣に座る。

窓からぬるい風が流れ込む。南の空には、もくもくと積乱雲が現在進行形で肥大化していくのが見えた。

「瑛くん」

「ん、なに？」

「瑛くん、外ばかり見てるから……何が見えるのになって」

白咲さんも少し身乗り出して窓の外を覗く。

「今日もいい天気だなと思って。ぼーっとしてた」

「そつかあ。あ、あの雲すごいね。きつと後で夕立があるよ」

白咲さんは少し嬉しそうに、遠くの雲を指して言った。ここ数日は快晴続きで、水不足が心配されるほど雨が降っていない。そのせいで気温も上がる一方だ。ここらへんで一雨あれば、少しは涼しくなるのかもしれない。

白咲さんが僕の顔をじつと見て、何か言おうとした、そのとき。教室に課外授業を担当する先生が入ってきた。白咲さんは苦笑いをして正面に向き直る。

先生は、校内一厳しいと評判の数学教師だった。

課外授業は、僕がセミの鳴き声を聞いたり、外の景色と白咲さんの横顔を見比べたりしている間に終わってしまった。彼女の横顔はとても優しく、そして可憐だった。

「それじゃあ一度家に帰って、二時に図書館で」

それが僕と白咲さんの、今後の予定である。非常に文化的かつ、爽やかな夏休みの過ごし方だ。自転車のペダルを漕ぐ白咲さんは楽

しそうだった。そう見えたのは、僕の心が踊っていたからだろうか。校門で白咲さんと別れて、焼けるような日差しの中を歩き出す。学校を出てすぐの角を曲がると、駄菓子屋の前で麦わら帽子をかぶった小学生がお菓子を選んでいるのが見えた。いまだき珍しい、作り物のような光景だ。

作り物と言えば、その小学生自体もまた作り物のようだった。陶器の人形のように白くて艶やかな肌は、強烈な太陽光線に屈することなく輝き、おまけに長くて細い髪まで金色に光っている。

ただ、僕にはそこまで詳しく観察しなくても最初からわかっていた。その小学生とはつまり、アナだったのである。

「アナ」

「おお、アキラか」

アナの麦わら帽子に付いた赤いリボンが揺れる。透き通った碧眼が僕を見上げた。アナは難しい顔から一転して嬉しそうな笑顔を浮かべている。

「昨日は急に帰ってすまなかった」

「それは大丈夫だけど……帽子、似合ってるね」

「そうか？ それはよかった。このような直射日光にはあまり慣れていなくてな。ところでアキラ。これはなんだ？」

と、アナが指を差したのは駄菓子屋の店先に並んでいる黒い棒、いわゆるふ菓子だった。

どうやらアナはそれが食べ物であること自体を知らないようで、僕に訊ねた後もいろんな角度からそのふ菓子を観察している。決して触れようとはしないあたり、初めて見るものへのわずかな恐怖心の顕れなのだろう。たしかにふ菓子は見ようによっては、危険物に見えなくもない。かなり慎重な見方をしなければいけないが。

「ふ菓子一袋と、ラムネ二本ください」

僕は駄菓子屋のおばさんに代金を支払い、受け取った片方のラムネをアナに差し出した。アナはラムネもまた不思議そうに眺めている。

「飲んでみて」

ラムネの容器は残念ながらというか、当然というか、ガラスのビンではなくペットボトルの容器なので、開けるのは容易だ。アナは僕の真似をして、恐る恐る口にラムネを運んだ。

「……これは」

「おいしい？」

アナは素直に首を縦に振った。またラムネのビンを傾け、炭酸が強いのかときおり目を細めるが、それでもぐびぐびと一気に飲み干しそうな勢いだ。

「なるほど。二酸化炭素を溶かし込んだ水を果汁と砂糖で味付けしたのか」

「ラムネって言うんだよ」

飲んだだけでよくそんなことが理解できるなと思ったが、今更アナの見た目に似合わなさすぎる知識量と頭の良さは驚くに値しない。どちらかというと出会って数日で驚きを忘れ去るほどに慣れてしまった自分に驚きだ。

「ところでアキラ。今日はなにをしていたんだ？ 朝からいつもの場所に行ってみたがお前はいなかった」

「今日はさつきまで学校だったんだよ」

ふ菓子をぱくつきながら、僕とアナは歩き出した。方向は僕の家、それはつまり、あの神社の方向でもある。

「学校か。アキラのことだから、詩学か修辞学の勉強だな」

「ん？ いや、数学だよ」

アナはパツチリとした目をさらに丸く見開いて僕を見上げた。その表情にはうつすらと驚きが顕れている。

「意外だな。アキラは数学にも興味があるのか」

「日本の高校生はみんなやるんだよ。興味があるとかないとかいう問題じゃないのさ」

数学なんてやっても将来何の役にも立たない、という中学生理論を展開するつもりはないけども、僕は数学が好きではない。興味は

完全にないのである。

「そういうものなのか」

アナは不思議そうに言う。

「まあ、私も数学はあまり得意ではないが、学んでおいて損はしないだろうな」

僕はアナのその言葉をごまかすように苦笑いをした。少なくとも刹那的な意味では損をしていると常々感じているからだ。

古い呉服屋さんを通り過ぎ、小さな交差点を左に折れてすぐ、僕とアナは神社に到着した。アナはあたかも以前からよく知っている場所のように、境内に入りすたすたと歩いて拝殿前の石階段で座った。明るい表情は僕も同じように座ることを待っているようだ。

「暑いな」

「ほんと暑いねえ」

急に地面に映る影が薄くなった。空を見上げると、灰色の雲がどんどん広がっていくのが見える。朝見たときはまだ遠くにあったあの雲だろう。もうすぐ夕立が降るな、そう思ったとき、アナがやけに落ち着いた声で言った。

「アキラは、ここが好きか？」

「なんだよ急に」

アナはどこか遠くを見つめている。鋭い目つきが少し怖かった。

「好きだよ。昔からよく遊んでた場所だし、静かだし、家からも近いし……」

鼻先に水が垂れた。すぐにつま先にも大粒の水滴が落ち、立ち上がる間もなく強い雨となる。

「やっぱり降ってきた」

僕とアナは急いで拝殿の屋根の下に移動し、夕立の様子を窺った。辺りは泥臭い雨のおいで満たされ、乾ききっていた境内の土は小さな水たまりができるほど潤っていく。青々と茂った木の葉に雨粒が落ちる度に細かな水滴となってはじけ、葉の色をさらに鮮やかに染め上げる。まるで葉っぱや樹が水を飲み干して生き返っていくよ

うだ。

アナはその景色を無言でじっと、キラキラ光る澄んだ眼差しで眺めていた。普段は知的で大人っぽい端正な横顔が、今は子供らしい好奇心であふれていた。

「きれいだな」アナがぼそりと言った。

僕はただ音もなく頷く。しかし僕が見とれていたのは、その風景の瑞々しい美しさではなく、アナの表情だ。

「アキラは、ここが好きか？」

「……うん。好きだよ」

「そうか」

アナは僕を見上げるとにつこり笑った。

「私も好きだ。気に入ったぞ」

まだ降り止まない雨の中に、アナは自ら進み出て天を仰ぐ。顔も服もすぐさまびしょ濡れになったが、アナはそんなことを気にせず、に雨と遊んだ。

「アキラ！」

くるりと振り返ってアナが叫ぶ。

「今日の夜、ここに来てほしい。アキラに見せたいものがあるんだ」  
「見せたいものって？ 夜って何時に？」

アナは答えずに、ただ笑って手を振った。

——僕の意識は、そこで途絶えた。

## 第二章『詩人は天上にて悩む』

### 第二章 『詩人は天上にて悩む』

#### 1 天の道

僕はゆっくりと目を覚ました。いや、目を覚ましたらしい。らしいというのは、それまで意識を失ってきたことさえ僕にとっては理解ができなかったらからだ。

辺りが真っ暗で何も見えない。頭の上でカチカチと時計が時間を刻む音がした。だんだんと感覚が冴え目も慣れてくると、そこが自宅の自分の部屋だということがわかった。制服のまま、ベッドに横たわっている。

「夜？」

時刻を確認しようと、枕元にあった目覚まし時計を取った。暗がりにつつすらと針が緑色に光っている。

午前二時二十一分。

……午前二時二十一分？

はっとして言葉が出なかった。真っ先に、白咲さんとの約束をすっぽかしてしまったことに気づいたからだ。とっさに携帯を見ると、やっぱりメールが届いていた。二件中一件は岡原、そしてもう一件が白咲さんだった。

『ずっと待ってたけど、そろそろ図書館が閉まっちゃうから帰るね。ごめん』

どうして白咲さんは謝ったのだろう。『ごめん』の一言が、胸に突き刺さった。返事をしようとするが、どう説明すればいいのかわからない。気がついたら夜だった？ 言い訳でももっとましな言いようがあるだろう。

とにかく記憶が混乱している。朝から課外授業を受けて、白咲さ

んと別れて、アナと会った。それから二人で神社に行つて、夕立が降ってきて……その先が思い出せない。まるで時間が切り取られたかのように、なんの記憶もないのだ。

『天体観測いつやる？』

岡原からのメールにはそう書かれていた。のんきな野郎だ。

僕と岡原、そして白咲さんを加えて行おうとした天体観測。白咲さんの顔を思い浮かべるだけで、足下がすぐわれるような感覚に陥った。

『図書館の約束、行けなくてごめんなさい』

新規メール画面にそう打ち込むが、その先が続かない。そしてこれだけで送ろうかと思つても、送信ボタンが押せない。白咲さんを怒らせてしまったかもしれないという思いが、焦りと後悔を僕の内侧から押し上げている。

やつとの思いで、恐る恐るボタンを押す。メールのデータが符号化され電波として飛び出していくまで、僕は息を止めていた。たったこれだけ、指を数ミリ動かすだけの動作がこんなに疲れることだったなんて。送信完了の文字が出て、僕は深呼吸と同時に額の脂汗をぬぐった。

途端に携帯が震えた。白咲さんがこんな夜中まで起きていたのか、それとも起こしてしまったのか。どちらにしろ、僕は正直に言つて返信があつたということに喜んだ。もし本当に白咲さんが怒つていて、嫌われたとしたら返事すらないだろうと考えていたからだ。

しかし僕の携帯が震えた理由は、白咲さんから返信メールが来たからではなく、そのかわりに彼女から電話の着信があつたからだつた。画面に表示されている発信者名を見て、また息をのむ。

『もしもし』

スピーカーの奥から、白咲さんの澄んだ声が聞こえる。

『急にごめんね。メールが来たから、まだ起きてると思つて』

「僕こそごめん、こんな時間にメールして」

予想外の電話にテンパつてしまい、声が震えているのが自分でも

わかった。

『……』

微かな吐息、夏虫の声、緩やかな足音。それが白咲さんのほうから聞こえるすべての音だ。

「白咲さん？」

『わたし、ちよつと楽しみにしてたんだよ』

彼女は悪戯っぽく軽い声色で言う。

『瑛くんのバカ』

「本当にごめん……」

『ねえ、星見える？』

カーテンと窓を開けて空を仰いでみる。天の川が視界いっぱいに広がり、僕は一瞬言葉を失った。深夜の星空に心が奪われ、急に胸が高鳴り始める。

電話の向こう側では白咲さんの足音が止まった。立ち止まって空を仰いでいるようだ。

「……白咲さん今どこにいるの？」

『お散歩中』

「一人で？ こんな夜中に？」

『大丈夫だよ。家からコンビニまでの道だもん』

「でも」白咲さんは僕の言葉を遮った。

『大丈夫ー。それとも、瑛くんが迎えに来て家まで送ってくれる？』

そんなふう言われて僕はまた言葉を詰まらせた。昼間の白咲さんとは態度が違いすぎて、どう返せばいいのか迷ってしまう。いや、それよりもこの白咲さんはどうしてこんなにも——積極的なのか。

心臓の鼓動が速くなり、耳や手足の先が熱く感じた。

『へへ。冗談だよ……じゃあね、瑛くん。また明日学校で』

白咲さんはくすくすと笑った後、電話を切った。結局僕はほとんど何も言えないままだったのが悔しくて、もどかしくて、四肢の力が抜けた。けれども心臓はまだドキドキと間隔の短い鼓動を続けていて、まるで何か悪い病気にでも罹ったみたいだった。

「また明日、か」

とりあえず、白咲さんが怒っていないということはその言葉で確認できたと思う。僕は安堵のため息を吐いて、ベッドに倒れ込んだ。窓からさつきと同じ夜空が覗いていた。古今東西様々な呼び名があるが、天の川、ミルキーウェイ、乳の環とはどれもよく言ったものだ。幾千、幾万もの星々が青白い幻想的な光を放ち、今にも降ってくるのではないかというくらいに輝いている。僕の街のような低い土地でもここまで綺麗に見えるのは、夜中で地上の光源が少ないからだろう。それ以外の理由としては、もしかしたら僕の感情が昂ぶっているせいもあるかもしれない。

眠気はないが、そつと目を閉じた。ずっと暗い部屋から星空を眺めていたせい、まるで夜空に漂うような感覚がする。こんなに心地の良い夜は初めてだ……

夜。その単語に頭の隅っこでなにかが引かかった。そして目を見開いて飛び起き、僕は部屋を駆け出た。

アナだ！

昼間、アナと神社で雨宿りをして彼女が去り際に残した言葉。それを今、急に思い出したのである。

『今日の夜、ここに来てほしい』

夜っていつなんだ？ 僕の記憶にはその答えはない。けれどなぜか、今からでも遅くない気がして、そして今すぐ行かなければいけない気がするのだ。

自分でもびっくりするほど速く走った。街頭も少なく、明かりの点いている家も少ない暗がりだが、もう数え切れないほど通った道筋だ。迷うはずもなく家を出てからものの数分で、あの神社の拝殿前、石段に腰掛けて空を仰ぐアナを見据えていた。

僕に気づいたアナはそつと顔を僕に向ける。わずかな星明かりの

せいで、アナが怖いほど魅力的な微笑みを浮かべているような気がした。

「来てくれて嬉しいぞ」

「……こんな時間に出歩くななんてだめじゃないか」

まったく白咲さんといい、アナといい、女の子が気軽に外出できる時間じゃないことを理解しているのだろうか。特にアナは起きているのすら怒られるような時間帯のはずだ。

「心配してくれるのか？ まあしかし、私ならこのとおり大丈夫だ」  
立ち上がったアナは僕のすぐ前に来て、僕を見上げながら言った。  
「アキラ、私はお前に言わなければいけないことがあるんだ」

「なに？」

小さな手で、僕の手を取りぎゅっと握った。アナの手は少し冷たい。

「私の名前は、アヴナルレ。アヴナルレ・グラスナヴリトヴィだ」

「グラスナ……？」

「グラスナヴリトヴィ。全天連合所属の一等外交官……この星を調査するために派遣された」

アナが碧色の瞳で僕を真摯に見上げつつ、難しい言葉を戯言のように並べるものだから、僕は神妙な面持ちになってしまった。実際は、あまりに唐突なうえ、アナの言う言葉がまったく理解できず、頭の上には疑問符がいくつも浮かんでいる。

「ちょ、ちょっと待って。いったい何の話？」

「お前に見せたいものがある」

アナは僕の問いには答えず、手を握る力を強めた。

「目をつむってくれ」

見せたいものがあるというのに、目をつむれとはまったくあべこべだ。心の隅でそう感じたが、僕はアナの言うとおりに目を閉じ、彼女の次の言葉を待った。

「私はこの街の、この国のものではない」

「まあ、そうだろうね」

急に耳鳴りがします。ふわりと生暖かい風が触れた気がしたと思えば、今度は遠くで白咲さんが僕を呼んだような気もした。

しかし、僕のあらゆる感覚は、アナの次の言葉でかき消された。

「そして私は……この星の生命体ではない」

## 2 新世界より

目を見開いた。もうアナがどんなことを言おうとも驚かないつもりでいたが、突然の宇宙人宣言の前では体のほうが先に反応してしまったのだ。

そして、啞然とした。

目の前に広がっていたのは星の海。夜中に見上げた天の川の比ではないほどの、膨大な数の星々が銀河や銀河団を形成し、それぞれが無邪気に輝いている。前も横も、後ろも上も、あらゆる方向から星が降り注いでいて、僕の視界は優しく、崇高な光であふれていたのだ。ふと足下に目を落とすと、そこにも当然のように幾何もの星があり、その光を見た途端に、僕の平衡感覚が失われてしまった。思わずよろけるが、無限の空間へ落ちていくような感覚とは裏腹に、足場はしっかりあることに僕の体はさらに驚く。どっちが上でどっちが下なのか、頭が完全に混乱していた。

ただわかるのは、僕は星を見上げているのではないということだ。星と共に立っているんだ。ここは天上の世界。僕や岡原が憧れたあの世界なのだ。

僕は今、宇宙にいるんだ！

無意識に涙が頬を伝った。目頭が痛いくらい熱くなる。素直に美しいと、心から思える光だった。

「ようこそアキラ。私の宇宙へ」

アナが優しく言った。

私の宇宙。なんてかつこいい言葉を使うんだ。

「……これは夢かな？」

「現実だ。アキラは今、母星を離れて宇宙にいる」

「信じられないな……きれいだ」

「アキラ。お前なら、この宇宙をどんな言葉で表現する？」

「どんなって……」

言葉が出てこない。こんなにも心が震えているのに、こんなにも涙があふれるのに、僕はまたこの気持ちを誰にも伝えられないんだ。心の底からふつつつとどす黒い感情が湧き上がった。その感情が一気に僕の体を巡り、さっきまであんなに美しかった星々の光が、今度は僕の体突き刺す鋭いトゲのように思えてきた。

今この瞬間から、この涙は純粹な感動によるものではなくなった。思ったことを言葉にできないという、僕の詩人としてのプライドが粉々に崩れてしまったことへの悔しさが、僕の涙腺を驚掴みにしているのだ。

「まあ、まだ時間はある。またお前らしい詩を読ませてくれ」

アナはそつと僕の手を離れた。僕がどんなに悔し涙を押し隠したとしても、聡明なアナのことだ、きっと僕の渦巻く恥辱心を機敏に感じ取って、そんなふうに言ってくれたのだろう。

「ありがとう……必ず、アナに最高の詩を読ませるよ。約束する」

僕は、精一杯の笑顔をアナに向けた。僕の詩を楽しみにしてくれている彼女に、無様な姿はもう見せられない。

「ああ。待っているぞ」

僕が涙をぬぐうのを待って、アナはズボンのポケットから目薬の容器のような小さな瓶を取り出した。

瓶を手にとって僕を見上げる。手を伸ばして、ついでにつま先立ちをしてから不満そうな表情を浮かべた。アナがなにをしようとしているのか、まったくわからない。

「しゃがんでくれ」

「なにをするの？」

「『適合化』を行う。舌を出して」

僕が突き出した舌にアナは瓶から一滴、どろりとした液体を垂らす。味はないが、一瞬だけ舌に鳥肌が立つような、不快な感覚があって、その後は何も起こらない。

「これは？」

ミル・マルヘオーウル

「簡易型言語翻訳機だ。微少な無機細胞がいればお前の第二の脳と

ヴァイナスク

なって、全天連合内の主要な公用語を音声、文章問わず理解する助けをする。神経系に作用するものだが、大丈夫だ。恐らく害はない」

「恐らくってどういうこと！？」

「エルザに使用して弊害があったという事例は存在しないが、お前たちがエルザであるとは完全に言い切れないからな」

さっきまでの感動からは一転、僕は巨大な不安感にさいなまれ始めた。

僕は夢にまで見て、何度も詩に詠んできた宇宙にいるが、ここに僕を連れてきたのはアナという宇宙人なのだ。客観的な事実だけを述べれば、僕はある夏の夜中、宇宙人に連れ去られたのである。完全にオカルトだ。

僕がまず驚かなければいけなかったのは、星々の美しさや自分自身の表現力のなさよりも先に、アナが――神社で突然出会った外国人の変な小学生だとばかり思っていたアナが、宇宙人だったということのはずだ。いや、それではアナが宇宙人であることへの驚きであって、本来ならば宇宙人の存在そのものへの驚きが必要ではないか？

「ちょっと待って。急に頭が冷えて混乱してる」

「私に答えられる質問ならなんでも答えよう」

答えられない質問もあるのだろうか。目の前の宇宙人はにっこりと愛らしく微笑んだ。

「えっと、まず……君はいったい誰？ 何者なんだ？」

ヴァイナスク

「私はアヴナルレ・グラスナヴリトヴィ。全天連合の……」

「その全天連合ってなに？」  
ヴィナス

「我々全天連合は、『我々』が知る宇宙の約三パーセントをその領域とする、汎宇宙組織だ」

アナの固い言い回しと相まってか、彼女が何を言っているのかま  
ったくわからない。もう少しわかり易く説明してほしいものだ。

「そして私はその全天連合の一等外交官だ」  
ヴィナス

「外交官ってことは、アメリカあたりが映画みたいに宇宙人と交渉  
してたってこと？」  
スラミール

「いや、お前たちの惑星は未だどの他文明とも接触していない。私  
はそのあたりも含め調査のためにお前たちの惑星に降りた」  
スラミール

「……で、君は本当に宇宙人なんだね？」

「お前たちから見れば、たしかにそうだ」

アナは僕の目を直視しながら言い切る。こんな状況、こんな場所  
にしながら我ながらバカな質問をしたと思った。答えはイエスに決  
まってるじゃないか。

「僕が、気を失っていたのも君のせい？」

「私が帰艦する瞬間を見られるわけにはいかなかったからな。催眠  
をかけて家に帰ってもらった」

「どうして僕を宇宙に連れてきたんだ」

「さあ…… どうしてだろうな。自分でもよくわからない」

言いながらアナはくすりと笑う。そして大げさに両手を広げ、

「他に質問がないなら、そろそろ外へ出よう」

「外って、まさか宇宙空間？」

「そうではない。『星の乙女』号へだ」  
デューヴィリン

言ってアナが胸のあたりに手をかざすと、その手の真下にぼんや  
りと青白く光る球体が現れる。そしてそれにアナが触れると光は四  
方に飛び散り、周囲は一瞬にして雑踏に包まれた。

僕とアナは人混みの真っ只中に立っていた。それもただの人混みではなく、着ている衣服はもちろんながら肌の色や体型、移動の方法などがそれぞれ異なる人々によって構成されているのだ。

最初に僕の目に映った人は、うすら青いつるつとした肌に、赤と黒のストライプ柄の燕尾服のようなジャケットを羽織っていた。頭は髪の毛の代わりに細い触手が生えていて、それらを後ろに投げ出している。その人の後から、土色の肌をした裸の一（少なくとも僕にはそう見えた）人が背中を丸めて、十本の足で駆け抜けていった。

「青白い肌をした背の高い種族はベロース。私と同じ星の出身がほとんどだ。十本足の、我々エルザの目には透明に映る衣服をまとっているのはキンハーク人。ヴィナスク全天連合内文明の種族ではもつとも可視光帯域が広い種族だ。あつちの大きな体のエウエピューブ人は、あ見えて一度も星間戦争を経験したことがない穏和な種族なんだ」

アナは歩き出しつつ、得意げに説明する。

「エルザっていうのはなに？」

「私やアキラのような種族のことだ。狭い意味では私がエルザで、スレスク・エルザアキラは大きなヒトと呼ばれる」

周囲をよく観察すると僕とアナの他にも、僕が見慣れたヒトの姿も数多く見えることに気づいた。アナの言う「エルザ」たちはみな、僕の街を歩いていたとしても不思議でないほど僕たち地球人によく似ている。

「僕たちそっくりだ」

「当然だ。形態的にも遺伝子的にも、他のエルザはアキラの星のエルザと同じだからな」アナがにやりと笑った。「交配も可能だ」

「そんな、ありえないよ。それって、別の惑星でも地球上で起こったような進化があつたってことだろ？」

「しかし実際に全天連合内ヴィナスクで体系的な相互関係にない文明の、五分ほどがエルザやその亜種が生み出した文明だ」

つまり地球人と同じヒトが、広い宇宙のそこら中にいるってことなのか？ 地球上に生命が誕生したということだけでも、科学者たちは奇跡だと言っているのに、文化や文明を持つほど高度な知能を有するまで進化をして、さらにまったく同じ姿をした生物がまったく関係のない場所で多発的に誕生する……数学が苦手な僕にだってそれが確率論で議論することすらバカらしいほど起こりえないことだというのはすぐにわかる。アナが宇宙人だと告白してからこっちの、一連の出来事がすべてドッキリだったというほうが、まだ納得いく話だ。

それでもアナは、そんなことが実際にあるのだという。

「進化論を基礎とする生物学には、収斂進化や平行進化という考え方があ。まったく系統の異なる生物が、同じような形質を持つ進化の仕方をする<sup>スラミール</sup>ことだ。お前たちの惑星で見たもので説明するならば、鳥の翼とコウモリの翼だな。鳥類と哺乳類であるコウモリは直線的な進化の系統上にある種ではないが、どちらも空を飛ぶために翼を持っている。より広い視点で見れば、この宇宙に存在するエルザが同じ姿をして、同じ遺伝子を持っているのも収斂進化と言えるのかもしれない」

僕はとうとう言い返す言葉を失った。アナの言葉の、強い説得力に屈したのだった。

アナとしばらく雑踏の中を歩く。はじめは気がつかなかったが、どうやら僕たちが今歩いているこの場所は、途方もなく大きなドームの中のような。はるか遠くに、天頂まで緩やかな弧を描く壁がうつすらと見える。その壁が実際にはどれくらい遠くにあるのかはわからない。

異星人たちの間を縫うように歩くが、アナが何を目印にして進んでいるのか、まったく見当も付かなかった。というのも、この道は僕が知っているような方法で舗装されておらず、かといって砂利道

というわけでもなく、ただ限りなく平坦かつ軽い感触で、絹のようになめらかなのである。車道、歩道のような区別もなければ、特定の区画に繋がる区切りもなく、目に見える標識もない。人々は個々の目的に合わせ、自分の進みたい方向へ自由に進んでいるようだ。

どこかを目指して軽快なステップでどんどん進んでいくアナと、あちこちにいる異星人をキョロキョロと見ながら恐る恐る進む僕が対照的だった。

しかし、急に道は狭まった。さっきまで目の前には何もなかった場所、一瞬にして雑多で少し薄暗い街が僕の視界に広がったのである。僕は思わず声をあげてしまった。地面のある一点を超えると景色が変わる仕掛けのようだ。

「ここから先は超次元位相空間だ。あまり私から離れないほうがいいぞ」

アナがぐるりと振り向いて言った。僕はあまりにも奇妙な感覚に支配されつつ頷く。

「ここはいつたいたいなんなの？」

ヴァイナスク

テューヴァリン

「全天連合第一移民船、『星の乙女』号。ヴァイナスク 全天連合の事実上の中心

地だ。文化的にも経済的にも、そして政治的にも、あらゆる種族や情報はここへ集まってくる」

「えっと、首都ってこと？」

ヴァイナスク

「全天連合は国ではない。だから首都という言葉は相応しくないが、感覚的にはそのようなものだ」

道の左右には、壁のようにそびえる巨大なビルが立ち並んでる。

地面の付近は商店のショーウィンドウがあり、多くの異星人たちが見たこともないような機械やくだものらしきもの、前衛的な配色の服などを店先に並べて売っていた。小さい路地や空き地には露天商までいて、僕は異星人たちと地球人の経済的なセンスの共通点に感心してしまう。

アナにはあまり離れるなと言われたけども、何しろこの「宇宙商店街」に並んでいる品々は僕にとってすべてが目新しいもので、好

奇心を刺激するものなのだ。さつきまでのただ人の波が動いているだけの風景とは違い、異星人の文化と生活感に満ちている。僕はついふらふらと、あちこちで足を止めて観察してしまう。

一人の異星人が、大通りから見える狭い路地の入り口で露店を開いていた。異星人は薄汚れた茶色い布を頭から被り、額から前に突き出た小さな角以外はよく顔が見えない。ただ二つの目――（この異星人目はたしかに二つなのだ）が緑色に妖しく光っていた。その目と僕の目が合った瞬間、僕は異星人が開く露天商へと吸い込まれていく。

「いらつしやい。『大断層の向こう側』の品、たくさんアルよ！」  
妙にねつとりとした声だった。アナからもらった自動翻訳機を介しているというのに僕にはこの異星人が片言を話しているように聞こえる。

「『大断層の向こう側』？　なんですかそれ」  
「リユリユー」

異星人が口笛のような音を出しながら言った。感嘆詞のようだ。  
ヴァイナスク

「全天連合は初めてか。観光土産なら惑星なんてどうか？　今なら六百ケル・ケヒムで大ご奉仕よ」

星を買う！　僕はその言葉に驚愕した。なんてスケールのでかい買い物だ。岡原が聞いたたらどんな顔をするだろう。

しかし六百ケル・ケヒムとはいったいどの程度の価値なのだろう。ケル・ケヒムというのは恐らく通貨単位だが、もちろん僕は宇宙での通貨なんて持ちあわせていないのだ。

「ああ、初めての全天連合ヴァイナスク観光だたね。もちろん熱量為替も大丈夫よ、どんな通貨も熱量に換算して快速決済よ！」

異星人は懐から銀色のしなやかな布のようなものでできた袋を取り出した。口を開いたところを見ると、お金をこの中に入れるという意味なのだろう。恐る恐る袋を覗いてみると、中は眩い光で満たされていて、思わず叫声をあげてしまった。

「大丈夫よ、エルザにはたぶん害、ないから」

また「たぶん」か、と僕は顔をしかめる。異星人は袋をさらに持ち上げて、僕のほうへやった。僕はまだ買うとは言っていない！

「強情ねー。ならおまけして五百五十ケル・ケヒムよ！ リュリュー、クウワヌズラ大損よ」

そう言つてさらに袋を近づけた。強引な押し売りに辟易したけども、星を買うことに興味を惹かれていたのもたしかだ。ほぼ無意識の内に制服の後ろポケットから財布を取り出して、中身を確認していた。

一万一千円と小銭が三百十二円。これはぼくの全財産である。

「今これだけしかないんだけど」

熱量為替でこれがいったいくらになるのか、僕にはわからない。お札と小銭を取り出して異星人に見せる。

「リュフォン！ しかたないねー、とりあえず入れてみるね」

異星人は半ば強引に、僕の左手ごと袋を被せた。袋の中はとても冷たくて、ぬるぬるしていてとにかく気持ち悪い。急いで袋から手を抜いて、何も異常がないかを確認する。

「んー、ちょうど五百ケル・ケヒムね。しょうがないね、これで売るよ」

どこか落ち込むようなトーンで言うと、異星人は敷物の上に並べてあった茶色い巻物を取り上げて僕に手渡した。

「これ惑星の所有権利書ね。惑星がどこにあるかはそれに書いてあるね」

「ちよつと待つて！」

僕が引き止めるか否かというその瞬間に、異星人と露店は消えてしまった。まるで初めから幻だったかのように、その場には何も残っていない。ただ僕の手の中にはボロボロでくしゃくしゃの巻物があるだけだった。

「アキラ！」

怒ってもいいものかどうかを、そしてその怒りをどこへ向ければいいのかを考えてつつも呆然と立ち尽くしていると、背後でアナの

呼ぶ声が聞こえた。彼女は珍しく眉間にしわを寄せ、息を切らしている。どうやら僕を探して走りまわったようだ。

「離れるなど言っただろう！ このあたりは空間が不安定なんだ。一歩間違えれば……」

アナの視線が僕の手の中にある巻物へ移った。眉間のしわが一層深くなる。

「アキラ、それはなんだ」

「惑星を買ったんだ」

アナがため息をつく。

「一応訊くが、いくらで買った？」

「えっと、一万一千三百十二円……五百ケル・ケヒムだったかな」

「権利書に作成された日付が書かれているだろう。一番上か右の行を読んでみる」

アナの言うとおり、巻物を開いてみる。上二行には日付と作成者という項目が書かれていて、それから下はきらきらと輝く霧がかかっていた。これもまた不気味な感覚だが、僕はその日付と作成者の名前を読むことができるのだ。アナのくれた自動翻訳機とやらはとことん便利なものだった。

「……平均ランシルビン暦二十八億千一年、第二十二日作成」  
ヴィナスク

「いいか、アキラ。平均ランシルビン暦というのは全天連合が誕生するよりもはるか昔に、アングガーヘという恒星系で使われていた暦だ。そんな昔の暦を使っていた時代に作られた権利書の星、しかも恒星ならともかく惑星が今、この瞬間も存在していると思うか？」

「残ってないの？」

「星の寿命はお前が思っているよりも短いのだ。それには様々な理由があるが……仮に残っていたとしてもたった五百ケル・ケヒムで買える星なんて、彗星が良くて小惑星だ。ただの氷と岩の塊に違いない。アキラ、お前は騙されたんだ」

アナは呆れたように頭を振る。僕は一瞬でも星を買うという夢を見たことを後悔し、怒りを通り越して自分の浅はかさを呪った。一

万一千三百十二円、僕の全財産よ、さようなら。

「まあ、これでわかっただろう。ここでの自由行動はアキラにはまだ早い。しばらくは私にぴたりくっついてるんだな」

そう言つてアナは眉間のしわを解き、僕に手を差し伸べた。手を繋いで歩けという意味だろうが、必要以上に子供に見られたものだ。子供扱いを受けて少しむっとしてしまった。気恥ずかしいのだ。

しかしアナは躊躇する僕の手を掴んで、にっこりと微笑んだ。僕も諦めて彼女に引つ張られることにした。ここでは彼女に着いて行くほかないのである。

#### 4 密航者

アナに手をひかれ、大通りをまっすぐ進んだ。すると突き当たりに白い大理石のような質感の物質でできた、周りよりもより高いビルが見え始める。そのビルの入り口前でアナは立ち止まり、霞んで見える頂上を見上げながら、

「これからアキラを<sup>ヴィナス</sup>全天連合の外交客員として登録する。これを済ましておかないと全天連合内で動きまわるのに不便なんだ」

言つてビルの中に進み入った。真っ白な床、真っ白な壁、真っ白な天井。病的なまでに白い内装が僕の不安感を煽る。僕の目線ほどの高さをもつカウンターが入り口から向かつて正面、左端から右端まで伸びていた。カウンターの向こう側では異星人たちが空中に飛び出ている文字や絵と睨み合っている。ここは彼らにとって、なんらかのオフィスのようだ。

アナは入り口からまっすぐ進み、カウンターの前に立って言葉を発する。異星人の言葉だろうが、僕の脳内にある自動翻訳機でもよく意味はわからなかった。カウンターの向こう側から緑色の鱗のような肌をした異星人が顔を出し、アナとなにやら会話をしはじめる。アナが不満そうな表情をしているのは、何か揉め事だろうか。

アナが踵を返し戻ってきた。

「まったく、ビナシオン人め。あの者たちと数の話を始めたら埒が  
あかない」

あまりアナらしくない、機嫌の悪そうな口調で言った。

「なにかあったの？」

「アキラの星からここまで空間移転をさせたときに、座標がめちゃ  
くちゃだったからな。少し文句を言っただけなら、こちらが指定し  
た値をすべて第八数体系に変換していたそうだ」

アナは僕と話するとき、できるだけ彼女が地球で覚えた日本語で話  
しているようだが、ときおりアナの言葉、つまり僕にとっての異星  
の言葉が登場する。その言語は僕の耳に音声として届き、そしてア  
ナが僕の舌に垂らしたおぞましい感覚をもたらしあの翻訳機によっ  
て、大まかな訳語が脳内に出現する。しかし、翻訳機によって訳さ  
れているその言葉の意味を僕はちっとも理解することができないの  
だった。今アナの言った『第八数体系』なんて言葉もそうだ。

「……それは困ったね」

だから僕はもうこれ以上理解しようとするのは止めにした。アナ  
に意味を訊ねたところで、また理解不能な別の言葉が出てくるだけ  
に違いない。そういえばアナと初めて神社で出会ったときも、僕は  
同じようなロジックで彼女の素性を探るのを止めたんだっただけ。

「本当に困ったものだ。記録上の数字が間違っているから始末書を  
書くはめになった」

アナがそう言ってため息をつこうとした瞬間だった。アナの瞳が、  
僕の肩の向こう側に焦点を合わせ、そして硬直した。信じられない  
といった表情で、口をあんぐりと開けている。アナの困惑した表情  
を僕はこのとき初めて見たのである。

アナの視線の先を追うと、黒く艶やかな衣服をまとった四人の異  
星人がビルの入り口からこちらへと向かってきているのが見える。  
異星人は僕の腿ほどもあるつかという屈強な腕を各々四本ずつ持つ  
ており、そしてその腕すべてを使って、何かを頑なに抑え込んでい

た。こちらへ近づいているにつれて、僕は彼らが何を抑えつけているのかをようやく知り、そしてアナの表情の真意を理解する。

異星人に抑えつけられた「少女」は僕に気づき、必死でその小さな口を動かした。しかし彼女の叫びは、恐らく異星人たちの装置によつてかき消されている！

「白咲さん！！」

彼女の代わりに僕が叫んだ。白咲さんは僕の声聞いてより激しく抵抗する。だが屈強な――その体軀は僕の二倍近くはあるのだ――異星人たちはより強く、痛々しいほどに白咲さんを床へと抑えつけた。

「やめてくれ！ 白咲さんを放して！！」

異星人たちに駆け寄り、白咲さんの手をとろうとするが、一瞬のうちに今度は僕が、異星人の一人に取り押さえられてしまう。背中へ回った右腕と、床に叩きつけられた顎が鋭い痛みを訴えた。

「グラスナヴリトヴィ第一上等官殿、『密航者』を逮捕いたしました」

黒服の異星人がアナの前へ進み出て言った。

「や、やめろ。今すぐその二人を開放するんだ！」

アナが真っ青な顔で言つて、短パンのポケットから長細い棒を取り出した。空中に飛び出た小さな板へ慌てて何かを書きなぐり、黒服へと突き出す。突き出されたほうはその板を読み、僕と白咲さんを抑えている異星人たちへ手を上げ合図を送った。

「白咲さん、怪我はない！？」

僕は開放されると同時に白咲さんを抱き起こし、彼女に問いかける。白咲さんは泣きそうな表情で僕にしがみついた。潤んだ瞳で僕を見つめながらなにか言おうとしたが、その声はまだ僕には聞こえなかった。

「どういうことだアナ。なんで白咲さんがここにいるんだ？ なんて声が聞こえないの？」

「わからない……だが恐らくお前たちの惑星からここへ転送される

スラルミール

とき、指定した個体数が混乱していたせいだろう。声は」

アナはまた手に持った棒で空中に半透明の板を呼び出し、そこへ文字を書く。アナの持っている棒はどうやらペンの役割をし、空中の板は黒服たちへの命令書で、アナはそれに署名をしているようだった。

アナから新たな命令書を受け取り、黒服の異星人の一人は白咲さんに手をかざす。異星人の、腕の太さの割にはやけに細長い指の先がチカチカと数回光った。

「瑛くん瑛くん瑛くん……」

白咲さんは何度も僕の名前を呼びながら、さらに強く抱きつく。肩が小刻みに震えていた。もともと細く可憐な声に、嗚咽が混じりさらに弱々しくなっている。僕はそんな白咲さんを抱きしめる代わりに、彼女の肩に掛かったポーチの位置を直し、

「大丈夫だよ。僕が……いや、アナがいれば安全だから」

自分で言って、僕自身がなんとなくぽけな存在なのだろうと思い知らされた。僕と白咲さんの境遇の違いは、一緒にアナがいるかどうかの違いだ。もし僕がアナと二人ではなく、たった一人でこの異形の生物たちが跋扈する場所へ放り出されてしまっていたら、きっと僕は白咲さんと同じように「密航者」として捕まっていたのだろう。

言葉も文化も、生まれた星すらも違う異星人たちに囲まれることがどれほど心細いことか。それを想像しただけでも身震いがした。けれども白咲さんは、僕が想像したより何倍も怖い思いをしたのだ。「アナ。白咲さんを今すぐ安全な場所へ連れていってくれ」

アナは暗い表情で、伏し目がちに小さく頷いた。

「アキラとマツリを外交客員として登録した。これでお前たちの全<sup>ヴ</sup>天連合内での身の安全は保証される」

僕とアナ、そして白咲さんは白く巨大なビルの上層階（アナは

たしかに『上』に行こう、と言ったのである）で、やっと椅子に腰掛けて話をする機会を得た。

しかしこの建物の内装というのは、どこまで行っても四方が白く塗りつぶされているようで、どうも落ち着かない。天井には電灯の類が一切ないが、部屋は光に満ち溢れていることに僕は気がついた。そのこともまた、この部屋から感じる精神的な不衛生さに関与しているのだろう。

「あ、ありがとうアナちゃん」

白咲さんは少し笑顔を取り戻し、アナがいつの間にか持ってきた、取っ手のないティーカップのような器に入った温かい液体を一口飲む。僕も飲んでみたが、味はとてつもなく甘く、そしてあまり香りのない紅茶のようだった。アナが供したものを疑うつもりはないが、僕や白咲さんにとっても害のない飲み物のようである。アナはこの飲み物を「シツアリヴル」と呼んだ。彼女の星の飲み物らしい。

「礼を言われることではない。むしろ私が謝らなければいけないのだ。お前があの場に……お前たちの惑星スラルミールのあの場所にいると知っていれば、然るべき対処ができたのだが」

「あの、えっと……聞いてもいいかな？」

「私に答えられることならば何でも聞いてくれ」

アナが僕にも言ったように、白咲さんにもまた同じような口調で言う。

「ここはいつたいどこなの？」

「……ここは、お前たちの惑星の外、つまり宇宙だ」  
スラルミール

「宇宙……じゃあ、あの大きな黒い服を着た人たちやアナちゃんは宇宙人……」

「平たく言えばそういうことになる」

「その……アナちゃんと瑛くんは、あの神社から二人で宇宙旅行に出かけたってこと？」

「そうだな。正解だ」

白咲さんは突きつけられたはやめちゃんな現実に対して、意外に

もすんなりと順応してしまっているようだった。僕は驚きを通り越して、白咲さんの強かさに感心してしまった。僕でさえ未だに宇宙にいる事実を半ば夢ごちに感じているというのに、どうして白咲さんはこんなにも簡単に受け入れられるのだろうか。

白咲さんは自分を納得させるように数回深呼吸をし、今度は僕に眼を向ける。

「つまり瑛くんはアナちゃんとデートしてたってことだね」

子猫のような面差しに、悪魔のような眼差しをもった表情だった。少なくとも僕にはそう感じられた。

「いや、そういうことじゃないでしょ、どう考えても！」

「いいんだよ、別に。あ、そっか。図書館に来られなかったのもひよっとして」

「それは違うよ！ 自分でもよくわからないけど、それだけは違う」  
白咲さんはうふふ、と小川のせせらぎのように笑い、そしてまたシツアリヴルを口に含んだ。

なんだろう、この気持は。僕にはここが宇宙空間だとか、アナが宇宙人だとかいう以前に、白咲さんと話さなければいけないことがたくさんある気がする。

僕はアナに無言の視線を向け、少し席を外してもらうように頼んだ。アナは機敏にその視線の意味を汲みとってくれたし、また少し同情のような視線を僕に送る。音もなく立ち上がり、僕と白咲さんから少し離れ、そして白い背景の中に消えた。

僕と白咲さんはなんの支えもない、空中に固定されているテーブルを挟んで向かい合っていた。さて、何から話したものが。

「もう落ち着いた？」

「うん。ありがとう、瑛くん」

ぎこちない笑顔が僕と白咲さん両方の顔に張り付いている。

「アナちゃん、不思議な女の子だと思ってたら、宇宙人だったなんてね……びっくりだよ」

「僕は今でも半信半疑だよ。夢じゃないかと思っちゃう」

短い会話と長い沈黙が交互に訪れる。

意を決して核心に迫るべきだろうか。

「あの、図書館の約束」

「そのことは全然気にしてないから、ほんとうだよ」

白咲さんが僕の言葉を遮るように言った。今は彼女がうつむいていてよく表情がわからない。

「『そのことは』ってことは、何か別のことで怒ってるんだよね」

「別に怒ってなんかないよ」

ピシヤリと言われてしまい、僕は言葉に詰まった。自分から白咲さんと二人きりになったけども、空気が妙にピリピリとしていて居心地が悪い。加えて四方どころか上下までが距離感が感じられない白い壁だ。あらゆる感覚が麻痺して、頭がおかしくなりそうだった。……ほんとだね、自分でもよくわからないの」

沈黙を切り裂いて、ふいに白咲さんが声を震わせながら呟くように言った。

「約束のことはもう、本当に怒ってないよ。ちょっと寂しかったけど、今は平気。瑛くんにもいろいろ事情があるみたいだから……それよりも夜わざわざメールくれたことが嬉しかったくらいだもん」

白咲さんの完全に伏せた顔からきらりと光る雫が落ちる。

「わたし、知ってたんだ」

「何を？」

「瑛くんがね、いつもあの神社で詩を書いてたこと、知ってたんだ。だから夜、瑛くんからメールが来て、電話で話したあと……神社に行けば瑛くんに会えるんじゃないかって思っちゃったの。そんなことありえないけど……」

けれども僕は、そこにいた。

「びつくりしたよ。けどすごく嬉しかった。すごくドキドキしたんだ。でもね、瑛くんは、アナちゃんと一緒にいた」

「それは、アナが夜あの神社に来てほしいって言ってたから」

言ってからしまったと思った。白咲さんは一瞬顔を上げて僕の顔

を窺い、そしてまたうつむいてしまう。彼女の頬を伝う涙を、僕は見逃さなかった。白咲さんとの約束は破るのにアナとの約束はきちり守った、とそう思われたのだろう。

「二人が何を話してるかは全然わからなかったけど、瑛くんとアナちゃんが手をつないで、そしたら二人が急に光に包まれて、わたしすごく不安で、怖くなって、瑛くんの名前を呼んだんだ」

あのとき、つまり僕があ神社からここへ転送されるときに聞こえた気がした白咲さんの声は、本当に彼女の声だったのだ。

「気がついたら全然知らないところにいて、見たこともない人たちがまわりにいっぱいいて、瑛くんを探してもどこにもいなくて、またすごく怖くなって……しばらくしたらさっきの黒い服を着た人たちに声をかけられたの。でも何を言ってるのかわからなかったし、わたしが何を言っても通じなかった。だからわたし、逃げようとしたら捕まって、ここまで連れてこられたの」

白咲さんはとうとう、両手を顔に押し当てて泣き始めてしまった。抑えてきた不安や恐怖が、これまでの過程を思い出して、再び溢れてしまったのだ。

僕には優しい言葉をかけることも、白咲さんの肩を抱きしめてあげることもできなかった。彼女が感じた苦痛を、生ぬるい想像に置き換えて同情する愚かさど、なによりも甲斐性のない自分自身が悔しい。

「ごめんね、わたし何言ってるんだろ……さっきの話と全然関係ないよね」

「いいんだ。少しでも気が楽になるなら、なんでも話してよ」

「ありがとう。瑛くんが助けてくれて、嬉しかった」

「僕はなにもしてないよ」

違う。なにもできなかったのだ。白咲さんを助けたのはアナなのだ。

「そんなことないよ。今だって、ほら。瑛くんが話を聞いてくれて、落ち着くことができたから」

白咲さんが顔を上げてにつこりと微笑む。ぎこちない笑顔と赤らんだ瞳がとても弱々しい。

「ほんとうにありがとう、瑛くん」

僕はただ頷くことかできなかった。白咲さんのために何もできない後ろめたさが僕の心を締め付ける。

白咲さんは肩からかけた小さなポーチからハンカチを取り出して、涙を拭った。

「白咲さん、どうして夜中に一人で散歩なんかしてたの？」

「……瑛くんに会いたくなかったからかな」

顔から火が出るような心持ちがした。女の子というものは、どうしてこういう言葉を恥ずかしげもなく言えるのだろうか。ひよつとしたら、白咲さんは僕よりも詩人に向いているのかもしれない。

ふと白咲さんの視線が僕の胸元へと移る。彼女は椅子に腰掛けたまま僕の隣へ回りこみ、そしてポーチからハンカチと入れ替えに小さな箱を取り出した。裁縫セットのようだ。

「動いちゃだめだよ」

言うつと箱からさらに針を取り出して、馴れた手つきで糸を通す。僕が自分の胸を確認すると、制服のワイシャツについていたボタンが無くなっているのがわかった。黒服たちに床へ叩きつけられたときに取れてしまったようだ。

白咲さんは替えのボタンをシャツに充てがい、縫い始める。さっきまで泣きじゃくっていたのが嘘のように、彼女の表情は穏やかだ。静かな吐息と、芳しい髪の毛の匂いのせいで僕の心拍数は比例的に跳ね上がっていく。文字通り口から心臓が飛び出そうなほどだった。

「ボタンと糸の色がちよつと違うけど……また家に戻ったらちゃんと直してあげるね」

ものの一分もたたない内に、僕のシャツはすっかり修復されてしまっていた。白咲さんの言うとおり、たしかによく見れば既存のボタンと糸とは少し色が異なる。しかしそんなものは近くで目を凝らさなければ分からない程度で、僕は素直に白咲さんの腕前に感心し

ていた。

「白咲さん、上手だね」

「見直した？」

彼女はまたいたずらっぽく笑う。とても魅力的で甘美な、そして麻薬のような笑顔だ。白咲さんの笑顔を見るだけで僕の頭は真っ白になり、なにも考えられなくなる。その視線が、耳をくすぐる笑い声が、心を揺さぶり、息をするのも忘れさせる。この笑顔を、僕はいつまでも見ていたいと思っていた。

アナが戻ってきたのはそのときだった。さっきまでのティーシャツ・短パンの格好とはうって変わって、紺色のスーツのような彼女にはあまり似合わない（と、地球人の僕には思える）、フォーマルな服へと着替えていた。

「さあ二人とも、そろそろ出発するぞ」

「アナちゃん、これからどこへ行くの？」

アナは手を広げて、僕と白咲さんの顔を交互に見比べる。

「どこへでも。お前たちの望むところへだ」

## 5 完月の夜

ルスネティ・オステイ・ズディオル

「それなら、わたしはアナちゃんの星を見てみたいな」

白咲さんが拳手をして無邪気に答えた。アナは少し驚いたような表情をして、僕に目配せする。僕の意見も求めているようだった。

「僕もアナの故郷に行ってみたい。どんなところなの？」

アナは一瞬押し黙った。僕たちの答えがよっぽど意外だったらしい。アナは言葉に迷い、その淡い桃色の唇を何度か開きかけ、その度に決まりが悪そうに閉じる。

「私の星は…… 厳しい自然が支配する、美しい星だ」

彼女は一つ一つの言葉を噛み締めるようにして言った。水晶のように透き通ったアナの瞳の奥に、彼女の遠い故郷への慕情が見えた

ような気がして、僕は息を飲む。たとえ宇宙人であっても、過ごしてきた文化や環境が違ったとしても、自分の生まれた場所を特別な場所だと思うのは共通の感覚なのだ。

アナは取り繕うように、いつもの語勢に戻って続けた。

「私の星の名はアリメンシル。スナール系の第四惑星だ。支配種族はエルザとベロース。そうだな、たしかにアキラにとってはいい選択かもしれない」

「僕にとつて？　どういう意味？」

アナが不敵な笑みを浮かべて鼻を鳴らした。

「それは行つてからの楽しみだ」

僕は啞然とした。だらしなく開いたままの口からよだれが垂れそうになるまで気づかないほど驚いたのである。僕ほどではないものの、白咲さんもまた目を丸くして信じられないという顔をしていた。「ここから先が、私の星……アリメンシルだ」

「は？」

目の前にはやはり光沢を帯びた白い壁があるだけだった。ここから先？　彼女の言う「ここ」とはいったい「どこ」のことだ？

「そんなに驚くことはないだろう。お前たちはお前たちの惑星からこの『星の乙女』号までほぼ同じ方法で移動したのだ。あのときは一度光子変換をしてからだったかな」

アナが彼女の小さな手で触れると、眼の奥が痛むような気がするほど真つ白だった壁は音もなく消えた。その先には、複雑で美しい幾何学模様が描かれた、毛足の長い絨毯と木目調の壁の広い部屋が広がっている。家具や調度品の類は一切なく、一見してなんのための部屋かはわからなかった。

僕は無言でその部屋へ進んだ。足元は見た目通りふかふかとした感触で、少し歩きにくく感じたが、さっきまでの愁いの塊のような部屋でないことに僕は安心した。どこか欧米風で格調高さは感じさ

せるものの、この部屋を造ったのは僕が見知っている人類と同じセンスを持った人々に違いない。

「アヴナルレ！」

高い女声が部屋に響いた。その声が僕たちの背後から聞こえたので振り向くが、僕は声の主を確認するよりも先に、そこに何もなかったにまた驚いてしまった。つまり、僕たちが通ってきたあの白い部屋とその出口は、すでに次元の彼方へと消え去っていたのである。アナと同じ紺色のスーツを着た少女がこちらへ走ってきた。その身長、そしてアナの本名を呼んだことから、彼女は恐らくアナの言うところの「エルザ」、アナの同郷の輩なのだろう。肩のあたりで切りそろえた赤髪を激しく揺らし、少女はアナに抱きついた。満面の笑みで嬉しそうにアナに頬擦りをしている。

「さっき部下たちから受け取った書類にあなたの署名を見たの！だからあなたを探していたのよ。それでもしたらカンジヴァハに帰ってるんじゃないかと思って」

「久しぶりだな、シーシャ……ただいま」

「お帰りなさい、アナ」

アナもどこか安心したような、優しい笑顔をしていた。

僕と白咲さんは親しそくに再会の喜びを分かち合い、抱き合う二人の少女をしばらく無言で見つめる。突然の出来事で何を言えいいのかわからないのも理由のひとつだが、二人が睦まじく話している姿が人形のように美しく、可愛らしく思えたからだった。

アナはひと通り少女と話し終えると、僕たちに向き直って、

「紹介しよう。私の幼なじみで同輩の、シーシャムレ・ミュツェンティヴィだ」

「アナ、このこの方たちは？ズレースク・エルザかしら？」

シーシャムレが僕と白咲さんの顔を下から覗き込む。真っ黒な深い瞳が明らかに僕たちを訝しんでいた。

「僕は青葉瑛だ」

白咲さんは首をかしげた。翻訳機を飲んでいない白咲さんにはア

ナとシーシャムレの会話や、二人が話す彼女たちにとっての「母語」は解らないのだと、僕はこのときになってやっと気づく。あとで白咲さんにも飲ませようアナに言おうと思った。

しかしシーシャムレまでも首をかしげているのはなぜだろう。僕の名前は、彼女たちアリメンシル人にとってそんなにも奇妙な名に聞こえてしまうのか。

「この二人はアキラにマツリ。遠い星から来た、私の新たな友人だ」  
アナはシーシャムレ言った。それからアナが愛想笑いをしたのを見て、僕ははっとした。

僕には彼女たちの言葉をあたかも自分の母語のように聴くことはできても、彼女たちに僕の言葉が通じるわけではないのだ。アナがくれたのは全天連合の言語を僕に翻訳してくれる機械であり、僕の話す言語はずっと日本語のままなのである。

宇宙に来てから今まで、僕がアナ以外に話をした異星人は、あの妖しげな露天商以外にはいなかった。露天商の異星人は、僕の言うことを無視してガラクタを売りつけたと思っていたが、それは完全に僕の思い違いなのである。彼は初めから、僕が何を言っているのか理解できなかったのだ。

「そうなの。あなたも大変ね。カンジヴァ八にはいつまでいるの？  
休暇じゃないんでしょ？」

「ああ。いつまでいるかはわからない。しばらくはアキラとマツリの行きたいところへ付き合うつもりだ」

そう、と呟いてシーシャムレはまた僕たちの顔色を窺った。僕と目が合うと、目を細めて睨めつける。どうやら僕は、彼女に好く思われていないようだ。大事な友人であるアナをとられたとも思っているのか、はたまた言葉が通じない——価値観を共有することができない僕たちへ嫌悪感を抱いているのかはわからない。白咲さんも、シーシャムレの凍りつくような視線に脅えていた。

「じゃあ暇になったらまた連絡してちょうだい。それから、外に出るなら体調に気をつけて。今日は『完月』よ」  
ルスネスト

シーシャムレは言つてアナの頬へキスをした。

絨毯を踏みしめながら僕たちは部屋を出た。人影を察知して自動で開くスライドドアは、僕が知っているそれと同じものだが、アナたちのようなエルザに合わせて作られているために、ごく一般的な日本人高校生である僕でも頭をぶつけてしまいそうほど小さく作られていた。

廊下に出ても、景色はあまり変わらなかった。木目調の壁、細かな模様の絨毯が左右に二百メートルほど続いている。さっきのドアもそうだが、テューヴィリン号の中で経験したような、アナたち全<sup>イナスグ</sup>天連合と地球文明との技術力差は、ここではあまり感じられない。むしろ親近感の湧く共通点のほうが多かった。あの白に囲まれた部屋とは違い、この建物にはシャンデリアに似た照明装置があるし、なによりもどこから流れてくる音楽が、僕のを刺激した。

「この音楽はなんて曲なの？」

僕はアナに訊ねる。ゆつたりとした曲調で、不思議と耳の奥に残る可愛らしいメロディだ。

「これは『あなたとはどこで会えるのかしら』。ここ、カンジヴァハを舞台とした歌劇『デムタールとストルツアレ』の中で一番有名な曲だ。古いが平易なシュヴァミルで書かれた歌だよ」

つまりはミュージカルかオペラのようなものの曲らしい。シュヴァミルとは、アナの母国語であると彼女は説明した。

廊下を歩きながら、アナは鼻歌で曲の旋律をなぞった。それから、小声で囁くように歌をうたう。ずいぶんとご機嫌な様子だ。

「わたしの心を唄う人／ヒヌメシュトの丘で唄う人／あなたの詩をもつと聴かせてくださいまし／あなたはわたしの耳をひとり占めするのです」

わたしの耳は求むのです／あなたの詩を求むのです／わたしに詩をもつと聴かせてくださいまし／それならばわたしはあなたを愛す

のです

わたしの愛する人／愛しいわたしの詩人／わたしにあなた様をくださいまし／わたしはあなたを愛すのです」

特別上手な歌ではなかった。けれども、アナの透き通った声は、僕の耳にとても優しく響いた。シュヴァミルの鋭いアクセントで形成された素朴な押韻が強く印象に残る。この歌詞を書いた人はきつと、繊細な感性とそれを素直に表現する力をもった詩人に違いない。僕は遠い宇宙の彼方で出会った詩にそんな思いを馳せていた。

廊下の突き当たりを左に折れると、すぐに大広間へと出た。僕たちがアリメンシルに降り立った部屋よりもさらに広い部屋で、床面積だけでも軽く十倍ほどはあるだろう。部屋のあちらこちらでは小さなエルザたちが椅子に座って談笑したり、お茶（シツアリヴルだろつか）を飲んだりしていた。天井から垂れる照明が部屋の隅まで暖かな光で満たし、やはりこの建物のどこから穏やかな音楽が漂っている。

部屋の端が霞むほどの広さや、エルザたちと彼らの身長に合わせられた家具や食器をのぞけば、そこはまるでお洒落な喫茶店か上等なホテルのロビーのようだった。

僕たちがその中を抜けていくと、エルザたちの何人かが僕たちに視線をよこす。彼らの樂園では僕と白咲さんのようなヒト、アナの言葉を借りればブレースク・エルザは珍しい存在らしい。だがその小さな瞳はすぐに僕たちから外され、お喋りや作業に戻っていった。「アナちゃん、ここはいつたいどこなの？」

白咲さんが目を輝かせながらアナに訊ねる。怯えた様子はなく、むしろ嬉しそうだ。もしかしたら白咲さんには、ここが愛らしい人形たちの館のように思えているのかもしれない。

「『諸芸の城』。アリメンシルの、そして現在では全天連合のあらゆる芸術はここに集まる。この棟は音楽棟だ」

「くらひん……？」

白咲さんは苦笑いをしながらアナの言葉を繰り返す。

「アナ、白咲さんには君たちの言葉はわからないんだよ。僕みたい  
に君から翻訳機をもらってないんだ」

「そういえばそうだったな。すまない、これを飲むといい」

アナは言って、今度は胸ポケットから薬瓶を取り出した。中には  
あの、銀色に煌く粘度の高い液体がたつぷりと入っていた。これが  
舌に触れたときの感覚は、思い出ただけでも恐ろしい。

「ここで少し待っていてくれ。私は荷物を取りに行っていくる」

白咲さんに翻訳機の詰まった瓶を渡し、アナはどこかへ歩いて行  
ってしまった。僕と白咲さんは近くにあった椅子に座り一息つく。

白咲さんが瓶をまじましと見つめ、神妙な面持ちで言った。

「瑛くんもこれを飲んだの？」

「うん、まあ。大丈夫だよ、僕は今のところ平気」

ふうん、と生返事が返ってくる。そして白咲さんは瓶の中身を一  
滴、舌先に垂らした。途端に身を縮め、苦々しい顔で言葉にならな  
い声を挙げた。僕は思わず笑ってしまう。

「ひ、ひどいよ瑛くん……」

「ごめん。期待通りの反応だったから」

少し膨れた表情がこのうえなく可愛らしかった。つい昨日まで、  
僕は白咲さんがこんなにも表情豊かな女の子だとは思っていなかった  
が、今では僕の彼女に対する評価は百八十度変わってしまったとい  
る。そんな彼女の一面を知ることができて、それだけでも宇宙に來  
れてよかったと思えた。

白咲さんは隣のテーブルに座ったエルザたちの会話が聞こえると  
喜んだ。これで彼女の不安がひとつ取り除けたかと思うと、僕もま  
たすこし安心した。

部屋に響いていた曲が静かな余韻を残しながら終わったとき、ア  
ナは駆け足で帰ってきた。腕に茶色の布を抱えている。

「待たせたな。二人とも、これを着てくれ」

アナが差し出したのは帆布のような生地で作られたコートだった。  
織り目は粗いが、さわり心地はとてもなめらかで、軽い素材が使わ

れているようだ。

僕たちは再び歩き始めた。しばらく行くと、ロビーを抜けて玄関らしい大きな一（と言ってもやはりエルザサイズである）扉が現れた。アナはまだコートを手に持ったままだった僕たちに、もう一度着るように急かした。

「夏服にコートってのもなんだかかつこわるいな」

僕は半ば冗談のつもりで呟いた。しかしアナは真面目な顔をして、強い語調で言う。

「シーシャも言っていたように、今日は完月だ。ルズネットスト お前たちの服装ではたちまち凍えてしまうぞ」  
ルズネットスト

「完月っていうのはなに？」

コートに腕を通しながら訊ねた。

「アリメンシルは二つの月を持っている。その月が二つとも満月を迎える一年に一度の日。そしてここカンジヴァ八では、一年を通してもっとも寒い夜となる日のことだ」

アナは言くと、玄関の扉を開いた。開けた端から、内側に強い冷気を伴った風が舞い込んでくる。

外は白銀の世界だった。うず高く積もった雪が視界の両端を覆い、真ん中には一本だけ、石畳の道が延びている。暗い空からは静かに小米雪が舞い落ち、街灯に照らされてひと粒ひと粒がきらきらと輝いていた。

僕たちのほぼ真上の空に、雲に覆われぼんやりとした光を放つ光源がたしかに二つあった。

## 6 詩人天国、あるいは地獄

僕は急に冷やされてかじかむ手をコートのポケットに突っ込んだ。隠すもののない頬がちりちりと痛む。吐き出す息が瞬時に白くなつて空中を漂う姿をみて、すっかり地球の真夏を忘れてしまっていた。

雪と氷に覆われた景色はまるで、この世の終わりを描いた絵画のようだった。けれどもアナは優しい微笑みを浮かべ、いたって温かな目付きでその風景を眺めている。僕にとっては過酷で生命の面影を感じさせない景観だが、ここが故郷であるアナにとっては厳しくも懐かしい、愛すべき憧憬なのだろう。

肌を刺す風が舞う中、僕たちは歩いた。道には雪が積もらないように仕掛けがされているらしく、路上に落ちた雪は一瞬で溶け、砂地に水が滲み込むようにどこかへ消え去っていく。こんな技術があるのならば、周りの雪もどうにかできそうなものだが、どうやら地球人類である僕と、アリメンシル人との、自然に対する価値観の違いは想像以上に大きいようだ。

「アリメンシルはかつての戦争によって、二千年ほど前まで全球が氷と雪に覆われた星だった。私たちの祖先は地下で暮らすものと宇宙空間で暮らすものに分かれ、暖かな土に恋焦がれながら数千年を過ごしていたのだ。その間、私たちが学んだのはありのままを受け入れることだった。私たちは母星の抗えない自然には手を加えないし、必要のないものを築くことはしない。この『諸芸の城』も、全球凍結以前からここにあった城を改築して造られたものだ。たしかに棟がいくつも分かれていたり、こんな寒い日に外に出て移動しなければいけないのは不便に思えるかもしれないが……これが私たちの答えなのだ」

アナはやけに興奮した様子で、饒舌を振るった。彼女の見た目に似合わない知識と言葉遣いは、彼女たちエルザの歴史に起因するものなのだ、と僕は少し納得する。

一分ほど道を進むと、文芸棟の扉が見えた。表面には曲線を主体とした細かな文様と、それに融けあうように文字が浮き彫りにされている。その文字はアナがサインに使ったり、あるいは城の各所にある案内板に書かれた文字と同じ物だったが、僕の中の翻訳機を通しててもよく意味がわからなかった。僕はアナに書かれた言葉の意味を訊ねた。

「古いカンジヴァ八方言のシュヴァミルだ。『ビョードワズたちよ、我らに永遠の靈感を与え給え』」

アナは静かに扉を開く。文芸棟の中には、チョコレートのような甘い匂いがかすかに漂っていた。

入っていきなり、目の前には黒い石造りの柱があった。柱には扉と同じ文字がびっしりと刻まれている。こちらに書かれているのは、人の名前のようだった。柱は玄関に等間隔でいくつも並べられていて、いくつかはまだ名前の書かれていない、まっさらで艶やかな石の表面を露にしているものもあった。

柱の間を縫って、またさらに奥の扉を開いた。中の部屋の天上は高さが百メートルほどもあるつかというほどで、その天井に向かつてたくさんの書架が大樹のように伸びていた。エルザたちが梯子やクレーンのような機械、あるいは何層にも設けられたキャットウォークを使って書架に収められた本を取り出している。

「ここがアリメンシルの、そして全天連合の言葉による芸術すべてが一堂に会す場所。アキラ、ぜひお前を連れてきたかったところだ」アナが手を広げて言った。僕は立ち並んだ書架とその巨大さ、収められた本の数に圧倒され言葉を失う。

僕は恐る恐る右手側にあつた書架に近づき、そこへ刺さっていた本を一冊取り出した。本には『アシカスキロンの朝』と題されていた。

「それは二百年前の詩集だ。著者はミール・ロリン・ウエシャミヌウ、北方派の詩人だな」

白咲さんが隣から『アシカスキロンの朝』を覗き込む。初めに置かれた詩は二十二行からなる短い詩だった。

「エルザとベロース 如何にして／出会い 戦い 愛しあつたか／すべてはここから始まった／アシカスキロン 戦が乙女

遠きケンシャルの時代にて／生まれ落ちし街の名は／紅き人と青き人の出会う場所／アシカスキロン 戦が乙女

お前は飲むのだ／紅き血と青き血を／そしてお前は潤うのだ／紅

き血と青き血で

愛に飢えたお前の子らが／お前の内で叫び続ける／紅き人を青き人へ 青き人を紅き人へ／アシカスキロンは愛を知る

されどもお前は戦が乙女／種の理は曲げられぬ／紅き人は紅き人  
青き人は青き人／アシカスキロン 戦が乙女／アシカスキロン  
戦が乙女

再びお前は潤うのだ」

哀しい詩だった。アシカスキロンという固有名詞や、散りばめられた比喻の理解はできなかったが、無常感と寂しさが滲み出てくるような、そんな気がしたのだ。僕と白咲さんは読み終わって思わずお互いの顔を見合わせた。

「しばらく休憩だ。詩集を読むなり、小説を読むなり好きにしてくれ。なにか困ったことがあったら私に言うといい」

アナがそういったのに対して、僕は無言で頷いた。そして書架からいくつか詩集を選び、部屋の中央部にあるテーブルへと向かった。地球の図書館で白咲さんが電子辞書の使い方を教えたように、アナは僕たちに空中に飛び出る半透明の板、「汎在情報参照機」の呼び出し方と使い方を教えてくれた。彼女の言うとおりに僕が空中を手のひら全体で軽く押すと、微かな反動と共に押さえた場所へロニーが現れる。

ロニーは極めてSF的で、便利なものだった。僕が知りたいシュヴァミルの単語――（多くは固有名詞だ）はすぐに意味を調べることができるし、僕がもっとも重宝した点は紙の本で欠損した部分をロニーが補ってくれることだった。ここにある本はどれも古い物ばかりでところどころ印字が消えていたり、ページが失われていたりすることがかなりの頻度で目に留まる。驚くことにロニーにはそれら欠損部だけではなく、この図書館の蔵書すべてすでに原本も存在しないものまでが完全に、版による差異も含め記録されているらしい。僕は読み進めれば進むほど本の傷みが酷くなることにうんざりして、じきにロニーだけ内容を読むようになっていった。

『アシカスキロンの朝』はアシカスキロン——標準語ではイヒーカスキロニスクという要塞都市の歴史を詠った叙事詩だった。詩はどれも四行一聯を基本とし、行末の脚韻以外に厳しい韻律は存在しないようだ。その構成は単調だが小気味よいリズムを作り出していて、イヒーカスキロニスクという街の美しさや要塞都市ゆえに降りかかる戦災の悲惨さを克明に表現していた。

僕は無心で『アシカスキロンの朝』を読み耽っていた。緻密に詠み込まれた街の可憐さと雄大さが、おどろおどろしい戦争によって一瞬で消し飛び、そしてまた再生されていく。この繰り返しを何百年、何千年も詠い続けるこの詩は、正直に言くと僕の好みではなかった。しかし優雅な文体とは裏腹に、徹底された歴史的な写実性が僕の好奇心を刺激する。詩を読むというよりは、まるでドキュメンタリー映画を観ているような気分だった。

白咲さんは僕の隣で、アナにシュヴァミルを教わっている。女の子同士仲がいいのか、アナも白咲さんもくつろいだ表情で楽しそうに勉強していた。

「アナちゃんの専門は言語学なんだって」

「正確には第一専攻だ。特に第一種生命体言語学の統語論と音韻論を研究している。第二専攻は応用宇宙生命体生態学だ」

アナがロニーからシツアリヴルを取り出しながら得意げに言った。彼女の口から飛び出してくる突飛で晦渋な言葉にはもうなにも驚くことはなかったが、僕はシツアリヴルの製造方法を目の当たりにして眉をひそめた。あんなにも無機的に供給された飲み物を飲んでいたのか、と思うと少し胸焼けがした。

僕は胃からくる不快感を抑えつつアナに言う。

「君と出会ったときから思ってたんだけど、アナ、君はいつたい歳はいくつなんだ」

「女性に歳を訊ねるのは、お前たちの文化でも無作法なことだと聞いたのだがな」

アナは冗談っぽく、不敵な笑顔をつくった。

「最初に言っておかなければいけないが、私の時間感覚とお前たちの時間感覚はわずかに異なる。それは私がアリメンシル人であり、お前たちはお前たち<sup>スラルミール</sup>の惑星の人間であることに起因する。そのわずかな差異は、医療技術や衛生学を持った知的生命体の一個体の」

「で、君はいつたいいくつなんだ？」

アナの長い前置きに呆れて、僕は彼女がまだ言い切らないうちにもう一度聞き返した。アナは拗ねたような口をする。

「秘密だ」

急に部屋がざわついた。エルザたちの小鳥のような囁声が書架の間を駆け抜ける。彼らの視線が部屋の入り口に集中していた。僕の真正面に位置する扉から入ってきたのは、青白い肌をした……あれはたしか、ベロースという種族だったはずだ。背は高いが豊満な肉を体中の至る所から垂らしていた。

そのベロースはそのままずっとこちらへ歩いていて、僕のテールブルまでやってくる。そして僕が広げていた『アシカスキロンの朝』を一瞥して目を細め、それから重々しく、大きな声で言った。

「君は詩人かね？」

アナたちの喋るシュヴァミルとは明らかに異なる別の言語だった。その頭から垂れた太い触手がうねうねと不機嫌そうに動く。僕の反応を待っているようだった。

「君は、詩人かね？」

「僕は……」

「アキラ」

アナが僕の肩に手を置いて首を振る。ベロースはふん、と不満そうに鼻息を漏らしてつかつかと歩き去っていった。

「なんなんだ、あいつ……」

言いようのない不愉快さと疑問が僕の内側に沸き上がる。

「彼はラゲルグットウートノイ・グテアंक。現代でもっとも高名

な詩人の一人だ」

アナがグテアंकを目で追いながら教えてくれた。どこかアナが、いや、この部屋にいるエルザたちすべてが怯えているように感じるのは気のせいなのだろうか。部屋の空気がまるつきり変わっていた。「アナ、教えてほしい言葉がある」

僕は立ち上がったアナに耳打ちした。彼女は顔をしかめ、やめたほうがいいと強く勧めたが、僕にはどうしてもあいつに一言、言わなければいけない。それは僕が詩人として奴に言い返さなければいけないことなのだ。

アナが諦めたようにため息をついて僕に耳打ちをしかえした。アナの教えてくれたシュヴァミルの文章を何度も頭の中で繰り返しながら、僕は足早にグテアंकを追った。

グテアंकは何人かのエルザに囲われ、赤い大きなソファに腰を下ろしている。彼が僕に目をやった。鋭いナイフのような視線は、同時に僕のことを観察し品評しているかのような印象も受ける。とにかく友好的な目付きではない。

僕はその目をじっと見つめ返し、アナに教わった言葉を丁寧に放った。

「僕は詩人だ」

我ながら、こんなことを言うためにわざわざ彼を追ったというのは非常にばかばかしいことだと思う。けれども僕は悔しかったのだ。その屈辱の念は、グテアंकの軽蔑に満ちた視線よりも、自分が詩人であると即答できなかった自分に対して向けられているのである。グテアंकはただ無言で僕を睨み続けた。彼を囲っているエルザたちがくすくすと笑う声が聞こえる。彼らはグテアंकの支持者のようだった。

「そうか。ならば私は同人として、君がただの自尊心の塊でないことを祈るまでだ」

エルザたちが今度は大笑いした。グテアंकが言ったのは、シュヴァミルでの言葉遊びだったのだ。

僕はまたも不愉快な気持ちになったが、言いたいことは言ってたのだ。気分的にも言語的にも、これ以上グテアंकと会話することはできなかったので、僕はそのまま踵を返す。たしかにグテアंकの態度にはいらついたし、他人から見ればちっぽけなプライドを守るために喋れもしない言葉を教わって、ただそれを彼に言いに来たのだが、喧嘩までするつもりは毛頭ない。

だが、グテアंकのほうはどうも違うらしい。

「まあ待て。同じ詩人同士だ、少し話でもしようじゃないか」

僕は無視した。しかしグテアंकは遠のき始める僕に向かってさらに続ける。

「『アシカスキロンの朝』を読んでいたな。あれは神話的叙事詩と写生詩の融合を旨とする北方派の詩人が詠んだものだ。君に理解できたのかな？」

いちいち気に障る言い方しかできないのがベロースという種なのだろうか。反論したい気持ちは山々だが、あいにく僕は彼に通じる言語を持ち合わせていない。つい止めてしまった歩みを進めた。

「無視か。では言い方を変えよう。君のような、無骨な文化しか持たない種族にあの詩が読めたのかな？」

「なんだって？」

僕は思わず振り返って、聞き返してしまった。それが奴のふっかけてくる喧嘩を買うことになるかとわかっていても、僕にはそうするほか選択肢がなかったのだ。

「やはり共通語も話せないか。珍しくズレースク・エルザが城にいますと思えば、一人は二百年も昔の詩集を広げ、もう一人はシュヴァミルの文法書を読んでいた。すぐにわかったさ……君たちが未開文明の生物だな」

グテアंकが高らかに笑った。それにつられるように奴を取り巻くエルザもまたけらけらと笑い声を立てた。

グテアंकのおかげで、どうやら僕は大きな勘違いをしていたということがよくわかった。僕は全天連合の宇宙人たちはみな、アナ

のように聡明で好奇心が強く、常に新しいものへ心を開いて、物理的にも精神的にも高度な文化と文明をもっているものだとばかり思っていた。しかしグテアंकはどうだ。僕のことを未開文明の生物だと口汚く罵ったのだ。アナと同じエルザたちでさえ彼に同調している。その滑稽なまでに排他的な態度は僕の知っている地球人類たちと同じで、同属嫌悪にも似た親近感と共に大きな落胆を抱いてしまった。

けれどもまあ、口論においては熱くなったほうが負けであることくらい、グテアंकの言う「無骨な文化しかもたない種族」の僕でも知っている。

「しかし、そういえば君も詩人だったね。どうだい、私に君の、君の文化の詩を聞かせてくれないか」嫌味な笑顔でグテアंकは言った。「翻訳機で私の言葉はわかるんだろう？　ならば肯定か否定かくらいしたまえ。首を縦にふるか、横にふるか……」

グテアंकは弛んだ二重あごを揺らして、肯定と否定の仕草を僕に示した。ゆつくりとしたその動作は、なにも知らない赤ん坊に動きの意味を教えるように馬鹿丁寧で、僕のことを確実にからかっている。グテアंकもエルザたちも、醜悪な薄ら笑いを浮かべて僕の答えを待っていた。彼の表情や仕草が種族や文化の差を超えてはつきりと、僕のことを警戒し、疎み、そして侮蔑していたのがわかった。

「アキラ、何をしている」

アナが心配したのか、僕を探しにやってきた。ちょうどいい、と僕は思った。

「お願いがある。僕の言葉をグテアंकに通訳してくれ」

「やめておけ、アキラ。グテアंकは——」

「僕だって詩人の端くれだ。彼に僕の詩を聞かせてやるよ」

部屋の真中にあった机が取り払われ、エルザたちによって椅子が

並べられていく。その様子はお伽話に出てくる勤勉な小人たちの姿そのものだ。椅子はすべて同じ方向を向いていて、その先には床から少し高められた演壇があった。

僕はグテアंकに詩を聞かせることに同意した。僕もグテアंकやそのまわりのエルザたちの態度から薄々気づいていたが、彼の提案と僕の同意はつまり、決闘の申し込みと受理だったのである。詩人と詩人の決闘はすなわちお互いに詩を作り、それを聴衆の前で朗読する。そしてどちらの詩が優れているかは聴衆が投票で決める。

単純で、明確に白黒つけることができる方法だ。

アナが僕に二度もやめろと言ったのは正しかったのかもしれない。正直に言って僕は騒ぎがここまで大きくなるとは考えていなかった。自分の浅はかさには、僕自身が一番呆れている。

けれども後悔はしていなかった。してはいけないとすら思った。

僕が地球の詩人を自認する限り、グテアंकと闘わなければいけないと、僕のプライドが語りかける。グテアंकが僕や白咲さんを馬鹿にしたから？ そんなことはもはや関係がない。僕が無骨な文化しかもたない者であろうとなかろうと、僕は今、詩を詠みたいと思っている。理由はそれだけでいい。勝負の舞台は奴に詩を聞かせるための、ただの借り物だ。

「アキラ、もう一度よく考えろ。お前がグテアंकと『朗読会』を開いたところでなんになる？ たしかに彼は排他主義的でお前やマツリを快く思っていないかもしれないが、そんなものは放っておけばいいじゃないか。それにお前は……その……」

「君以外のエルザや全天連合の異星人に通じる言葉を知らない、だろ。わかってるよ、そんなことは」

「それだけじゃない！」

僕は手を挙げてアナの言葉を止めた。緑の瞳が僕を不安と叱責が入り交じった光で見つめている。

「大丈夫だよ。ただの詩の朗読会さ」

アナは何か言いたそうな顔はしていたが、それ以上なにも口にし

なかった。呆れているのか、諦めているのか、それとも怒っているのだろうか。僕は早く作詩に集中したくて、最後までアナの表情を観察しなかった。

白咲さんは初めから何も言わなかった。ただ静かで、けれども暖かな視線で僕を見つめている。今はそんな白咲さんの反応が嬉しかった。

朗読会を行うにあたって、僕とグテアंकは共通のテーマで詩を詠むことにした。僕たちはこの日、このカンジヴァハで二つの月が同時に満月になる現象「完月」に倣って、月を主題とすることにした。天体がテーマとは、僕は運がいいのかもしれない。かねてより星や宇宙のことは好きだったし、その分想いは誰よりも強い自身がある。それに今僕は自分の母星を離れ、実際に遠い宇宙の果てまでやってきているのだ。この神経の昂りを言葉に残すタイミングは今しかない。

ただ、僕の心持ちがどうであろうと、テーマがどんなに自分の嗜好に合ったものであろうと、僕が日本語しか話せないという事実が大きなハンデになることにはかわりない。それは重々承知だ。だが大昔の日本人が中国の漢詩を白文で読んで感動したように、詩には言葉の意味もさるところながら音にだって重要な意味がある。それが押韻なのかリズムなのかは別として、詩人の感情は必ず音にも宿るのだ。僕はそう信じている。

グテアंकが壇上の上手に置かれた椅子に座った。奴の詩が書きあがった合図だ。聴衆席はすでに満席で、立ち見るエルザやいくらかのベロースが部屋の壁際に何人もいる。アナと白咲さんは最前列に座って、二人とも不安そうな表情を浮かべていた。

すぐに僕も壇上に上がった。エルザたちのざわめきが収まり、彼らの小さな瞳が僕とグテアंकを交互に見つめている。緊張のせいで足が震えるが、その反面、心は落ち着いている。身長の高いエルザたちの中でも際立って小さな一人（エルザの子供のようだ）が、白いゆったりとしたローブをまとい、演壇に立つ。そのエルザが甲

高い陽気な声で開会のことばを告げると、会場が拍手に包まれ、上手側の客席からグテアंकの名前が三度叫ばれた。グテアंकを取り巻いていたエルザたちだ。そのグテアंकコールの間に一度だけ、白咲さんとアナが僕の名を呼んだのを、僕は聞き逃さなかった。なんだが照れくさかったが、彼女たちのおかげで震えは少し収まった。司会のエルザが手を掲げて聴衆を鎮める。そして開会宣言よりも厳かに、声を抑えて言った。

「先手は、『北東大陸の宝、雅言の継承者たる青き血の人、正教徒者、キュシュツアーヴ半島の第一詩人、城の刻銘者』——ラゲルグ「トゥートノイ・グテアंक！」

再びグテアंकコールが起こった。グテアंकが司会と交代に壇に立ち、今度は彼自身が聴衆をなだめた。咳払いをひとつして、グテアंकはうねるような低い声で朗読を始める。

力強い詩だ。二つの月の満ち欠けを鋭い言葉で刻々と表現していく詩だ。僕がグテアंकに対して抱いている嫌悪感や不快感とはまったく正反対の、規律的で華美さと繊細さを併せ持った言葉遣い。彼の言語が印象づける格調高さ。カンジヴァハの、朱色に染まる夜明けと夕焼け、そして息が詰まるように美しい二つの月と二人の恋物語。とき甘美で、とき残酷なまでに彼の内面を反映し形容されていく。

「——降雪、沈々として、氷光を映す／東天、緑々として、影洋に漂ふ／音無く刻まる、心の内／城に於いて、双月の狂へるに、叫ばんと欲す——」

僕も含む、すべての聴衆がグテアंकの詩に聞き入っていた。グテアंक自身は嫌味な奴だが、彼の詩が素晴らしいものであるということは認めざるをえない。その事実がどうしようもなく悔しい。

哀しげな余韻を残しつつ、グテアंकは詩を読み終え、会衆はしばらく水を打ったような静寂に包まれた。次の瞬間、総勢が立ち上がり、盛大な拍手でもってグテアंकを称えた。エルザたちの中には服の袖で涙を拭うものまでいる。

グテアंकは満足気な顔をして自分の席へ戻った。司会がグテアंकに贈られた拍手が鳴り止むのを待って、再び演台に立つ。そして今度は僕を手で示しながら、

「後手、『名無し惑星の詩人』、アオバ・アキラ！」

そう紹介した。「名無し惑星」か。たしかに彼らにとってはそのとおりだ。あのアナでさえ僕たちの地球をそう呼ぶのである。これが彼らに僕の星の名を教えてやるいいチャンスだ。僕はそう思いながら聴衆に対面した。

下手側に白咲さんとアナがいて、僕をまじまじと見つめている。たった二人だけだが、今の僕にとっては心強い味方だ。対して、エルザたちや他の聴衆はざわついている。彼らには僕がどう映っているのだろうか。

僕はゆっくりと詩を読み出した。この朗読会のために数十分で書き上げたものだが、自分ではなかなか満足のいく詩だ。宇宙へやってきているんなものを見て、体験し、昂った感情を詠み込んだつもりである。グテアंकがいなければ詠むことのなかった詩だ。その点については彼に感謝しなければいけないだろう。

瑠璃色の夜空に浮かぶ、地球の青白く輝く月をできるだけ静かに詠み上げる。恐ろしいほど暖かな光を放つ、あの月のことを彼らに教えてやろう。僕はただそれだけを考えていた。

エルザたちは目を丸くしてぼかんとした顔をしていた。言葉が通じていないのだ。当然の反応である。僕はそれでも彼らに通じる何かを信じて、決然と詠い終えた。これでいい。

物音ひとつたてずに、エルザたちはただお互いに顔を見合わせて何が起こったのかを知ろうとしている。どうやら「名無し惑星の詩人」は朗読を終えたらしい、何語での朗読だったのか、詩の意味がわかった者はいるか……声には出さないが、エルザたちの顔にはそんな言葉が浮かんでいた。そんな聴衆を尻目に僕が席に戻ると、白咲さんが手を鳴らした。続いてアナが、そしてつられたエルザたちがまばらに拍手する。やはり彼らは納得がいけないという様子だっ

た。

グテアंकが感情をまったく読み取れない顔で、僕を睨みつけていた。ただひとつ言えるのは、そのグテアंकの表情が朗読会直前とは明らかに異なっているということだ。彼が僕の詩に何か感じるものがあつたのかもしれない——彼の心を動かすことができたのかもしれない。僕はそう思った。

司会のエルザが投票の手順を説明した。投票はロニーを通じて行われ、僕の詩とグテアंकの詩、より優れていると思うほうへ一票を投じることができる。ロニーを呼び出した聴衆の中には首をしきりに捻る者もいれば、初めからどちらに投票するか決めていたかのように一瞬で選択を完了する者もいた。僕とグテアंकはお互いに無言で演壇に並び、開票を待った。

正直に言くと、僕はすでに勝敗の行方を知っていた。明らかにグテアंकの勝ちなのである。そんなものは会衆の空気を読み取ればすぐにわかった。だからこの開票で意味をなすのは得票の多い少ないよりも、僕にいくつ票が入るかだろうか。グテアंकに負けたのはもちろん悔しいが、一票でも聴衆が僕に傾いていれば、それだけで彼に一矢報いることができる気がするのだ。

もしかしたらグテアंकも同じように考えているのかもしれない。だから彼は嫌味ひとつ言わず、勝ち誇った顔もせず、僕と並んでいるのだろうか。

いよいよ開票が宣言された。司会が手元のロニーに表示されたそれぞれの得票数を読み上げる。

「北東大陸の宝、雅言の継承者たる……以下省略！ ラゲルグットウートノイ・グテアंकの得票数は——二百九十三票！ 名無し惑星の詩人、アオバ・アキラの得票数——三票！」

会場から声があがった。グテアंकの名がまたもや至る所から叫ばれる。そして司会のエルザはグテアंकの前で跪き、グテアंकが差し出した右手の甲に口づけした。その司会によるグテアंकの勝利宣言によって、聴衆はより一層大きな歓声に包まれる。僕は予

想通り、完全に敗北したのだった。

三票か、意外に少なかったな。負けたことに落ち込むよりも先に、そんなふうにした。ただの慢心かもしれないけれども、もう少し票が取れる自身はあったのだ。僕はやり場のない失意と共に演壇を下り、聴衆の人ごみから足早に離れた。敗れたことが恥ずかしかったのもそうだが、今は熱気に満ちたこの部屋から出て頭を冷やしたかったからだ。

一步部屋の外に出て、大きく息を吸った。頭の中も心の中もからっぽだ。悔しさや不甲斐なさが渦巻いていてもおかしくないはずなのに、僕の内側にはなにもなかった。ただ倦怠感が全身に溢れている。

「アキラ……」

アナが弱々しい声で僕に呼びかけた。

「彼は……グテアंकはこの城に最年少でその名を刻まれた詩人だ。彼の詩はアリメンシルだけではなく、ヴィナスク全天連合の隅々にまで知れ渡っている。支持者も多いし、彼が種族の宝として認められるだけの理由はある」

「ありがとう。君の気遣いは嬉しいけどもういいんだ。終わったことだよ」

嘘だった。「終わったこと」なんてのは、ただの強がりではない。もちろんアナの言葉は本当に嬉しいものだったが——今は少しアナが疎ましい。

「お前はグテアंकに遊ばれたただけだ。彼は今まで何度も同じようにして新進の詩人に勝負を挑んで負かせてきたんだぞ」

「もういいって言うてるだろ！」

そんなことを知ってなんになる？ たとえ最初から知っていたとして、グテアंकのサディスティックな遊びに付き合わなかったとは言いい切れない。むしろ知っていたら僕は進んで彼と勝負をしていただろう。僕はより熱くなってしまうて、グテアंकを本気で打ち負かそうと思っていたに違いない。そうなれば今よりもっと絶望に

打ちひしがれていたのは火を見るより明らかだ。

アナが言いたいののはつまりこうだ。僕程度の詩人では、初めからどう足掻いてもグテアंकに勝てるはずはなかった。だからそんなに落ち込む必要はないのだ、と。

「……すまない」

アナの表情が真つ暗に曇っていく。僕は強く言い過ぎたことを後悔するが、他に何も言うことができない。何を言えいいのかわからなかった。

僕とアナの間に気不味い空気が流れていた。アナと一緒にいてこんなにも居心地の悪い気がしたのは初めてだった。

## 7 ラングイあらわる

僕は逃げるようにして文芸棟を去り、それどころかアリメンシルすら離れようとした。

どういうわけか「諸芸の城」からテューヴィリン号には、僕たちが最初にアリメンシルへ降り立った音楽棟のあの広い部屋からしか帰ることができないらしい。アナに理由をそれとなく訊いてみるが、断層に阻害されているとか、時空調節が難しいなど、あまり要領の得ない答えが返ってくるばかりだ。僕が怒鳴ってしまったことを気にしているのか、アナの語調はどこかぎこちないものだった。

テューヴィリン号へ戻つてくると、白咲さんがほつとした様子でため息をついた。

「アナちゃんの星はちよつと寒すぎたかな」

僕とアナの間にできた小さな亀裂を機敏に感じ取ったのかもしれない。なにも知らないよ、という言葉が聞こえてきそうなほど明るく言ったのだった。白咲さんにも気遣いをさせてしまっている自分が、ひどく恥ずかしく感じた。

相変わらず狂ったように白い部屋は、雪と氷の世界であるアリメ

ンシルとは比べものにならないほど快適だ。気温にしても湿度にしても、また照明の強さにおいてもよく観察してみればあらゆる場所で均一だった。

「そうだな。次は暖かなところで……食事にもしようか」

言つとアナは手慣れた仕草でロニーを呼び出した。ここでも呼び出すことができるのかと関心した僕は、アナと同じように空中を軽く押してみる。現れたロニーは、『アシカスキロンの朝』の続きを映し出していた。これには苦笑することしかできなかった。早く文芸棟での出来事を忘れてしまいたかったからだ。

僕たちの立っている床が、青い光の円で囲まれる。しばらくはその現象の意味がわからなかったが、やがて円の外側が微かに動いていることに気がつく。真っ白な背景が、よく見ると下へ飛んでいくのだ。

「何が起こつてるんだ？」

今度はできるだけアナに気遣いをさせないように穏やかに訊ねる。

「上層階へ移動している。まもなく『地上』だな」

「『地上』？」

「わあっ」アナに訊き返すと同時に白咲さんが声をあげた。周りの景色が白から黒へと変わったのである。

ただの黒ではなかった。手前は透明なのに遠くへ視線を深めれば深めるほど黒。粉っぽいもやの中で、時たまゴムの塊のような生物が視界を横切る。そのうねうねと動く生物も注視する暇なく足元の向こう、はるか彼方へ飛んでいくので状況はよく把握できなかった。次第に黒は濃紺へ、それから青へと変わっていった。ほとんどもやも晴れ、生き物の色も鮮やかになって種類も多くなっていった……姿こそ奇妙なものも多いが、あれらは恐らく魚だ！

「これは海か？　ここはテューヴィリン号の中じゃなかったの？」

「いや、間違いなくテューヴィリン号だ。今はテューヴィリンの『中』ではなく『上』という表現がわかりやすいかもしれない」

「宇宙船の中に海だなんてすごいな」

「テューヴィリン号はただの船ではない……もうすぐ見えるぞ」

アナは目線を下ろした。つられて僕も下を向くと、そこには青い海が広がっているのが見える。今はもう海の中ではなく、外を飛んでいるらしい。やはり水面がすごい勢いで遠ざかっていく。

「瑛くん、あれ！」

白咲さんが遠くを指さす。その指の先に目を向けてしばらく押し黙った。はじめはよくわからなかったが、ずつとずつと遠い場所で海の淵が丸まっていくことに気がついたからだ。

「あの海はテューヴィリン号の『中』にあるわけではない。テューヴィリン号の表面を七割ほど覆っているのだ」

「……つまりテューヴィリン号は……つまり……星の形をしているわけだ！」

さらに海から離れて淵はさらに丸さを増した。すでに球形の全体像が頭れはじめ、水平線の向こう側は暗い闇の宇宙空間が見え始めている。

「数千年前、私たちアリメンシルのエルザとベロースはこの星の乙女号に乗って宇宙への旅に出た。我々のような生物が、孤独でないことを証明するためにな。それが全天連合の始まりだ」  
ヴィナス

上を見ると真っ白に輝く太陽があった。光は直視できるほどであり眩しくはない。その太陽の表面にはうっすらと細かい網目が見えた。どうやらその網目が、本来の光を弱めているらしい。

「そして私たちは多くの生命と出会った。当然ながら彼らは文化も言葉も、生存環境すら違うものも多かった。お前たちもそのひとつだ」

アナは僕と白咲さんを見据えてにっこり微笑んだ。

上昇が止まった。白い床がずつと景色に溶け入り、完全に透明になる。アナによって初めて宇宙に連れてこられたあのときのように宇宙に立っていた。頭の上からは太陽の光、下からはテューヴィリンの青い輝きが僕たちを照らす。

「すごい……きれい」白咲さんが甘い吐息を漏らしながら言った。

「やっぱりアナちゃんは宇宙人なんだね」

「これらはすべて積み重ねられてきた生命の営みの結果だ。お前たちもいずれ、このような技術を持つ日が必ずやってくる」

「それは君たちと接触するから？」

「我々の技術や我々そのものを受け入れるかどうかは、お前たち人類次第だ」

僕はそんなことが可能かどうか少し迷った。同じ人類同士でさえ争いが絶えない地球人が、はたしてアナたち異星人を受け入れることができるだろうか。

「さあ」

言っているとアナが再びロニーを呼び出して、透明な床から椅子とテーブルを呼び出す。

「ここはテューヴィリン号名物、『衛星軌道食堂』だ。好きなものを注文してくれ」

僕は少し嫌な予感を覚えたものの、素直に頷いた。

宇宙にいても空腹には逆らえなかったからだ。

嫌な予感は的中した。

「天上食堂」では食べたいと頭の中で思い描いたものが、テーブルから直接生成される。コックも給仕も必要とせず、アナがお茶をロニーから搾り出したのと同じような方法で料理が提供されたのだ。

「味は上々だっただろ？」

アナは得意げに言った。たしかに料理がぬるっとテーブルから出てきたときは鳥肌が起つほど気持ちが悪かったが、意を決して提供されたオムライスを一皿食べてみると、それは今まで口にしたどんなオムライスよりも美味しいと感じたのだ。

「素敵なレストランだね。おいしい料理と最高の景色……」

うつとりとした瞳で、テューヴィリンや輝く星々に見とれながら

白咲さんは言った。料理の味以外はともかく、景色については申し分ない。むしろこんなにも感動的な景観を見ながら、安全に普通の料理を食べることができるという意味では地球の誰も経験したことがないだろう。

「さて次はどこへ行こう」

か、とアナが言おうとした瞬間だった。

床が大きく揺れたのである。

アナたち宇宙人が造り上げた驚異の船が揺らぐはずない。そう思っていた僕は驚いた。揺れはますます大きくなり、ついには立つていられないほどになった。

何ごとかと思いアナを見る。その顔は真っ青に、そして信じられないという表情に歪んでいた。アナが動揺しているのだ。これはただごとではない、そう思うと急に緊張感が増した。

「アナっ！ 大丈夫！？」

焦点の定まっていないう瞳が空を見つめている。小さな肩を掴むとようやく我に帰ったようで、こくりと頷きロニーを呼び出した。

「二人とも逃げるんだ」

周囲を注意深く見回しながらアナは言った。

「逃げるってどこへ？ 何が起こってるんだ」

「『ラングイ』だ」

アナがロニーを操作すると景色が一変する。宇宙空間や網目模様の太陽、青いテューヴィリン号は見えなくなり、薄いグレーの床と壁が現れたのだ。僕たち以外にも床の上には大勢異星人たちがいて、彼らも床にうずくまったり、目的もなく逃げまわったりしていた。異常事態であることはたしかだ。

アナはロニーで逃げこむ場所を確認したのか、僕の左手を引いて走り出す。

「白咲さんも早く！」

椅子から滑り落ちていた白咲さんを右手で起こした。白咲さんもまた、突然の出来事で現状をよく把握できていない。疑問に満ちた

顔が、周囲の影響で少しずつ恐怖に染まっていた。

アナは悲鳴と怒号の中をかき分けてどんどん進んでいく。

「アナ、ラングイっていったいなんなんだ？」

ただ苦い顔をして答えない。どこかを目指してまっすぐ走り抜けるだけだ。

すぐに逃げ惑う人々の流れもひとつになってきた。皆が逃げるべき場所を確信したのだろう。白咲さんを捕まえて抑えつけていた黒服の宇宙人が、四本の手を器用に使いながら人の動きを誘導していた。彼らはテューヴィリン号における警察のような役割をしているようだ。

細かい揺れはまだ続いていた。そして数秒に一度大きな振動が響き渡る。至る所で悲鳴があがった。中にはもう命がないと諦めたのか、聞いたこともない神へ祈りを捧げる異星人の姿もあった。驚くべき技術をもった彼らをこんなにも追い詰める脅威とはなんなのか。僕には一向にわからなかった。

人の流れがやや緩やかになる。避難所の入り口に大勢が集まりすぎたためにつつかえているようだ。人々の不安と焦りが怒鳴り声となって飛び交っている。

「『ラングイ』は我々全天連合の……生命の敵だ」  
ヴィナスク

息せき切らしながらアナが呟くように言った。律儀にも、さっきの問に答えたのだと一瞬遅れて理解した。

「生命の敵だって？」

再び大きな振動が走った。とつさに頭を抱えて、今度は近いぞ、と思いながら顔を上げて戦慄が走った。人だかりの、わずか数十メートル先で宇宙空間の闇がぼっかりと大きな口を開けていたのである。さっきまであそこにはたくさん異星人がいたはずだ。僕らと同じように避難所に逃げこむ異星人が……

「こつちだ！」

アナが方向を変えまた走り出す。足が動かなかった。急激な気圧差で宇宙空間に吸い込まれていきそうなせいと、目の前で大量の人

々が消えたことのせいだった。アナと白咲さんが二人がかりで僕を引っ張って、やっと一歩踏み出すことができた。

一瞬で人が消えるだって？ どうすればそんなことが起こるんだ。僕に迫っているのは紛れもなく死の恐怖だった。宇宙に来て、いや、それどころか地球上で普通に生活をしていても一度も感じたことのない恐怖だ。それが今は目の前にまでやってきている！

大きな振動の間隔が短くなってきた。金切り声に後ろを振り返ると、壁にあいた巨大な穴からわらわらと六本足の蜘蛛のような機械が入ってきているのが見えた。おびただしい数だ。あれがランゲイなのか？

宇宙空間から中に侵入して、蜘蛛は何をするわけでもなくカメラに似た光る目をキョロキョロと動かしている。

次の瞬間だった。蜘蛛たちは恐怖に駆られ腰を抜かした異星人を見つけると、素早い動きで足の間にある口を開き、ぱくりと丸呑みしたのだ。

一気に吐き気がした。走りながら必死に胃から湧き上がる吐瀉物をこらえて目を背けた。今は恐れおののいている場合でも、死者を悼んでいる場合でもない。とにかく逃げなければいけない。そう思った。

「二人とも！ あそこへ」

アナが前方の赤い大きな扉を指さして言った。扉はゆっくりと閉まり始めていて、機械蜘蛛から逃げる人々が我先にと押し寄せている。扉まであと二百メートルほど。閉ざされてしまう前に全力で走りきれぬ自身はあった。その程度の体力は絞り出せそうだ。どうしても搾り出さなければいけないのだ。

しかし――

「きやあつ」

僕のわずかに後ろを走っていた白咲さんの悲鳴が聞こえた。不規則に震える地面に足を取られたようだった。そのまま何ごともなく立ち上がって、再び走り出してくれれば何の問題もない。しかしそ

れは不可能だ。

白咲さんの後ろには、銀色の機械蜘蛛が迫っていた。丸い胴体から生えた目を回転させながら蜘蛛は白咲さんに近づいていく。あいつらの目的がなんなのかは知らないが、もしかしたらまだ白咲さんには気づいていないのかもしれない。それならば好都合だ。

僕は体を翻して逆方向に走り出す。今度こそこの手で白咲さんを救わなければいけない。まだ間に合うはずだ。

「アキラ！」

白咲さんのもとへ向かおうとする僕に気がついて、アナが止めようと手を伸ばした。アナの手は空を掴んだ。

機械蜘蛛のカメラが動きを止める。その視線の先は間違いなく白咲さんだ。四本の足を器用に動かし、白咲さんの逃げ道を遮った。胴体の真ん中、楕円形の口を大きく開いて今にも白咲さんを飲み込もうとする。

すんでのところで白咲さんに飛び込み、彼女を抱えてそのまま胴体の真下へ転がった。二の腕の横で機械蜘蛛の鋭い牙が噛み合って音をたてる。

「あ……あき、らくん……」

開ききった瞳孔が僕を凝視した。

「立って」

今すぐ逃げなければいけないのだ。機械蜘蛛が素早く足を揺らし、カメラを動かして獲物を探している。やがてまた見つかってしまうだろう。そのときに倒れこんでいるか走っているかは大きな差だ。白咲さんはすぐに顔を強ばらせ頷いた。

白咲さんの手をとってアナが指さした扉へ急いだ。機械蜘蛛の股をすり抜けるとカメラがぎよりと僕たちを捉える。口を開く体制をとったのか、蜘蛛の体が傾いた。

「伏せるんだ！」

アナの叫び声が響いた。頭の上でまた蜘蛛の口が閉じ合わさる鈍

い音がした。

空振りの隙をついて一気に駆け抜けた。もうすぐだ。もうすぐ扉に到達できる。幸い機械蜘蛛はさほど足が速くない。ぎりぎりでの内側に滑り込めるはずだ。

鈍い爆発音が聞こえた。そして直後にこれまでに一番大きな振動。足元がすぐわれるような感覚に襲われた。

いや、違う。実際にすぐわれてしまったのだ。足元には青い青いテューヴィリン号が輝いている。僕の四方に広がるのは星の海だ。壁が、床が消えてしまった。苦しい。息ができない。

数メートル先でアナがなにか叫んでいる。その声もまったく聞こえない。

真つ逆さまに落ちていく。星と同じ質量をもったテューヴィリンに引きつけられていくのだ。

右手に強い圧力があつた。白咲さんの手だ。彼女もまた藻掻き苦しんで、必死に僕の手を握っている。

ふいに光が歪んだ。続いて一切の感覚が消え去った。

死にたくない。その感情だけが残り、やがてそれもまた歪んだ光に溶けていった。

### 第三章『詩人は大空の下で詠う』

#### 第三章 『詩人は大空の下で詠う』

##### 1 見知らぬ惑星

胸に空気が満たされていく痛みで飛び起きた。体中の血管に血が流れ、細胞の隅々にまで酸素が送りつけられるのが手に取るようになる。

目を開けていられないほど眩しかった。とつさに手で目庇を作ると、しばらくして妙に嬉しく感じた。体が滞りなく正常に動いたからだ。鼻腔に潮の匂いが入り込んでくる。地面は白くさらさらとした砂浜だった。

周囲を見渡した。燦々と照りつける太陽の下で、青い海が静かに波打っている。背後には木々のまばらな森があり、そのさらに先には高い山が見える。そして、僕の真横には白咲さんが横たわっていた。

白咲さんの生氣のない顔を見て血の気が引けていった。次の瞬間には彼女の手を握って必死で呼びかけていた。

彼女の手は暖かい。それだけでも少し安心だ。

「ん……」

小さなうめき声をあげて白咲さんはゆっくりとまぶたを開く。

「瑛くん？」

「よかった……」

「どうして……泣いてるの？」

「うっん。嬉し涙だよ」

白咲さんの手が僕の頬に延びる。おぼろげな瞳で微笑みながら涙をぬぐってくれた。

「わたし、どうしちゃったのかな？　ここはどこ？」

「わからない。アナがいれば訊けるんだけど……」

アナは見当たらなかった。立ち上がった遠くを見ても、人の気配はまったく感じられない。僕と白咲さんになにが起こったのか、頭をこねくり回して考えても答えはなかなか見つからなかった。

「僕たちは機械の蜘蛛から逃げていたはずだよね？」

「うん……それからわたしがつまり、瑛くんが助けてくれて……また助けられちゃったね」

「なんとか逃げ出したはずなんだ。けど気がついたら僕たちは宇宙空間に放り出されていた」

そして気がついたら砂浜に横たわっていた。なぜだ、と思う前にまたかと考えてしまった。アナによってテューヴィリン号に連れてこられた夜も、僕は同じような事態に遭遇したのだ。つまり、記憶が途絶えて理不尽な状況に叩き込まれるという事態に。

「もしかしてテューヴィリン号の海なのかな」

白咲さんが凪いだ海を見つめながら呟いた。

「わたしたち、あのままテューヴィリン号に落ちていって、それでここにいるんじゃないのかな」

「そんなまさか」

ありえない。衛星軌道上から落下して命があるわけがないのだ。流れ星が燃え尽きてしまうように、落下の途中で大気との摩擦熱で焼け死んでしまうはずだし、だいいち僕たちの体には掠り傷ひとつない。どんな奇跡が起こったとしても僕と白咲さんが無事でいる理由にはならないだろう。

テューヴィリン号自体に、落下物を優しく包みこんで地上まで届けるような仕組みが備わっているのかもしれない。テューヴィリン号はアナたち全天連合の宇宙人<sup>ヴィナス</sup>がその強大な技術力で造り上げた惑星型の船だ。その程度の安全装置が組み込まれていてもおかしくない。

一瞬そんな考えが頭の中を駆け巡ったが、すぐに否定した。宇宙空間に漂う個体を地上まで保護するよりも、その場で安全なカプセ

ルかなにかに入れてしまったほうがずっと効率的だからだ。

しかしそうすると、ここはいつたいどこなんだという疑問がますます強くなる。僕たちはたしかにテューヴィリン号の衛星軌道にいたのだ。その記憶はたしかだ。

ここがテューヴィリン号ではない、あるいは全天連合の力が及ぶ世界ではないという確証が僕にはあった。手をかざしてもロニーが現れないことだ。ロニーさえあればなんとかして助けを求めたり、自分たちが置かれている状況を知ることぐらいはできただろうが……考えれば考えるほど泥沼にはまっていくようだった。こうしていても答えは出ないだろう。

「とにかくアナが助けに来てくれるのをここで待とう。あんまり動きまわって『探すのに苦労した』だなんて小言は言われたくないからね」

精一杯の軽口だった。頭の片隅では機械蜘蛛の影がちらつく。あの恐ろしい蜘蛛たちから、アナは逃れきることができたのだろうか。もしかしたらアナは……その先は考えたくない。

「そうだね。せっかく夏休みなんだから、海で遊ぶのもいいよね」  
くすぐったい笑い声を漏らしながら白咲さんも冗談っぽく言った。

背後の山に真つ赤な太陽が沈んでいく。空が日の近くでは赤々と天頂付近では紫に、そして海の上では深いコバルトブルーに染まっていた。

「きれいだね」

横で体を縮こまらせて海と空を眺めていた白咲さんが呟いた。泳ぎはしなかったものの、水辺ではしゃいで疲れてしまったらしい。うつすらと焼けて赤くなつたまぶたが重そうにしている。

砂浜には生命が満ち溢れていた。沖合には黒い影がいくつも見える。恐らく魚の類だろう。湿った波打ち際を掘れば貝や蟹に似た生き物も沢山いる。地球の海そっくりだった。

そのかわりに陸生の動物はまだ見ていなかった。もちろん、知性を持った、僕たちを助けてくれそうな生物もだ。

そしてアナもまだ助けに来ない。

僕たちを探し出すのに手間取っているのか、もしくは。

白咲さんは気丈にふるまってはいるが、僕たちが置かれた状況には感じているに違いない。僕を元気づけるように側を離れないし、言葉を絶やさないようにしている。

あるいは自分自身を元気づけるためかもしれない。どちらにしろ、白咲さんが持つ女性的な強さは絶望的な予測を忘れさせてくれる。

二人きりの砂浜、しかも感傷的な夕日を背に、という状況でこれほど嬉しいことはなかった。

「けど、少し寒くなってきたかな」

「そうだね。夜は冷えるみたいだ」

アリメンシルでアナにもらったコートを着なければ、半袖の制服姿では薄ら寒く感じる。風も出てきていよいよこれからどうするかが心配になってきた。

「風を防げるところを探そう。このままだと底冷えしそうだ」

僕たちは森に向かって歩き出した。

砂地が次第に土へと変わり、短い草が絨毯のように生え始める。

そこから数メートル進むと、細い木がまばらに立ち並ぶ森へと入った。さらに奥は木々の密度が増して鬱蒼としている。

チロチロと鈴が鳴るような音が聞こえた。どこから聞こえてくるのかはわからないが、生物的な音には違いなかった。

「虫かな？」

白咲さんは僕のコートの袖をつまんでいる。不安そうな様子であったりを見回した。

「そうかもしれない。鈴虫みたいなのがいるのかも」

「小さいのならいいんだけど」

あまり虫は好きじゃないようだ。たしかに遠い宇宙の知らない惑星に生息する巨大な虫なんて見たくもなかった。僕たちには危害を

加えないかもしれないが、そうしないという証拠もどこにもないのだ。僕はそう思って林を進む歩みを遅める。慎重になるに越したことはない。

入り口では細かった木立がだんだんと太くなっていた。空はすっかり暗くなっていて樹冠の隙間から星が見えている。日が暮れてから移動を始めたのはまずかったな、とこの時点になって気がつく。視界も空と同様に暗いのだ。

背後でなにかが動く音がした。白咲さんがびくりと体を震わせ僕のコートを強く掴む。僕は息を殺して音のしたほうを睨みつけたが、なにも見つけることはできなかった。

「……戻ったほうがいいかもしれない」

「わたしもそう思う。入り口あたりの木の陰ならそこまで寒くはないんじゃないかな」

「ごめん、白咲さん……これからはもっとよく考えてから行動するよ」

「気にしないで。わたしも気づいたことがあったらちゃんと言うからね！」

白咲さんはぎこちない笑顔を浮かべる。情けなくて彼女の顔をとっても直視できなかった。

結局来た道に戻るが、また砂浜に出るまで行きよりも倍近く時間をかけることになった。視界は闇に閉ざされていたし、目印らしい目印もない。自分がまっすぐ進んでいるつもりでも実はかなり曲がりくねって歩いていたようだ。僕は夜の林には二度と入らないでここに心に刻んだ。

森の入り口に見つけた、わりかし太めの木の下に僕たちは腰を据えた。幹に背中を預け、コートを毛布のように体の前からかけて暖を取る。

「あの、えっと、瑛くん」

「なに？」

「もうちょっと、こっちに寄ってもらっていいかな……？」

僕と白咲さんの肩はもう充分触れそうなほど近づいていた。ここからさらに白咲さんのほうへ寄せるとなると、完全に触れるか、あるいは彼女を抱きかかえる形になってしまう。

少し照れくさかった。けれども僕はそつと白咲さんに寄って、

「これでいい？ 寒くない？」

「うん。暖かい」

白咲さんは僕の左肩に体を預けた。コートの下でお互いに手を握る。心臓が高鳴った。どんな状況下においても、恋心というものは無くなったりしないんだな――

恋心？

「ああ、そうか。そうだよな」

自分の馬鹿さに呆れながらそう呟いた。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ」

言って僕は少し強く白咲さんの手を握る。やっと自分自身の心情を、白咲さんに感じていた思いを正確な言葉で表すことができた。

それが無性に嬉しくて、そしてこれまでより何倍も白咲さんのことが愛おしく思えて、耳のあたりがちりちりとくすぐったかった。

僕は白咲さんのことが好きなのだ。

白咲さんは目を閉じて顔をコートの中に埋める。

彼女もまた、強く手を握り返してくれた。

## 2 二日目

ふと目を覚ました。肩の上では白咲さんの静かな寝息が聞こえる。周囲はほのかに明るくて、海のだいぶ遠くまで見渡すことができた。すぐに明るさの原因が月だと気がついた。少し欠けた月が高く昇っている。地球で見慣れている月とは違う、黒いしみの少ない、鏡のような月だ。風はあまり吹いていない。気温も想像していたより

は高く、アナにもらったコートの機能性、そして白咲さんの体温で充分に暖かった。

どれくらい寝ていたのだろう。夜はまだ続いているようで、海も森も静寂を保っている。とても久しぶりに睡眠をとった感じがしていた。けれどもよく考えれば、まだ宇宙に連れてこられて一日も経っていないし、夜中に家を抜け出す直前はベッドの中だったのだ。奇妙な感覚だった。

白咲さんを起こさないように少し体勢を変える。白咲さんの前髪が小さな声とともに揺れた。僕は恐る恐るその前髪に触れる。さらさらの細い髪だ。

「あきらくん……」

寝言のようだ。白咲さんが夢の中でまで僕のことを呼んでいると思うと、なんだかすごく恥ずかしい。僕は手を引っ込めてどうにか心の平静を保つことに努める。

海の右手側からのそりと黒い影が砂浜に這い出るのが見えた。月明かりに照らされた大きな甲羅が艶やかに光っている。ウミガメのような生物だった。ヒレ状の足を器用に使って砂浜に穴を掘っている。

そのウミガメが見えた瞬間、僕は思わず身構えてしまったが、どうやら僕たちの存在には気づいてもないようだった。

まったく不思議に思った。こんな見ず知らずの星の上でも、僕は地球上と同じような生命に出会ったのだ。

アナが言っていた収斂進化という言葉思い出した。アナは鳥とコウモリの例を挙げ、僕たち地球人とアナたちエルザの類似性同一性を説明していた。彼女の理論を借りれば、あのウミガメもきっとその収斂進化をした結果の個体なのだろう。

僕はもう一度、ウミガメが僕たちに危害を加える気がないことを確認して目をつむった。

夢は見なかった。海から昇る太陽の陽射しと、白咲さんが動いた気がして僕は完全に目を覚ます。

「あ、起きちゃった」

目を見開くと白咲さんの少し垂れた目が、僕の顔を覗き込んでいた。僕は肉食動物に睨みつけられたように動けなかった。白咲さんの丸い瞳が、文字通り僕の目と鼻の先にあつたからだ。

「白咲さん……どうかした？」

「へへ。瑛くんの寝顔、可愛いなって思ってた」

白咲さんは言って立ち上がって伸びと屈伸を繰り返した。固い木の幹を背に座りながら眠ったせいで、体中が凝り固まっている。

僕はこれからなにをするべきか考えた。まだあまり実感はないが、僕たちは今、確実に生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされているのだ。たった二人っきりの高校生が名前もわからない星で、助けがいつ来るのかもわからない状況でどうすればいいのか。

とりあえずは水だ。真水さえ手に入ればかなり生き延びられるはずだ。これだけ植物が豊富にあるならば、水もどこかにあるに違いない。短絡的な発想だとは思うが、完全に間違いではないだろう。

「森に行こう。川か湖を探さなきゃ。あるかどうかは……わからないけど」

「大丈夫、きつとあるよ」

白咲さんは笑顔で振り向いた。

昨日と違って、森には動物が多く潜んでいることがわかった。耳の小さなウサギ（あるいは大きなネズミ）が木々の間から顔を出し、僕たちの様子を伺っているのを何度も見た。僕たちのことを相当警戒しているらしい。木の幹や葉の先には虫も多く見られた。

海から二時間ほど歩くと、地面が強い傾斜を帯びてきた。山に入ったようだ。ごつごつとした岩肌が目立つようになり、木々も大きくくねって生えている。足元は腐葉土で覆われていて歩きにくい。

恐らくこれ以上登まっすぐ登っても水源は見つからないだろう。水は高いところから低いところに流れる。今僕たちがいる場所に水

の流れが見られないということは、その上にもまとまった水はないと考えるのが自然だ。

しばらく斜面を横切って歩いた。山肌から突出した岩によじ登ると視界がひらけ、僕たちが歩いてきた森が一望できた。

「ずいぶん登ってきたみたいだ」

「瑛くん、あれ」

白咲さんが海岸線の右手側を指さす。目を凝らして見ると、海岸から内陸側に小さな切れ込みがあった。さらに内側は森の木々が邪魔をして見えない。

「あれ、もしかしたら河口じゃないかな？」

「そうかもしれない。もう少し歩いてみよう……白咲さん、大丈夫？」

「大丈夫じゃなくなったら瑛くんが助けてくれるでしょ？」

僕は照れ隠しの苦笑いをしながら頷いた。白咲さんをおぶつても歩き続ける覚悟があるのは事実だ。もちろん、そんな事態を引き起こすまでにできることがあるのなら、すべてやってのける自信もある。

「頼りにしてるからね」

白咲さんの笑顔を見るだけで疲れが吹っ飛んだ心持ちがする。単純な男だな、と思った。

さらに一時間ほど歩いて、ようやく川を見つけた。川幅が三メートルほどの細い川だが、流れは速く水も澄んでいる。塩気はなく真水だ。

「たくさん歩いたから喉乾いちゃった」

言いながら白咲さんが水をすくって口に含んだ。ゆっくりと水を飲む表情がすぐに安堵のそれへと変わった。言葉以上に喉の渴きはひどかったのかもしれない。

「とりあえずは安心だ。次は食料かな」

「あと雨風を防げる場所と、火だね」

「火か……」

ライターやマッチがどれほど便利な代物が身にしみてわかった。昔、博物館の体験学習で教わった原始的な火おこしの方法を必死で思い出す。原理としてはとにかく摩擦熱で発火させればいいのだから、そのための器具をどう用意すればいいのか、肝心なところを覚えていない。

「とにかくやってみようか」

河原に落ちていた木の枝の、できるだけまっすぐで湿っていないものを拾い、別の木片に擦りつけてみる。三十分くらいそうしていただろうか。

火は起こる気配もなかった。枝の摩擦面を指で触つてみると、熱は帯びているがほのかに暖かいという程度だ。僕は汗だくになりながらさらに擦り続けるが、手のまめと木の削り屑が増えていくばかりだった。

「瑛くん、少し休んだほうがいいよ」

白咲さんが水に濡らしたハンカチを渡してくれる。手のひらにあてがうと水がまめに染みてちくちくと痛んだ。

「昔の人は大変だったんだね」

「そうだね。他に何か火をつける方法があればいいんだけど」

「わたしの持ち物でなんとかならないかな」

白咲さんはポーチを開けて中に入っているものを取り出した。

ポケットティッシュに裁縫セット、布切れや予備のボタンが入ったビニール袋、手のひらサイズの鏡、それと日本のペンとメモ帳だ。

「鏡で光を集めて……はだめか。一枚じゃ結局同じだ」

「ビニール袋に水を入れてレンズにするのはどう？」

「レンズ？」

「うん。えっと、なんていったかな……そう、収斂火災！ 窓際に水の入ったペットボトルや水晶を置いておくと火事になっちゃうってやつ」

つまり、虫めがねで太陽の熱を集めて紙に火をつけるのと同じ原理だ。

「なるほど、やってみよう」

川から水を汲んで、ビニール袋に満たした。

木を擦ってできた削り屑と、ポケットティッシュを石の上に置き、ペンで黒い点を描いた。火がついたらすぐに焚き火にできるよう、白咲さんには細い枯れ木を集めてもらう。太陽はそろそろ僕たちの真上に来ていて、とても好都合だった。自分の影を気にせずに光を集められるからだ。

慎重に、できるだけ手を動かさないようにティッシュの上に水入りのビニール袋をかざす。焦点はちゃんとできているようだ。あとは火がつくのを願うだけだった。

二人とも息を飲みながらティッシュの黒点とその周りに盛られた木屑を見つめていた。やがてちりちりと煙が上がり始めた。思わず声が漏れるが、ここで焦点をずらしてしまっわけにはいかない。緊張する手の震えを殺してさらに待つと、黒点が赤く光った。小さな火種ができたのだ。

僕はすぐにティッシュをもう何枚か重ね、火種を大きくすることに努めた。そして丁寧に、組み上げた焚き木の下へ潜り込ませ、ゆっくりと息を吹きかける。

水辺にあっても枯れ木がよく乾燥していたせいか、火はすぐに燃え移った。腹の底から安堵のため息が出た。

「よかった。こんな方法を思いつくなんて、さすが白咲さんだ」

「わ、わたしは、昔本で読んだことを思い出したただだよ」

「でもビニール袋もティッシュも白咲さんの持ち物だし」

「木屑と火種を作ったのは瑛くんでしょ？」

白咲さんはくすくす笑いながら湿ったハンカチで僕の額を拭く。

自分でも気がつかなかったが、脂汗がひどかった。

火を手に入れたあとは、とにかくその火を絶やさないように心がけた。二人で木をたくさん集めたし、強い風が吹いて消えてしまわ

ないように、川原の石を積み上げて竈のようなものも造ってみた。  
我ながらよくここまで頭が回るものだ、と関心する。

竈が出来上がるころには二度目の夕日が山に落ちかけていた。

「煙、誰か気がついてくれるかな」

白咲さんが焚き火から立ち上る灰色の煙を見つめながら呟く。煙を見つけて、アナでなくとも友好的な異星人―（つまり、この星の住人）が助けに来てくれるのを期待しているのだ。

「きつと大丈夫だよ」

根拠はなかった。ただ否定するのは白咲さんにとっても、僕自身にとつてもいい結果をうまないだろう。助かると信じているからこそ、生き延びる意志が生じるのだ。

「雨、降らないといいね」

「うん……明日は洞窟でも探そう。きつとあるよ」

沈みかけた夕日が山の向こう側へ消えていくのは早かった。

僕たちは再び身を寄せあつて、手を繋ぎ体を休めることにする。

暖かな炎を見つめながら、暗くなるとすぐに眠りへと落ちていった。

### 3 青葉瑛

僕たちが名も知らぬ星で遭難してから、二週間、もしくは十四の夜が過ぎた。

二日目に見つけた川から、上流に向かって少し進むと大きな洞窟を見つけ、そこを住居として過ごしていた。白咲さんの持っていた縫い糸を何本かまとめ、太くしてから枝に巻きつける。そして糸の先に石で叩いて曲げた針を取り付ければ、簡単な釣具が作れた。小さな芋虫を針に刺して川の深いところへ垂らしてやると、魚は意外にも容易に釣ることができた。ここの魚たちは知性による罠を知らないらしい。

森ではいくつか木の実も採ることができた。赤黒く表面がぶつぶ

つとした、小指の先ほどの大きさの実や、それよりは大きくて固い、強烈な酸っぱさの実が主だった。これらの木の実基本的空腹を満たすことはできなかったが、甘味や酸味を摂取するには簡単で有益な方法になった。

助けは当然ながらまだ来ていない。僕と白咲さんは、内心では諦めすら感じていたが、お互いに決して口に出しはしなかった。

もし初めのころのロビンソン・クルーソーのように、一人きりでサバイバル生活を送らなければいけないことになっていたら、僕はとくに死んでしまっているだろう。白咲さんの持ち物がなければまともな食事や暖をとることもままならなかったのも理由のひとつだが、一番の大きいのは精神的な理由だ。

いつでも側に誰がいてくれる。それだけで生きる気力が湧いてくるのだ。

夜になると、しばしば山奥から奇妙な声が聞こえてくる。犬か狼の遠吠えのような声だった。

「このあたりまで下りてくるのかな」

怯えた様子で白咲さんは言った。僕の手をぎゅっと握る。

「どうか。火がある間は寄ってこないとは思っけど」

「そうだね……」

白咲さんが小さくあくびする。今日も朝から薪や木の実を集め、日中は森や周囲を探索していたせいで疲れているのだろう。

「ふふふ。こんなに健康的な夏休みなんて初めてかも」

「白咲さんは夜更かし好きだからね」

僕は地球から飛び立った夜のことを思い出して言った。

「いつもじゃないよ。夏休みとか冬休みとか、長い休みになるとつい……ね」

「白咲さんはもっと真面目でおしとやかな女の子だと思ってた」

「瑛くんはそういう女の子のほうが好き？」

「いや、あの……その……」

僕は見事にかかわれてしまったようだ。小悪魔的な瞳が上目遣

いで僕を見つめていた。

「そんなこともなさそうで、ちょっと安心かな」

「うん……」

きつと僕の顔は真つ赤なのだろう。コートの中で白咲さんはもぞもぞと動き、頬を僕の肩に押し付けた。ここ最近は座りながらではなく、地面に二人で寝そべっていつもこうしている。白咲さんにとつてはこのほうがより安心できるらしい。

五分もたたないうちに白咲さんは寝息をたてはじめた。

僕はしばらく眠れなさそうだ。なぜだかはわからない。遠吠えをした獣が怖かったのかもしれないし、この環境に慣れてしまつて、疲れにくくなっていたからかもしれない。

食料や水に困らなくなつて比較的安全な屋根を手に入れてから、時間と心の余裕が増えたためか、考え事が多くなつた。明日の行動予定をたてたり、今のサバイバル生活をもつと楽にするためには何が必要かとか、その必要なものはどうしたら手に入るのか、などが主な内容だ。

もう一つ、思い浮かべてはすぐにかき消す考えもあった。

アリメンシルで行つた、グテアंकとの朗読会のことだ。

あの朗読会で、グテアंकではなく僕が勝つていたらと思つと余計に目が冴えてくる。あのとき詠んだ詩を推敲することもあつた。

そんなことをしても、僕がグテアंकに完敗した事実は変わらない。詩がこの星から助けだしてくれるわけでもない。朗読会のことを思い起こす度に、自分への嘲笑と戒めを込めて必死で忘れようとするのだ。

—— 生きるための意志とは別のところで、僕の問題はかなりまいつているようだった。

白咲さんが寝返りをうつて握っていた手を解いた。僕はまだ眠れなかつたので、彼女にコートをかけ直してから起き上がり、焚き火に薪をくべる。

外へ出て空を見上げた。見慣れない夜空だ。この夜空を見ると毎

回、ここは地球じゃないんだな、と思い知らされる。

少し河原のほうへ歩いた。洞窟の入り口から漏れる焚き火の光を見失わない程度の距離を行くと、僕の身長ほどの大きな丸い岩が地面に居座っている。

よじ登って川や星を見つめながら、僕は無意識に詩を詠み始めていた。今はこんなことをしている状況ではない、と思っても口からは次々と言葉が出てくる。詩は僕にとって最高の娯楽であると同時に、最悪の麻薬なのだ。

向こう岸に生えている木の枝が風もなく揺れた。僕は身を固めてじつとその木を見つめる。闇の中に、ぼんやりと影が浮かび上がった。

「猿？」

影は背中を丸め、短い足で枝の上に佇んでいる。豊かな体毛が暗がりに溶け込んでいて、実際の大きさはよく把握できない。

僕はゆっくりと後ずさりしながら岩を下りた。向こうもこちらのことを観察するように僕を見つめている。

距離を離していく途中、遠くでまた遠吠えが響いた。それを合図にするように、猿の影は完全に闇夜に消えてしまう。

「猿にも言葉は通じないだろうな」

僕はそう呟いてからもう一度夜空を見上げて、洞窟へ戻った。

次の日の夜も、白咲さんが眠ったあとに寢床を抜けだして河原で詩を詠んだ。もともと哀愁を帯びた詩はあまり作ってこなかった（あるいは作れなかった）が、白咲さん以外に話し相手がいないこの世界では否が応でも作風が偏っていく。出来上がった作品を書き留められないのが残念だ。

不思議なことに、猿は今日も対岸に座り込んでいた。僕を襲ってくる気配はまったくなく、ただ聞きなれない人類の言語という音に耳を澄ましているようだ。

自然と動物を相手に詩を語るなんて、神話時代の詩人になったような気分だった。城のエルザたちと草木や猿とでは、どちらがより良い聞き手なのだろう、と冗談めいた考えを抱いた。

「瑛くん？」

背後から白咲さんの声がした。

「白咲さん、眠れないの？」

「うん……起きたら瑛くんがなくて、ちょっと不安になっちゃった」

白咲さんは眠たそうな目をこすりながら、本当に不安げな笑顔を浮かべる。

「隣、行っていていいかな」

「うん。つかまって」

「ありがとう……詩を詠んでたの？」

「まあ、そうだね」

そっか、と白咲さんは暗い川面を見ながら言った。対岸の猿はいつの間にかいなくなっている。

「わたしね、前にも瑛くんの詩を読んだことがあるんだよ。タイトルは、えつと……『ベテルギウス』だったかな」

「去年の学年末に、担任の青山先生に頼まれて学内誌に投稿したやつだ。読んでくれた人がいるなんて思わなかった」

「そう。なんだかすごくきれいな詩で、その詩を書いたのが瑛くんだって知って、わたし、すごくびっくりしたんだ。あの……瑛くんとはあんまり仲良く喋ったことなかったけど、あんな詩を書く人なんだなって思ってた」

「あんまり上手に書けなかったから、なんだか恥ずかしいな」

「そんなことないよ！ 瑛くんがどんな男の子なのか、よくわかる素敵な詩だったよ」

白咲さんは僕を見上げ、急に真摯な顔つきになった。

「それからね、健くんにも瑛くんのこといろいろ訊いたんだ。二人が仲良しなのは知ってたから。健くんにはからかわれることも多かつ

たけど、瑛くんのことたくさん教えてもらったよ」

「岡原に訊いたのか……あいつなんて言ってた？」

「うふふ。秘密」

白咲さんが笑ってから、僕たちも辺りも静かになった。風もなく、川のせせらぎ以外はまったく無音だ。空の星が瞬く音さえも聞こえてきそうだった。

白咲さんは僕に体を預けた。途端にぐすり、と鼻をすすする音がする。

「健くん心配してるかなあ……」

なにも答えることができなかった。白咲さんが抱いている心細さがすべて、その言葉に乘せられているように感じたからだ。

「ねえ、瑛くん。わたしたち、これからどうなるのかな」

「……きつと、助かるよ」

「もし助からなかったら？」

白咲さんの声がひどく震えている。

「そんなこと、考えちゃだめだ」

「……わたしね、最初は瑛くんと二人つきりですごく嬉しかったんだ」

「嬉しかった？」

「うん。だって、瑛くんはずっとアナちゃんにべったりで、アナちゃんの言うことはなんでも信じてたみたいだったから。わたし、ちよつと悔しかったのかな……やつと二人つきりになれたんだ、ってそんなふうに考えちゃってたんだ」

「今は？」

白咲さんは言葉を詰まらせた。あふれる感情を制御するのに精一杯で、言葉を選ぶことが難しくなっているのかもしれない。

「今は……ううん、今も嬉しいのかも。おかしいよね。誰もいなくてすごく寂しいのに、瑛くんといられるならそれでもいいって思うなんて。瑛くんの気持ちはなんにも考えてないんだよ。最低だよ……」

僕にも白咲さんの気持ちはよくわかった。もう二度と故郷に帰ることができないという恐怖が実感に変わりはじめ、今感じているわずかな幸せのほうが大切に思えてくるのだ。しかし同じ状況に追い込まれたもう片方が、同じように思っているのかはわからない。それが白咲さんの一番大きな不安だったのだろう。

「ごめんね。わたし、自分勝手すぎる」

「……もしこのまま、誰も助けに来なかったら」

僕は息を飲み込んだ。白咲さんが泣きじゃくった顔を僕に向けて、言葉の続きを待っている。

「二人で暮らそう。今よりもっと、いい環境を見つけて、生活に必要な道具を揃えて……二人ならできるよ。僕はそう信じてる」

言ってから、僕は生まれて初めて女の子を抱きしめた。白咲さんの暖かな体温と、心臓の鼓動が直に伝わってくる。柔らかな女の子の香りが、抱きしめる力を余計に強めた。

白咲さんも無言で僕の背中に手を回す。最初は弱々しく臆病に、それから意を決したように僕を強く抱きしめる。

とても幸せな気持ちだ。

「わたし、瑛くんのが大好き」

「僕もだ。白咲さんのことは、僕がずっと守ってみせる」

「へへへ……わたし、プロポーズなんてされるの初めてだよ」

白咲さんが耳元で笑った。

#### 4 ロロロリヨ・グジグゲーニエ二十三世、偉大なる宇宙冒険家

翌朝、白咲さんは何こともなかったかのように洞窟の寢床で目を覚ました。僕はというと、白咲さんを抱きしめた感覚が腕に残りすぎていて、ほとんど眠ることができなかった。倦怠感と高揚感が体中に満ち溢れている。

今日もまたこれまでと同じ一日だ。火を絶やさないように焚き木を集め、魚を釣り、木の実を採ることに時間を費やす。ただひとつ、昨日までと違うことがあるとすれば、僕たちの興味が本格的に住環境を充実させることへ向いたということだろう。そして夜は岩に登って詩を語る。白咲さんが一緒にいることもあれば、眠れないときに一人で寢床を抜け出すこともあった。

そんな生活がしばらく続いた。辛いと感じることは少なくなっていくた。白咲さんと二人で過ごす充足感のほうが大きくなっていったからだった。

僕が白咲さんを抱きしめた夜から、さらに二週間ほど経った。この日の夜は一人で詩を詠んでいた。

川の向こう側に、久しぶりに猿の姿を見た。行儀よく枝に腰掛けた猿は、僕に詩を聞かせると言わんばかりにこちらをじっと見つめている。

もしかしたらあの猿は、この星に生まれた知性の萌芽なのかもしれない。これから気の遠くなるほど未来では、あの猿の子孫がこの星の支配者になっているのではないか。

そんなふうを考えていた矢先のことだ。

猿が木から降りて、こちら側に向かって歩き出した。長い手と短い足を交互に動かして、その猿は、水の上を歩き始める。

僕は啞然としながら猿の動きを見つめていた。そしていつの間にか目の前にまでやってきていた猿は、岩の上の僕を見上げて、言葉を発したのだ。

「あーあー。こんばんは、こんばんは」

驚くよりも先に、僕は笑ってしまった。もふもふとした毛に包まれた、赤ら顔の猿が人間の声でしゃべっているのだ。想像以上にシユールな光景だった。

「私、グジググゲーニエ。君の名前は？」

猿はゆっくりとした口調で、大げさなジェスチャーを交えながら言った。しわくちやの指で僕と猿自身を交互に指し示す。

「私、グジッグゲーニエ。君は誰？ うーん、これでわかるかな」

「……僕は青葉瑛」

びくりとグジッグゲーニエの毛が逆立つ。それから嬉しそうに、

「ボクワオバキラ？ それが君の名前かい？」

「青葉瑛」

「アオバアキラ……あー、私は、グジッグゲーニエ。ロロロリヨ・

グジッグゲーニエ二十三世。君に、どうしても伝えたいことがある」

「ロホロリヨ？」

「違う違う。ロロロリヨ。ロ・ロ・ロ・リヨ」

グジッグゲーニエはやおら手を挙げて空を指さした。

「私、宇宙から来た」

「助けに来てくれたんですか？」

「ん？」

当然のように、グジッグゲーニエに僕の言葉は通じなかった。しかし彼の言っていることは理解ができる。アナからもらった翻訳機が彼の言葉を訳しているのだ。それはつまり、この猿が全天連合にヴィナス通じる異星人であるということの意味している。

僕たちを搜索していたわけではないようだが、うまく状況を伝えることができれば、助けだしてくれるかもしれない。

そう思うと鼓動が馳せた。ことは慎重に行わなければいけない。

焦るな、と自分に対して必死に言い聞かせた。

「私、君たちを見つけた。君たち、言葉話せる。火を使う。道具を使う。とても賢い」

「あ、あの！ 僕にはあなたの言葉がわかります。えーっと……僕、あなたの言葉、よくわかる！」

まぬけな仕草だっただろう。しかし、グジッグゲーニエにはそれで充分だったようだ。

グジッグゲーニエは目を丸くした。猿の外見に似合わず表情は豊かだ。

「……驚いたな。私の言葉がわかるのか？ こんな生命体は冒険家

人生でも初めてだ」

「冒険家ですって？」

僕は彼の「冒険家」という音を復唱した。

「そう、冒険家。宇宙を旅して未開惑星を探す。知的生命が存在しなければ植民地にして、存在すれば友好を結ぶ。えーっと、ここま  
でわかる？」

僕は強く首を縦に振った。

「それは肯定の仕草？　ならよかった。ずいぶんと高度な知性を持つ  
ているようだが……どうして私の言葉がわかるんだい？」

「全天連合の友人にもらった翻訳機のおかげです」  
ヴィナス

「ビナス？　ユウジン？　うーむ……君の言葉は私にはわからないな。思  
念読み取りの類だろうか」

「それよりも！　僕たちを、助けてくれませんか！」

「待てよ、本当に私の言葉はわかつているのだろうか」

会話はなかなか上手く噛み合わなかった。もどかしいが、諦める  
わけにもいかない。焦燥感が募っていった。

グジググゲーニエは側にあった小さな石を持ち上げて、

「これはなんだい？」

「石」

「イシ……では、あれは？」

「木だ」

「キダね。では」彼は川面を指さした。「私の名前は覚えているか  
い？」

「ロロロリヨ・グジググゲーニエ。これで信じてもらえますか？」

「ふむ。私の言葉がわかるというのはたしかなようだ」

グジググゲーニエが考えるようにして顎にいびつな手を当て、押  
し黙った。

「まあいいだろう。ところで、君はずっとなにかを詠っているよう  
にみえたが、詩人なのかい？」

「ええ、まあ」

「肯定かい？ 良い文化を持っているね。大事にするといい。詩は言葉を研ぎ澄ましたものだ。いつか強力な武器になる。君たちの文明が、いつそれを必要とすることになるかは、私にはわからないがね」

きやつきや、と猿の鳴き声で笑って、グジッグゲーニエはふわふわの体毛に手を突っ込んだ。

「君にはこれを書いてもらいたい」

グジッグゲーニエは体毛から白い紙と、細長いペンを取り出す。

紙の面には「惑星所有権利書」と大きく書かれていた。

「君たちがこの星の所有者であることを証明する書類だ。これに署名してくれば、たとえ他の星から侵略者がやってきたとしても、ロロロリヨ・グジッグゲーニエ二十三世が保証人になり、私の名前にかけて君たちを保護する。もちろんその権利は君の子孫に相続してもらってかまわない」

「いや、あの、僕たちはこの星の生き物じゃないんです」

「ああ、文字は持っているかい？ なかったら君の印となるものであればなんでもいい」

僕の言う事などお構いなしに、権利書を突き出した。猿の顔ににっこりと、不気味な笑顔が浮かんでいる。

しぶしぶ権利書にサインをした。彼がこの後どういう行動に出るのかは想像もつかなかったが、いざとなれば白咲さんを連れて彼にしがみついてやればいい。そう思った。

「なかなか複雑な文字だな。それで、君たちはこの星のことをなんて呼んでいるんだい？」

「星の名前？」

「簡単な名前でもいいんだ。『大地』とか『地面』とか。宗教を持っているのならその神の名前でもいい」

僕は頭を捻った。この星の名前なんて考えたこともなかったからだ――

僕が答えを考えあぐねていたそのとき、森から連続した遠吠えが

聞こえた。けたたましい鳴き声が夜空に響く。僕もグジググゲーニエもその遠吠えに反応して身構えていた。

とにかく聞いたこともないほど騒々しく、危機感に満ち、そして近い遠吠えだった。犬や狼がなにかに恐れて吠えている声だ。

「ああ、そうだ、すっかり忘れていた。君たちにどうしても伝えたいことがあったんだ」

グジググゲーニエが森の奥を見つめながら言った。

「山向こうの草原から獣が一匹、山に入ったと四五日前から動物たちが噂をしていた。肉食獣だ。できるだけ遠くへ逃げなさい、さもないと――」

目の前で、猿が食われた。

森の陰から飛び出した獣が、グジググゲーニエの喉元に噛み付いたのだ。

大きな獣だった。虎のようにしなやかだが、肩から頭にかけては異様に大きく力強い体つきだ。顔は丸く、口元からは二本の長大な牙が生えている。

僕はすぐに身を翻して白咲さんの待つ洞窟へ走った。獣はグジググゲーニエの死体に気を取られているようで、僕を追うことはしなかった。いや、それもわずかな間だけだろう。一刻も早く白咲さんを起こして逃げなければいけない。

「白咲さん！ 起きてっ」

「瑛くん……？ どうしたの？」

「今すぐここから逃げよう」

「逃げるってどこへ？」

白咲さんの言葉にはっとした。どこへ逃げる？ そうだ、どこへ逃げれば安全なんだ？

グジググゲーニエは最後にできるだけ遠くへと言った。海だろうか、それとも山の向こう側だろうか。いや、この暗がりの中でさらに山を登るのは危険だ。

「海だ。海へ逃げよう」

僕は焚き火の中から太い薪を抜いて、かがり火にした。森を抜けるのに明かりも必要だろうし、いざとなればこの炎であの獣から身を守るかもしれない。

起き抜けの白咲さんは、あまり快活には動けないようだった。僕は彼女の手を引き、川からはできるだけ距離をとって海へと走り出す。

しばらく下り坂が続いて足場の状況は最悪だった。三十分ほど走り続けて地面が平坦になると、今度はかがり火が消えかかってきて視界が悪くなる。それでもここ数週間の内に探索した経験から、まもなく森は抜けられるはずだと思った。

「あ、あきらくん、ちょっと……まって……」

粗い息をあげて、白咲さんが立ち止まった。ここまで走り詰めで体力が限界だったようだ。

僕もまた呼吸を整えながら、速度を緩めた。歩きでもあと十分ほど行けば海のはずだ。周囲を充分に警戒しながら、まっすぐ進むことを心がける。

「瑛くん、急にどうしたの？」

「大きな……虎かライオンみたいな獣を見たんだ」

「ライオン!？」

しっ、と人差し指を立てて白咲さんの声を制した。もしあの獣が僕を追ってきていたとしたら、声を聴きつけてくるかもしれない。

「とにかく海まで出よう。ここは危ない」

「う、うん……」

かがり火がちりちりと音を立てて、今にも消えようとしていた。

## 5 アナの戦い

できるだけ波打ち際の、乾いた砂の上い腰を下ろした。森を見つめながら獣が追ってきていないか警戒する。森の中と違い、月明か

りが一面を照らす砂浜はわりかた明るい。あの獣がいつ森から姿を現しても、見つけれそうだ。

「しばらく休んだら海に沿って別の場所に行ってみよう」

一ヶ月ほどを過ごしたあの洞窟にはそれなりの愛着が湧いていたが、洞窟や河原の周辺がいつ安全になるかはわからない。朝が来ても戻らないのが得策だと思った。

「うん……」

白咲さんは怯えた表情で背中を丸める。

森が恐ろしいほど静かだ。小動物や虫たちをはじめ、木々さえも山の向こうからやってきた獣を恐れているかのようだった。

目の前で噛み殺されたグジグゲーニエを思い出し、途端に腕が震える。饒舌なグジグゲーニエはもう死んでいるのだという実感が湧いてきて、とてつもない恐怖を感じた。猿の血の臭いや、獣の臭いがその恐怖と共に鼻の奥にこびりついている。

グジグゲーニエのことは白咲さんには言わないでおこうと思った。地球へ帰る希望を失ったばかりか、僕の目の前で獣によって殺されただなんて、とても言えるわけがないのだ。

がさり、と草陰が揺れる。一瞬にして僕たちに緊張が走った。目を凝らして森を見つめたが、獣らしい姿は見えない。

「ウサギかネズミかな」

僕に体を摺り寄せて白咲さんが言った。体が小刻みに震えている。立ち上がって、確認をしようとしたそのとき。

低い唸り声と共に茶色い獣が森から飛び出した。グジグゲーニエの喉に噛み付いた、あの獣だ！

獣の目が月の光を反射してぎらりと光り、姿勢を低くする。次の瞬間、跳び跳ねるようにその巨躯が直線的に動いた。

「白咲さん逃げて！」

白咲さんにそう言うのが精一杯だった。小さく顎を引いて走り出す白咲さんを横目に、僕は火の消えた焚き木を握りしめて獣に対峙する。獣の動きは重厚だが、一跳びの距離はかなり長い。二人が走

つて逃げても、恐らくすぐに追いつかれてしまっただろう。

だから僕は獣と戦うのだ。それ以外に選択肢はない。

足に力を入れ地面をしつかりと踏みしめた。一直線に迫ってくる獣を見据えて、焚き木を振り上げる。

獣の体が空中でよじれ、顎が大きく開かれた。二本の鋭い牙で僕の首を正確に狙っているのだ。その牙が生える、体の割に小さな頭部へ体中の体重を込めて木を振り下ろす。

ガツンというたしかな感触があった。獣はその場へたたき落とされ、悲鳴に似た声をあげながら砂浜へ転がった。しかし続けざまに、よろけながらも体を縮めて再び攻撃の姿勢をとる。獣が僕に跳びかかるまですぐだった。

「痛いっ……！」

とつさに焚き木を振り上げたが遅かった。僕は獣に押し倒されて右腕を噛まれている。獣の牙が腕の肉を突き抜け骨を砕く音が体の内側から響き、やや遅れて目の前が真っ白になりそうな激痛がやってきた。

「瑛くん!？」

「いいからっ……に……げて!!」

獣の前肢で胸を抑えつけられ声はほとんど出ない。腕から体温がどんどん逃げていくのがわかった。もしかしたらもう手首から先が千切れてしまっているのかもしれない。霞んでいく視界の中、獣の顎が開かれるのが見える。

今度こそ死ぬんだな。冷静にそう思った。

「探したぞ、アキラ」

ドスンという音と共に、獣が吹き飛ぶ。なぜ? そんなことを考えている余裕は、時間的にも体力的にもなかった。

ただ、声が聞こえた。それが誰の声かもわかる。わかった途端にこめかみに血流が増すのを感じた。苦痛と安堵と歓喜が同時に僕の感情を席捲していく。

アナだ。

紺色のスーツまま、頭に小さな帽子をかぶって僕の横に仁王立ちしている。僕を見下ろす瞳は月明かりで青く透明な輝きを燈していた。

「ア……ナ……」

「遅くなつてすまない」

アナは力強く笑った。つられて僕も笑うが、腕の痛みで上手く笑えた自信はない。

「もう少し待っていてくれ。マツリも聞こえているな！」

そう叫ぶと、砂浜にうずくまる獣に向き直った。腰を沈めて構え、息を大きく吸う。

アナが跳んだ。一瞬で獣の懷へ潜り、肘打ちを食らわせる。さらに続けて拳をいくつも打ち込み、空中で一回転。最後に獣の頭へ蹴りを入れ軽やかに着地した。信じられない早業だった。

死んでしまったのか、気を失っているのかはわからないが、獣はもうぴくりとも動かない。アナが金髪をかき揚げた。

「アナちゃん……!!」

「マツリも元気そうよかった」

駆け寄ってきた白咲さんが僕を抱き起こす。腕の痛みはもうなかった。完全に麻痺状態だ。

「瑛くんが怪我してるんだよ！」

「大丈夫だ。絶対に死なせはしない。すぐに戻るぞ」

「もどるって……ど……こへ？ テュ、テューヴィリンか？」

まどろみに似た感覚の中、必死にそう訊ねた。なにか言葉を発しなればまた意識が無くなりそうだったからだ。

「……テューヴィリン号は現在修復中だ」

アナは懷から透明なサイコロを取り出す。ちらちらと朧げな光が頻りに表面に走っている。

サイコロはアナの手のひらで浮き上がっていた。そしてアナがなにかを呟くと——よく聞き取ることができなかった——、周囲の景色が回転するような感覚に襲われる。色相が反転し、空には一本の

太い光の筋が現れた。

気がつくと僕たちはまた、白い壁に取り囲まれていた。

テューヴィリン号の中と同じ、あの白さだ。気味が悪い白さだと思っていたが、今はなぜか見ていると落ち着く気がしてくる。久しぶりに触れた文明に安堵しているのかもしれない。

「すぐに治してやるからな」

言ってアナはロニーを呼び出した。白咲さんは膝に僕の頭を乗せ、悲痛な面持ちでアナの行動を見守っている。

ロニーが僕の右手に覆いかぶさった。不思議な暖かさが右手に戻ってくると、一度だけ腕の痛覚すべてを針で刺されたような痛みが走る。その痛みはすぐに引いていき、今度は指先にぬるりとした感触を得た。自分の血の感触のようだ。

「体組織は修復されたが、しばらくは貧血に襲われるかもしれない。我慢してくれ」

「治ったって……こと？」

「少なくとも傷は塞がったし、感染症の病原も排除した。血液はもう少し時間をかけないと難しいが……アキラ、立てるか？」

ゆっくりと体を起こしてみた。アナの言うとおり傷は跡形もなく塞がっていたし、血がべったりついた指もちゃんと動く。深呼吸をして足に力を入れた。なんとか立ち上がることはできそうだ。白咲さんが僕の腕を握って支えてくれる。

「よかった。二人とも、私に着いてきてほしい……ここもまだ危険だ」

「危険ってどういうこと？ まだラングイが出るの？」

「いや」

ふいに耳をつんざく警報音が鳴り響く。壁は赤と白に明滅している。

アナが目細めた。

「なにが起こってるの、アナちゃん？」

「お前たちは心配するな。とにかく逃げよう」

僕の手をとってアナは走り出す。白咲さんの支えがなければすぐにでも倒れてしまいそうなのが情けなかった。

「逃がさないわ」

女性の声が警報に混じった。点滅する壁にいくつも穴が空き、中から黒服四本腕の異星人たちが何人も現れる。その手には警棒や銃器を持ち、隊列を組んであつというまに僕たちを囲んでしまう。

最後に開いた壁から、少女が出てきた。アナと同じ紺色のスーツに、金色のラインが入った帽子。あの子はたしか――

「シーシャ」

アナが寂しそうに呟く。

「アナ。あなた、自分が何をしたのかわかってるの？」

「私はただ友人を助けただけだ」

「その言い訳が法廷でも通じるかしら」

黒服たちが一歩僕たちに踏み込んだ。シーシャムレは右手をあげて彼らの動きを制する。

「アヴナルレ・グラスナヴリトヴィー等外交官および第一上等諜報官。ヴィナスク全天連合軍刑法第二百二条違反の疑いで拘束します。あなたの軍

人としての特権はすべて剥奪、外交官特権も一部停止されます。残念だわ、アナ。あなただけは、私の手で捕らえたくはなかったわ」

「軍刑法違反？　どういふことだよアナ……君は外交官じゃなかったのか？」

わざわざシーシャムレが刑法ではなく、「軍」刑法という言葉を使った意味を、僕はすぐに理解した。それはつまり、アナが特別な法律の下で裁かれる立場にあることを指している。

アナは何も答えない。僕の脳裏には諜報官という言葉が何度も反響している。宇宙人の諜報官――スパイだって？　そんな身分のアナがなぜ地球にやってきたんだ。

「それと、あなたたち。私の言葉はわかるわね。あなたたちも、全グイナスク

天連合外交法第六条二項を適用し、『戦争下における敵対文明所屬者』として拘束します。あなたたちは生命の安全、言論の自由を保証されているわ」

シーシャムレが右手を下ろし、黒服たちがアナと僕たちを捕らえさせる。アナは沈んだ顔で一言、「すまない」と言った。

「アナ！ どうして謝るんだ。君はいつたい何者なんだ！？」

黒服によつて腕が強く引つ張られた。抵抗しようにも力強い黒服の腕に抑えられているせいで身動きひとつできない。白咲さんも同じだ。アナだけは、黒服に腕を掴まれながらも移動する様子はない。ただ顔を下げ、僕たちを見ないようにしている。

アナの手首に白い手錠のようなものがかけられる。

僕たちは部屋から連れだされ、アナの姿はついに見えなくなった。

## 終章 『詩人は星のために詠う』

終章 『詩人は星のために詠う』

### 1 世界戦争

僕は狭い部屋に押し込められた。壁はやはり真っ白だが、部屋の中央から四歩ほど歩くとすぐ行き止まりになる程度の狭さだった。自分がどこから入ってきたのかはもはやわからない。入り口は投げ込まれたと同時にとじてしまったからだ。

白咲さんはこの独房に入る前に別れた。恐らく、彼女も同じような部屋に入れられているのだろう。

暴れたり叫んだりする体力は、僕には残っていなかった。貧血で頭もくらくらする。全天連合の宇宙人たちの前では、自分がいかに無力かをいよいよ思い知らせれた。

床に寝そべって、距離感のない天井を見上げる。

「アヴナルレ・グラスナヴリトヴィ第一上等諜報官……」

シーシャムレの言葉を反芻した。それがアナの身分らしい。

僕の頭の中にはいくつも不安があった。白咲さんやアナが今どうなっているかもそうだが、アナが諜報官だったという事実がもたらす不安はすば抜けて大きい。

アナははじめなんて言っていた？

『ヴィナスク全天連合所属の一等外交官……この星を調査するために派遣された』

たしかそう言ったはずだ。アナは自分のことを外交官だと言ったが、諜報官だとは言わなかった。それはつまり、彼女にとって諜報官であることは秘密であり、僕に言うべきではないと考えていたということだろう。

なんだか、アナに裏切られた心持ちがした。

嘘はついていないのかもしれない。彼女はたしかに外交官でもあるのだ。それでも、納得がいかなかった。

それに加えて、僕と白咲さんが拘束され、独房に入れられている理由はなんだ？ 『戦時下における敵対文明所属者』——僕が敵対

文明所属者だつて？ 全天連合はいつたい、誰と戦争をしているんだ。  
ヴィナスク

そんな馬鹿な。まさか、僕の文明は……地球は全天連合と戦争をしているのか？ シーシャの言葉をつなぎ合わせると、そんな考えしか浮かばない。  
ヴィナスク

そしてアナが全天連合のスパイだということから導きだされる結論。  
ヴィナスク

全天連合は地球を侵略している。そうとは思えない。

「アキラ」

アナの声が部屋に響いた。

「アナ？ どこにいるんだ？」

「ロニーを呼び出してくれ」

僕は上体を起こして胸の前の空気に触れる。以前見た青白いロニーではなく、赤いロニーが現れる。表面には「限定動作」と書かれていた。

ロニーを呼び出すと左手の壁が透明になり、向こう側にアナが立っているのが見えた。アナの独房と僕の独房が繋がったわけではなく、ただ映像が映しだされただけのようだ。僕は立ち上がってで  
きるだけアナに近づく。

「アナ……君は僕を騙していたんだね」

「そんなつもりなんてなかった。それだけはわかってほしい」  
ヴィナスク

「君は全天連合のスパイで、地球を侵略するために偵察をしてたんだろ？」

「それは違う！」

「ならどうして地球は君たちと戦争なんかしてるんだ」  
ヴィナスク

「……我々全天連合は、この宇宙のあらゆる生命をラングイから護

ることが目的だ」

「それがどうして地球との戦争になるんだ？」

アナは目を閉じて静かに語り始める。両手を体の前で、手錠によって拘束されていた。それだけでも、僕よりは自由が制限されていることがわかった。

スラルミール  
「お前たちの惑星と、お前たちの太陽をラングイの侵攻から護るためだ」

「ラングイの侵攻？」

「ラングイは星を喰う。恒星に寄生し、超新星を誘発してその熱量を取り込むことでさらに勢力を拡大させていく。それこそがラングイの脅威だ」

「超新星……」

僕が地球を飛び立つ前に見た、超新星のニユースを思い出した。

スラルミール  
「お前たちの惑星で観測された超新星は、明らかにラングイによって引き起こされたものだ。若すぎる星の、不自然な超新星はそうとしか考えられないんだ。奴らは我々の敵だ。我々生命にとって重要な熱を奪い去る。我々とラングイは、決して相容れない存在なのだ」

「だからどうしてそれで戦争になるんだよ！」

ヴィナスク  
「我々全天連合は、お前たちの惑星を保護するべく交渉に打って出た。そのためにお前たち人類の前に姿を現したのだが……そのときに先に攻撃を仕掛けてきたのは、お前たちの文明のほうだ」

アナの攻めるような言い方に、僕は言葉を返すことができなかった。僕は心のどこかで、地球人類がある日突然現れた異星人たちへ、攻撃を仕掛けるわけがない——だからこそ全天連合が絶対的な悪の侵略者だと考えていたからだ。

地球の空に巨大な宇宙船が突如現れる画を想像する。もしかしたらテューヴィリン号のような、地球よりも巨大な船が現れたのかも知れない。あるいはテューヴィリンよりもずっと小型な宇宙船が、空一面を覆い尽くしたのか。

どちらにしろ、なにも知らない地球人の目には脅威に映るだろう。  
「そんな事態を引き起こさないためにも私が言語調査のために派遣された。本来ならば、私が外交官としてお前たち人類と交渉をするはずだった」

「……僕たち地球人は君の言葉に耳を貸さなかったのか？」

「いや……これはすべて私の責任だ。いくら謝っても足りないだろう……私はその任務を放棄した」

「なんだって？」

ダウズ・ヴラングイク

「『ラングイの指』の攻撃を受けたアキラとマツリを助けるのに必死だった。お前たちを探して、実際に助けだすには時間も私の技量もなかった。お前たちを助けだすか、外交官としての職務を放棄するか……私にはお前たちを助けることしかできなかったんだ」

アナの目から涙が溢れる。彼女の愛らしい顔が、こんなにも歪んでいるのを僕は初めて目にした。小さな唇が、耳が、肩が震えていた。

「それじゃあ……地球は……僕の星は……君が僕を助けてくれたから……僕が助かったから、君たちと戦争をしているっていうのか」

僕は立っていることすらできなかった。貧血のせいではなく、ただ単純に体中の力が抜けていく。

アナは僕たちが遭難したことに責任を感じて自分の職務を放棄してまで、僕たちを救ってくれたのだ。僕が今生きているのは、すべてアナのおかげじゃないか。もしあのときアナが助けに来てくれなかったら僕は——いや、僕だけじゃない。白咲さんだってきつとあの大きな獣の腹の中だろう。

僕はそんなアナをこれ以上責める気には、とてもなれなかった。

「……君たちはもうどれくらい地球と戦っているんだ」

ヴィナスク

スラミール

「全天連合標準時間で約四日。お前たちの惑星の時間では、三日目に突入する」

「地球人は何人死んだ？」

「……大規模な武力衝突はまだ起こっていない。こちらで確認した

わけではないが、軍は十人以下だと予測している。いずれも我々の迎撃による被害だ。我々側は外交副官の死亡が確認された」

「アナは……君はもう僕たちを助けだしたじゃないか！ どうして君を外交官の任務に戻さないんだ」

アナも床に座り込んだ。立っているのに疲れたのか、あるいは僕と同じように無力感に苛まれたのか。

「私が犯した罪は……ヴィナスク全天連合ではもっとも重い罪のひとつなのだ」  
「君はなにをしたんだ？」

アナの震えがぴたりと止まった。唇を噛み締めているのは、自分の犯した罪に恐れ慄いているからかもしれない。

「私は……『大断層』を越えてしまった」  
「大断層？」

「この宇宙には、我々が普段移動することのできる三つの次元とは異なる次元がいくつも存在している。それら余剰次元を移動することによって、私たちは恒星間航行をしたり、相対的な時差を短縮して二点間を移動しているのだ……しかし我々が知る技術ではどうしても越えられない、あるいは越えてしまうとどんな影響があるのかわかっていない次元が存在する。それが大断層だ」

「なぜ君はその大断層を越えてしまった……」

僕は馬鹿だ。そこまで口にしなければ、なぜアナがそんなことをしてしまったのか、気がつかないだなんて。

「僕たちを助けるためか」

「アキラたちの体内にある簡易翻訳機は個体位置情報を示す発信機にもなっている。その情報は断層のはるか向こう側から流れてきていた。お前たちを助けるには……断層を越えるしかなかったんだ」

「そして君が僕たちを助けてくれる間に、戦争が始まってしまった」

どうしようもなくやりきれない気持ちだった。こんな事態になつてしまつて、悪いのは誰だと問えば、ヴィナスク全天連合の宇宙人たちはきつ

とアナだと言っただろうが、彼女は僕の命の恩人だ。それに地球の言葉<sup>ヴィナスク</sup>を話せるアナがないのに交渉を強行した全天連合、有無を言わず交渉役を殺して攻撃を開始した地球人。そして全天連合<sup>ヴィナスク</sup>が生命の敵だと見なすラングイ。

いったい誰を責めればいいんだ。

「どうすれば戦争は終わるんだ」

「……我々が制圧を完了するか、あるいはお前たち<sup>スラルミール</sup>の惑星の全権委任者が休戦を宣言して和平交渉を行うか……」

「君がいなくても交渉はできるの？」

「私の断片的な報告からお前たちの言語を構築することは時間をかければ可能だろう。しかし実際に戦闘が始まれば恐らく、征服の早い」

「やっぱりおかしいよ。アナにしかできないことがあるのに、君をこんなところに閉じ込めたままにするなんて……どうにかならないの!？」

「アキラ。お前にはまだ、『大断層』を越えるという行為の意味がわかっていないのだ」

「どういうことだよ」

「私はもしかしたら、歴史を変えてしまったのかもしれないのだ」

「歴史？」

「そうだ。私は大断層を越えることによって、お前たち<sup>スラルミール</sup>の惑星のはるか古の時代に降り立ったのだ。お前たち<sup>スラルミール</sup>の惑星の時間にして約三百万年前。それがアキラたちが遭難した——『ラングイの指』が使った時空転移爆弾によって、お前たちが跳ばされた場所だ」

## 2 大断層の向こう側

「三百万年前の……地球……」

「偶然、あるいは奇跡としか言いようがない。『ラングイの指』が

使う時空転移爆弾の被害を受けて酸素や水、食料が手に入る環境や時代に転移するだなんて、アキラたちは本当に幸運だった」

三百万年前——僕は驚くことすらできなかった。ただ啞然としながら、あの場所で……アナが三百万年前の地球だという場所で経験したことを思い返すだけだ。僕や白咲さんが見た動物や植物は、あの巨大な獣も含めて、みな今の地球上にいる動植物の祖先だというのが。

「その、『ラングイの指』っていうのはなに？」

「ラングイは本来ならば私たちのような生物には直接知覚することができないんだ。そんな奴らの知覚可能な部分、あるいは奴らが敵対する我々を排除するために用意した機械や兵器、それらすべてを『ラングイの指』と呼ぶ。いわばラングイの軍隊だ」

テューヴィリン号の衛星軌道上で僕たちを襲った、機械の蜘蛛を思い出す。アナは恐らくあの蜘蛛たちを指して『ラングイの指』と呼んでいるのだろう。

「ラングイの本体は我々と同じ次元には存在しない。我々がまだ知らない次元、または構造や物理法則すら異なる別の宇宙からやってきていると考えられている。時空転移爆弾は奴らが使う最悪の兵器だ……攻撃を受ければ空間ごと切り取られ時空や次元の間に送り込まれてしまう。アキラとマツリがこの宇宙の、我々の知る次元の中にいたということは、やはり奇跡なのだ」

「……僕と白咲さんがいたのは、本当に三百万年前の地球だったのか」

「相対座標、動物相や植物相、想定される地形変化から考えてまず間違いなくそうだ。だからこそ、私が大断層を越えたことが大きな罪になる」

「歴史を変えてしまったかもしれない……つまり、君がはるか昔の地球に現れることによって、今の地球になにか変化が起きているかもしれないってことか」

「私が殺したあの獣……お前たちは剣齒猫と呼ぶ動物が、もしかし

サーベルタイガー

たら今のお前たちの惑星に存在するネコ科動物たちの遠祖になっているかもしれない。単純に考えられるだけでも大きな影響があるかもしれないし、実際にはもっと違う場所で影響が出ていることすら考えられる。生まれてくるはずの生命が生まれてこなかったり、そのせいで生存するはずのなかった種が生き残ったりするのだ。大断層を越える……気の遠くなるほどのときを遡るということは、そういうことだ。私は、生命の萌芽そのものを消し去ってしまったかもしれない」

アナは涙を袖で拭う。彼女の所属する全天連合の、生命を護るという理念を少し理解することができた気がした。それほどまでに、彼女たちは生命の生き死にに対して責任感を持っているのだ。

しかし、アナの話からひとつだけ、僕は希望の光を見いだせた気がした。

頭は冴え渡っている。どうにかすれば、少なくとも戦争問題は解決できるかもしれない。

「アナ、もう一度聞くけど、僕たちが過ごしたあの星は、本当に三百万年前の地球だったんだね？」

「ああ。私もその事実を知ったときは信じられなかった……」

「地球の全権委任者って、どう決めればいいんだ」

「お前たちの文明が、我々と交渉するための一人を選びさえすればいい。我々のほうから身分や人種、経歴などは指定はしない。ありていに言えば、お前たちの問題だ」

戦争が始まってしまっているのはこのことにも問題がありそうだ。悔しいし恥ずかしいことだが、今の地球人たちには地球の命運をかけたたった一人なんて選び出せるわけがないのだろう。

「星の所有者がいたとしたら？ それも、君たち宇宙人側から認められて所有権を持つている人間がいたら？」

「……私の調査ではお前たちの惑星には外部から認識されるような画一的所有者はいなかったが……我々は所有者を全権委任者として認める」

「アナ。驚かずに聞いてほしい。僕はたぶん……地球の所有者かもしれない」

アナの顔がゆっくりと上がり、悲痛さと呆れが入り交じった表情でじつとりと僕の目を見つめた。

何度見てもきれいな碧眼だ。今は赤みが差していて、まぶたが厚ぼつたくなっているのが少し残念だった。

僕は背中に冷や汗が噴き出るのを感じながらアナの言葉を待つ。

「なにを言っているんだ？」

「僕は三百万年前の地球で所有権の証明書にサインしたんだ。たしか、ロロロリヨ・グジッグゲーニエ二十三世が……彼は死んでしまったけども……彼が保証人だ」

「ロロロリヨ・グジッグゲーニエ二十三世？ ブゼリッド人英雄の？ それは本当か！」

バン、とアナの手が壁に張り付いた。大きく見開いた目が切迫している。

「うん。どうにかしてあの証明書を手に入れられないか。そうすれば、たとえ一時的でも戦争を止めて君たちと交渉ができるかもしれない」

「今持っているわけではないのか？ どこにある？」

「三百万年前の地球で僕がサインをして……グジッグゲーニエが持ったまま彼は死んでしまった。手に入れるにはもう一度大断層を越えるしかないのか？」

アナの目がまた沈んでいった。

「今の状況では到底不可能だな……」

「グジッグゲーニエの子孫はいないの？ 彼は権利書を僕の子孫に相続してもいいと言ったんだ。それなら、彼の子孫だって僕たちを助けてくれるかもしれない」

「グジッグゲーニエは……偉大なる冒険家の正統な家系はすでに絶えてしまっている。我々はその名前を記録と足跡でしか知らないんだ。考えてもみる、お前たちの惑星で三百万年。グジッグゲーニエ

のアークツド人が使っていた平均ランシルビン暦では三十億年ほど前だ。文字通り時代も世界も、宇宙の様子すら変わってしまったている。アークツド人の文明とは全天連合黎明期ヴァイナスクからの同盟関係にあるから、権利書自体は有効だが……」

「僕がサインした契約書を手に入れる方法なほんとうにないのか？」  
アナはゆっくりと首を横に振る。明らかな諦めが顔に浮かんでいた。

僕もそれ以上言葉を継ぐことができなかった。一瞬だけ見えた希望の光はみるみるうちに小さくなっていく。せめてこの独房から出ることができれば、僕自身が再びときをこえてグジグゲーニエに権利書をもらいに行くことができるかもしれない。

しかしそれもまた、今の僕とアナには不可能なのだ。

——いや、待てよ。

「平均ランシルビン暦？」

僕はアナに確認しながら、ズボンのポケットから紙を取り出した。一ヶ月のサバイバル生活の中でさらにしわくちゃになってしまったその紙は、僕が初めてテューヴィリンに降り立ったとき、露天商に押し売りされた星の権利書——

「『平均ランシルビン暦二十八億千一年、第二十二日作成。作成者・ロロロリヨ・グジグゲーニエ二十三世』……アナ！これ見てよ」

無情に満ちたアナの顔が、今度は疑問へと染まっていった。アナにはまだ、この紙の意味がわかっていない。

いや、僕にだって正直言ってよくわからない。グジグゲーニエは、僕の目の前で食い殺されてしまったはずだ。それなのに、僕は彼の名前が書かれたこの宇宙のどこかにある星の権利書を手にしている。矛盾と興奮で頭がパンクしそうだった。ロロロリヨ・グジグゲーニエという男の名前が書かれていることが、こんなに嬉しいと思えるのはこれが最初で最後だろう。

「その権利書はいつたいたんだ」

「テューヴィリンの街で僕が露天商から買ったんだ。そうだ、露天商はこう言っていた——『大断層の向こう側』の商品だって！」

「そんな馬鹿な……たとえ『向こう側』から持ってきたものだとし  
ても、それがお前たちの星の権利書だとは限らないぞ」

そう言いつつも、アナはいつの間にか輝かしいまでに明るい表情に  
戻っている。今度こそ彼女も希望を見つけたのかもしれない。

事情を知っている者にとって『大断層の向こう側』という売り文  
句はあまりにも如何わしいものに違いない。けれども、今のアナは  
実際に『向こう側』を体験している。経緯はともかく、彼女にはそ  
の売り文句がぐつと現実味を帯びてしまったのだ。

「内容が暗号化されているな」

紙に書かれた文字は、日付と作成者の欄以外はもやで邪魔されて  
いて読むことができない。僕の目が霞んでいるわけではなく、作為  
的に文字を読み取れないように細工がしてあるようだ。

「諜報官のアナにも読めないの？」

ウイナスク

「これは全天連合の商業組合が用いる暗号だ。そもそも機密情報を  
隠蔽するための暗号とは質が異なるからな。生体情報が鍵となって  
内容の正しさを証明している」

「つまりどういうこと？」

「わかることは三つ。ひとつ、内容がすべて正規の事項であること。  
二つ目は現代の暗号化技術が使われている、つまりグジグゲーニ  
エ本人による暗号化ではないということ。そして三つ目、その暗号  
を解読するにはアキラに権利書を買った露天商が生きていれればいい  
ということだ」

アナがにやりと笑った。その瞳に例の強さと自信が戻っている。  
いかにもアナらしい目だ。

「商業組合に問い合わせることができれば、解読可能だ」

「それはこの独房の中からでもできる？」

「いや……私の権限では不可能だ。しかし、本当に戦闘を回避する  
ことができるなら……シーシャに頼んでみよう。その価値は充分に

ある！」

### 3 侵攻直前

アナは再びロニーを呼び出してシーシャムレを呼び出した。そのときに交わされたアナとシーシャムレの会話によると、本来はその呼び出すらアナにとっては越権行為だったらしい。

シーシャムレはわざわざアナの独房の中にまでやってきた。表情や言葉遣いはアナに対する憐れみが表れている。

「お願いだシーシャ。この権利書を解読申請をするだけでいい。それだけで、もしかしたら戦争が止められるかもしれないんだ」

アナがシーシャムレの手を握りながら丁寧に言う。

シーシャムレはしばらく考え込んだ。アナと僕の顔を交互に見つめ、それからため息をつく。

親交の深さを示していた手が、ゆっくりと解かれた。

「アナ……あなたは本気でそんなことを言っているの？ 私には信じられないわ」

「シーシャ！」

「そこにいるズレースク・エルザは敵対文明の人物なのよ。そんな彼が偶然持っていた内容のわからない権利書を信用しろですって？

あなた、どうかしてるわ」

「信用できるかどうかわからないから解読したいんだ。シーシャ、君だけが頼りなんだ」

「あなたは本来なら、自分の罪に対する弁護以外の発言は認められないのよ。それに軍は」

シーシャムレが僕を一瞥した。

「すでに侵攻の決定を下したわ。今から解読して、たとえそれがあの星の権利書だとしてももう間に合わない」

「そんなのおかしいだろ！」

壁に張り付いて叫ぶ。その音でアナとシーシャムレがびくんと体を震わせた。

シーシャムレの口が開きかけたが、それよりも先に僕の言葉が飛び出ていく。地球を救いたい、僕はそんな一心で興奮しきっていた。「君たちの目的は地球を征服することじゃないんだろ!?」 だったらもう少しだけ時間をくれよ。そうすればきつと地球が救えるんだ。アナがどうして君に頼むかわからないのか? 君にしかできない、君にしか頼めないからだ。君のことを心から信頼してるんだよ! 僕からもお願いだ…… 解読の手続きだけでもしてくれないか」

「アキラ」

アナがなだめるように僕の名前を呼んで首を振る。

はっとしてシーシャムレを見る。彼女の口は真一文字に結ばれ、アナとは違った意味で力強い意志を持つ目が僕を睨みつけていた。

シーシャムレには、僕の言葉が通じない。そんな簡単なことすら僕は興奮で忘れてしまっていた。

「シーシャ…… 私たちがしようとしていることは、たしかに無駄で無謀なことかもしれない。君にとっては信用できないことかもしれない。だが、このままでは私たちはまた…… 氷の星を造ってしまうぞ」

シーシャムレの眉がぴくりと動いた。

氷の星。アナとシーシャムレの故郷であるアリメンシルが経験した抗えない災厄。その出来事は、戦争に寄って引き起こされたとアナは言っていた。

アナは地球がかつてのアリメンシルのように雪と氷に閉ざされた闇の星になることを恐れているのだ。

「……何を言っても無駄よ。私は敵対文明のズレースク・エルザを信用できないし、あなたにこれ以上特権を与えるつもりもないわ」  
シーシャムレは振り向いてアナに背を向けた。アナの独房にぽっかりと外へ通じる扉が開く。もしかしたらアナだけでもそこから逃げられるのではないかと考えたが、かなり優秀な軍人らしいシーシ

ヤムレには一分の隙も見当たらなかった。

独房と扉の境目に立って、シーシャムレがもう一度僕を見つめる。僕はじっとその視線を跳ね返してやった。

「もうすぐ戦闘が始まるわ。もしかしたら……攻撃を受けて船の一部機能に障害が生じるかもしれないわね。それもきつと一瞬だろうけど……気を付けなさい」

「シーシャ？」

アナの呼び止めには応じず、シーシャムレは独房を出た。その直後に扉は壁へ変わり、また出口のない部屋になる。

シーシャムレが最後に言った言葉の意味はなんだ？ 一部機能に障害がでるかもしれない――

「アキラ、お前はマツリに事情の説明をしておいてくれ」

「説明？ ということ？」

「シーシャが言っていただろう。『攻撃を受けて一部機能に障害が生じるかもしれない』。その隙にここを出るぞ」

アナは笑った。太陽のように輝く眩しい笑顔だ。

「……そうか。シーシャムレは僕たちに協力してくれるのか」

「本来ならばこの船はお前たちの惑星の攻撃を受けてどうにかなるような船ではない。シーシャは憲兵たちを束ねる立場だからおっぴらには私たちに協力はできないのだろう。とにかく、私は動きがあるまでロニーを監視する。機会は一瞬、それも一度だけ……アキラとマツリと私、三人で必ずここを抜け出すぞ」

小さく頷く。緊張で脳髓が痺れる思いがした。

この独房を抜けることができれば事態は好転する。それが僕とアナの共通見解だ。そのためにはシーシャムレが用意してくれるチャンス逃すわけにはいかない。わずかな時間で、それもたった一度だけのチャンスだが、僕たちにとってはまさに僥倖だ。

「アナ。君はいい友達を持ってるんだね」

「ふふ。当然だ。私を誰だと思っている？」

一度アナとの話を終え、ロニーを使って今度は白咲さんの独房へと回線をつなぐ。

部屋の隅で小さくうずくまる白咲さんが見えた。膝を抱えて、肩が静かに上下している。僕に気がつく様子がないところを見ると、眠ってしまったようだった。

白咲さんの姿が映る透明な壁をノックして、大きな声で呼びかける。

「瑛くん……。やだ、わたし、いつの間にか寝ちゃってたみたい」  
白咲さんはぐずりと鼻をすすって、ぎこちない笑顔を浮かべる。  
目の下がぷつくりと膨れていた。

「白咲さん、大丈夫？ 怪我はない？」

「うん。全然平気だよ。瑛くんこそ、元氣そうでよかった」

「さつき、アナと話をしたんだ。地球と全天連合が戦争ヴァイナスをしているらしい……。僕たちがこんなふうに捕まっているのもそれが原因なんだ。でも、ここを抜け出すことができればその戦争を止められるかもしれない。アナがきつと上手くやってくれる——白咲さん、準備はいい？」

白咲さんは悲しそうな表情だ。口元は笑っているのに、目は疲れきっていて悲壮感で濁っている。

沈黙。白咲さんからは返事も頷きも返ってこない。

「白咲さん？」

「またアナちゃんか……」

臃げな視線で天井を仰いで白咲さんが呟いた。

「……瑛くん、朗読会のこと、まだ覚えてる？」

唐突に白咲さんがそう切り出す。

忘れるはずがない。あのとき、僕はグテアंकに詩の勝負を挑み、完膚なきまでに敗北した。自分自身のおごりによる恥辱は今でも鮮明に思い出せる。

だが白咲さんがどうして突然、朗読会のことを話し出したのか、

その意味はわからなかった。

「わたしはね、瑛くんの詩が好きで、とっても素敵なものだと心から思った。だから瑛くんに投票したの」

「いつたいなんの話？」

「わたし見たんだよ。アナちゃんはね、瑛くんには投票してなかったんだ」

天地がひっくり返る気がして、胸の中にもやまとした思いが湧いてでた。

僕が朗読会で獲得した票数はたった三票。そのうちの二票は白咲さんとアナの票だと思っていた。それが、そのわずかな票にアナの票が入っていないだって？ 僕は混乱でなにも言葉が出なかった。

「瑛くんはそれでもアナちゃんを信頼できるの？ わたしにはわからないよ…… 諜報官ってスパイってことでしょ？ わたしたち、きつとアナちゃんに騙されてるんだよ！ 瑛くんを宇宙に連れてきたのはどうして？ わたしたちが知らない星で死にそうになったのはなんで？ どうしてわたしと瑛くんは捕まっているの？ アナちゃんはわたしたちの星と戦争をしている宇宙人なんだよ？ わたしたちとは生きてきた環境も、文化も、考え方だった違うんだよ。きつとまた瑛くんのことを騙して地球を壊しちゃうつもりなんだ……！」

白咲さんの虚ろな瞳から涙が溢れている。その姿が、三百万年前の地球でサバイバル生活を送る僕を懸命に勇気づけてくれた女の子の姿だとはとても思えなかった。大きな絶望と恐怖からくるストレス、が白咲さんの心を支配しているのだ。

独房の壁が恨めしい。今すぐ白咲さんの隣で彼女と苦痛を分かち合いたい。

「アナちゃんはね、わたしのこと嫌いみたい」

喉から搾り出したかのような細かい声だ。

「ずっとわたしのこと睨んでたんだよ。アナちゃんは、本当は瑛くんと二人でなにかするはずだったんだ…… わたしが邪魔だったんだ」

「白咲さん！」

白咲さんの目がはつと見開かれる。もう自分がなにを言っているかもわかっていないようだった。

「アナが僕に投票しなかったことを聞けて、僕は少し嬉しい。たった二人だけど、僕の詩が言葉も通じない異星人の心に届いたんだからね。本当のことを教えてくれてありがとう、白咲さん」

アナが聞いたらどんな顔をするか、おおよその想像がついた。きっと、ニヒルな笑いを浮かべて悪びれもなくグテアंकの詩に投票した理由をつらつら述べるに違いない。

「アナを信じられないなら……僕を信じてくれ。言っただろ？ 白咲さんのことは僕が守る。もしアナが本当に僕たちを騙していたとして……白咲さんを傷つけるようなら、僕が必ず白咲さんを助けだして見せる。お願いだ。僕を信じてほしい」

ほろほろと地面に落ちる涙。真つ赤な瞳。かすれた嗚咽。

「あの……わたし……ごめんなさい」

誰が悪いわけでもない。ただすべてのタイミングが悪かったただけだ。そう思わないとこの先にもできない気がした。

この独房を出てははじめにするべきことは決まった。白咲さんを力いっぱい抱きしめよう。彼女の心を少しでも落ち着けるためにはそうするしかないし、なにより僕が抱きしめたかった。

「すべてが終わったら白咲さんに、白咲さんのために詠うよ。だから一緒にここを出よう。戦争を終わらせるんだ」

僕が彼女のために詠うのは恋と愛の詩だ。ゲーテやシラー、リルケ……いや、この世のすべての詩人たちがそうしたように、僕は愛おしくてたまらない人のために詠う。そのために僕はしなければいけないことがあるんだ。

白咲さんがこくりと頷いた。

「瑛くんはやっぱり……詩人なんだね」

白咲さんと壁越しに背を合わせて、一瞬だけ訪れるチャンスを待つ。

僕たちにできることはなにもない。あとはアナにまかせるだけだった。

ときは唐突にやってきた。

音もなく部屋が闇に包まれる。鼻の先も見えない完全な闇だ。背中に感じていた白咲さんの息遣いも聞こえない。体を失い意識だけが空中に漂うような感覚だった。

数秒の後、闇が切り取られるようにして部屋が開いた。逆光で浮き上がった影。アナだ。

「さあ、行くぞアキラ。お前の星を救うんだ」

左手側に同じタイミングで白咲さんも独房から出てくるのが見えた。僕はすぐに駆け寄って白咲さんを抱きしめる。途端に不安感がすべて吹き飛ばされたような気がした。

「僕を信じてくれてありがとう」

「えっと……あの……その……アナちゃんが見てるよ……」

白咲さんの顔が桜色に染まる。アナは苦笑いしながら視線を僕たちから外した。

「まあ、なんだ。あれだな。そういうのはすべてが解決したあとに取っておくものだ」

カッンと固い足音が響いた。長くのびる灰色の廊下の先で、シーシャムレが腕を組んで立っている。

僕たちをじっと見つめて首を少し横にふる。こっちへ来いという合図だろうか。

「アナ。あなたはこれでまた罪を重ねたのよ。わかってる？」

シーシャムレの立っている場所で廊下は二手に分かれていた。やはり灰色をした金属質の廊下が続いている。

「ああ。君のおかげだよ、シーシャ」

「私ができるのはここまでよ。もう少ししたら船の機能は完全復旧

するわ。そうしたら私はあなたたちの脱走を報告しなければいけない」

「充分だ。それまでに私たちは安全なところへ逃げる。完全復旧でロニーの外部接続が回復すれば、私たちの勝ちさ」

シーシャムレが眉間に指を押し当て頭を振った。

「あなたって昔からそう。やっぱり自分の立場をわかってないんだわ」

「シーシャも昔からそうだな。君はいつも私の味方でいてくれる」

シーシャムレのため息が漏れる。呆れた表情と薄ら笑いが、彼女の複雑な心境そのものを写し出している。

アナの親友として、<sup>ヴィナスク</sup>全天連合の軍人として、脱獄者である僕たち三人をどう扱うべきなのか。三百万年前の地球から僕と白咲さんを救い出してくれたアナのように、シーシャの心は情と職務の間で揺れ動いているのだ。

アナはしばらくシーシャの瞳を無言で見つめた。それから、意を決したように微笑みながら頷いて、分かれ道の左側へと歩き始める。僕と白咲さんもアナの後ろに続いた。

すれ違い様にシーシャムレが冷ややかな声で囁く。

「あなたたちが背を向けた瞬間に、私はあなたたちを撃ち殺すかもしれないわ」

シーシャムレの手が腰に備えられた小さな拳銃にかかっている。

僕と白咲さんは思わず身を固めた。

「……好きにするといい。だが、私は君がそんなことをするはずがないと思っている。そうだろう？」 <sup>ルカー・シーシャー</sup>「優しいシーシャー」

アナは言って再び歩き出す。シーシャムレが苛立たしげにまた腕を組んだ。そつばを向いてなにかぶつぶつと言っているが、よく聞き取れない。

「その……シーシャムレ。僕の言葉は君に通じないけども」

シーシャムレは僕たちに背を向けたまま立ちすくしている。

「ありがとう」

僕は力を込めてそう言った。語勢の強弱ではない。詩人として、言葉に気持ちを精一杯込めて言った。

「あなたにシーシャムレだなんて呼ばれる筋合いはないわ」

シーシャムレからはぶつきらばうにそんな返事が返ってきた。結局彼女は一度も振り返らず、つかつかと僕たちとは反対方向に歩いて行ってしまふ。

シーシャムレはつまり、不器用な性格なんだと思った。『優しいシーシャ』という皮肉的なあだ名は彼女の本質に肉薄している。

「これでもう絶対に後戻りはできないな」

アナが冗談めいた口調で言った。

もとより後戻りなんてするつもりはない。僕は白咲さんの手を強く握ってさらに歩みを進めた。

銀色の廊下は何度も折れ曲がっていて、僕の方感覚は完全に麻痺してしまっていた。

先導するアナは当然のように迷いなく進んでいる。ときおり黒服の憲兵たちがやってくるのを察知して、物陰や空室（なんのための部屋かは皆目見当がつかなかった）に隠れてやり過こした。

今も隊列を組んで廊下を走る憲兵から逃れるために、空っぽの部屋で身を潜めている。

「どこまで行けば安全なんだ？」

アナが当てもなく彷徨っているとは思えなかったが、目的地は知っておいたほうがいいと考えて訊ねた。

「少なくとも本当の意味でこの船に安全な場所なんてないだろう……しかし、戦闘を止めるのが目的なのだから出来る限り艦橋に近づくのが得策なはずだ。アキラの権利書がお前たちの惑星スラミールのものと確定したらすぐに総司令官にそのことを伝えるんだ」

「その総司令官っていうのは誰？」

「ナバサラヤテ・テバロだ。外交官の私や、副官がいない今、彼が

ヴィナス

全天連合側の全権委任者のはずだ。大男だからすぐにわかるさ」

アナが言った直後、短いブザー音と共に銀色の壁がちかちか光った。

短い間隔で三回点滅したのち、ペンキで塗りつぶされていくように真っ白な光を放ち始める。チューヴィリン号や独房の中で感じていた潔白の光だ。アナがとっさに呼び出したロニーは青く煌めいている。限定動作の文字はどこにもない。

「船の機能が復旧されたな。アキラ、権利書を」

取り出した権利書を、アナはロニーの中へ浸すように詠み込ませた。一瞬、そのまま権利書が失われてしまうのではないかと不安がよぎったが、どうにか押し殺して様子を窺った。

問い合わせ中の字がロニーの画面の中でぐるぐると回っている。

惑星間を一瞬で飛び越えるどころか、時間を遡り、お茶を入れて料理を作る機能まで持っているロニーだが、この権利書の暗号を解読するための問い合わせにはやけに時間をかけている。それがどうしようもなく苛立たい。

「こんなに時間がかかるものなのか？」

「鍵となる商人がどこにいるか探しているんだ。そして鍵情報そのものも幾重にも暗号化されてやりとりされるし、この船が浮かんでいる宙域……つまりお前たちの惑星のあたりは全天連合でもかなり辺境だからな。通信環境が整備されていないぶん、速度はやや制限される。今は辛抱強く待つしかない」

僕はあの露天商を思い出した。ぼろぼろの布の下から覗く妖しげ

ヴィナス

な眼光と角。全天連合では禁忌とされる『大断層の向こう側』から

商品をかき集め、暗がりの路地で密かに売っている姿。

今彼はどこにいるのだろう。もしかしたらまた商品を探しに『大断層』を飛び越えているのではないか……

ロニーの表示が「問い合わせ中」から「解読中」へと切り替わった。

僕とアナは思わず笑顔で顔を見合わせる。

もう少しだ。もう少しで地球が救える。この権利書が地球のものだとは、まだ確定したわけではないが、僕はそう信じきっていた。  
「瑛くん！」

部屋の入り口で廊下を見張っていた白咲さんが叫んだ。

廊下から、それも両端から、ばたばたと騒々しい足音が迫ってくるのが聞こえる。

「走れアキラ！」

「どっちに？」

「左だ！ 絶対に立ち止まるな！」

白咲さんの手を引いて部屋を飛び出た。前方からは三人の憲兵たちが押し寄せてくる。ちらりと横目で見た限りでは後ろも同様だ。道は完全に封鎖されていた。それでもアナの言葉通り立ち止まらずに走り続ける。

憲兵が小銃を構えた。実弾か？ それともレーザービームが飛び出すのか？ どちらにしろ当たったらただでは済まないだろうな――  
「かまうもんか。」

「うおおおおおおおお」

こんな声で叫んだのはもしかしたら生まれて初めてかもしれない。叫ばずにはいられなかった。身を低くして憲兵たちの足元めかけ、さらにスピードを上げる。

三回発砲音が響いた。銃弾が足元をかすめて飛んでいく。直後につつと鈍い音を全身で感じた。

憲兵に頭から突っ込んでいた。まさに強行突破だが、巨躯を誇る彼らにはほとんど通用していない。

四本の腕が僕と白咲さんに伸びる。その腕が今にも掴みかかろうというその瞬間、憲兵が喘ぎ声と共に地面へひれ伏す。アナの拳が憲兵の脇腹に突き刺さっていた。

アナはぐるんと身を振り、別の憲兵の懐へ背を向けるようにして潜り込んだ。一瞬体を沈め、膝のバネで急上昇。肩と肘打ちで憲兵を空中へと吹き飛ばす。

「行け！ このまままっすぐ進めば艦橋へ続く階段がある。お前たちだけでも、行ってテバロに権利書を突き出してやれ！」

「そんな…… アナがいないと僕には言葉が！」

もう一人の憲兵がアナへと銃口を向けた。アナは憲兵が引き金を引くよりも速く駆け寄って銃口を逸らし、続けざまに彼女よりもあるかに巨大な憲兵を背負い投げる。

反対側の廊下からはさらに憲兵たちが迫っていた。

アナは床の小銃を取り上げて、

「言語に頼るんじゃない。それでも詩人か？」

ニヤリと笑った。

「こう見えても私は軍人なんだ。心配はしなくていい」

僕は恐る恐る頷いてアナに背を向ける。背後で満足そうな短い笑い声が聞こえた。

正直に言って、アナを残して行くのは怖かった。もし首尾よくことが運ばれて、戦争を止めることができたとしても、アナを失ってしまうのではないか。その思いが爆発的に頭の中へ広がっていく。

「行こう、瑛くん！ 今ならわたしも…… アナちゃんを信じるよ！」

白咲さんが僕の手を引っ張る。決意の眼差しが僕を静かに見つめている。

—— そうだ。立ちすくしている場合ではない。

「アナ！ 僕は君との約束を忘れない。絶対君にも最高の詩を詠ってやる！」

「ふふ。その約束、必ず守ってもらおうぞ」

僕たちとアナはお互い同時に、逆方向に走り出した。

## 5 詩<sup>うた</sup>

走りながらロニーを呼び出した。解読中の表示はまだ続いていて、ときおり画面がゆがむように文字が乱れる。

アナの言つとおり、廊下を走り切った先には階段があった。周囲の白い壁とは違い、非常時と同じ銀色の金属でできたいびつな階段だ。

僕も白咲さんも切れ切れの息だったが、足や肺に走る痛みを堪えながら一気に駆け上がる。大きな扉が開いた。

「……そんな」

白咲さんが言った。

扉の先では黒服の憲兵たちが小銃を掲げて僕たちを待っていた。銃口を向けながら、憲兵が僕と白咲さんの腕を掴み上げる。抵抗できなかった。銃や憲兵の威圧感が怖かったのではなく、掴みかけた成功が崩れ去っていく音が聞こえた気がしたからだ。

「総司令閣下！ 脱獄した敵対文明の者を逮捕いたしました！」

憲兵の一人が大声で叫ぶ。ぎょろりと空中に巨大な目玉が浮かび上がった。

「ご苦労。もう一人……グラスナヴルの次女はどうした」

艦橋中に轟くような声だ。音が体感できるほど空気が振動している。

空中に浮かんだ目の淵がぼんやりと輪郭を現す。次第に、垂れ下がった鼻、広い額、鋭角の顎が浮き彫りになっていく。顔だけで憲兵たちの身長の三倍ほどもある――アナの言ったように、大男だった。彼がテバロに違いない。

「はっ！ 艦内で戦闘中と報告を受けております！」

「役立たずどもめ。エルザー一人捕らえるのにどれだけ時間をかけるつもりだ」

テバロの首が大きく旋回して僕たちと、僕たちを捕らえている憲兵たちに向いた。威圧的な巨体と語調のわりに声は穏やかだった。

テバロの顔越しに、地球の青い輝きが覗いている。静かな光が艦橋を照らす。

「ズレースク・エルザたちは再び独房へ。拘束具の使用を許可する」  
「了解であります！」

ぐん、と体ごと引つ張られた。強い力で身動きができない。

このままではなにもかもが無駄になってしまう。そんなのは嫌だ。なんのためにここまで来たんだ？

——お前は約束したじゃないか。すべてが終わったら、白咲さんとアナに、二人のために詩を詠むんじゃないのか？

「待ってくれ！」

声帯を目一杯震わせた。しかし僕たちを捕らえた憲兵の動きは止まらない。

「僕が地球の……地球の所持者だ！！」

テバロの目玉がぐるりと動く。見られるだけで圧迫されるような目線が僕に注がれた。

この程度の圧力に負けるわけにはいかない。シーシャムレの協力や、アナの奮闘をこんな簡単に無駄にしてはいけない！

なんとか指先を動かしてロニーを起動する。「解読中」の表示のままだ。

「僕が地球の代表者としてあなたたちと交渉する。だからもう少し待ってほしい！」

「……スラルミールの言葉か？ 誰か翻訳できる者は……いないだろうな。連れていけ」

テバロの声の音圧で全身が震える。台風の中、向かい風を受けながら走っているようだった。

どうすれば彼らに僕の言葉が通じるんだ……どうすれば彼らは待ってくれるんだ。

考える。考える考える考える――

ロロロリヨ・グジグゲーニエ二十三世は言った。

『詩は言葉を研ぎ澄ましたものだ。いつか強力な武器になる』

アナもこう言った。

『言語に頼るんじゃない。それでも詩人か？』

——言葉を届けるんだ。言葉を研ぎ澄ませ！

そうだ。僕は詩人だ。自分の言葉を、相手の心へ直接届けることができないでどうする。

ここを乗り越えなければ、僕は一生グテアंकに勝てないし、堂々と詩人を名乗れない！

「テバロ……いや、この場にいる全員、みんなに故郷があるはずだ！」

ロニー——解読中。

「僕の故郷はあの星だ。あなたたちが『名無しの星』と呼ぶあの星だ。青く輝く美しい星だ」

ロニー——解読中。

「生き物がたくさんいて、猿から進化した人類が大勢いて、たくさんの場所で人類が愛しあって、殺しあって、それでも肩を寄せあつて」

ロニー——解読中。憲兵の動きが止まる。

「あなたたちほどの技術も知恵も根気もない。歴史も文化も文明もまだまだ浅い。知らないものを拒絶する。知らないものに恐怖する」

ロニー——最終行解読中。

最終行解読中！

「僕はあの星が好きだ。あの星に住む人類が好きだ。食べて、飲んで、歌って、踊って、絵を書いて、憎みあって、愛しあって、生きている人類だ。あなたたちと変わらない人類さ！僕はあなたたちのおかげで最愛の人を見つけた。故郷の星が好きになれた。あなたたちのことも同じくらい好きになった」

大きな感情のうねりが喉から飛び出ていく。

詩とも弁論ともつかない言葉の塊だ。胸の痛みが激しい。心地良い痛みだった。

ロニー——解読完了。

「だからあの星を守りたい。あなたたちと戦争をしてほしくない。僕が——戦争なんかさせない！」

指先で力いっぱいロニーを弾いた。

ロニーは滑空するようにテバロの額目がけて飛んでいく。

喉がからからに乾いている。口の中には、少し血の味も感じた。

テバロは眉間のあたりで止まったロニーをじっと見つめて、

「……これはどこの星の権利書だね？」

蔑むような口調で言った。

まさか、と思った。まさか、ここまで来てあの権利書が地球のものではなかったのではないか。高揚した気分が一瞬にして戦慄に変わる。

テバロの大きな目玉が僕を貫き通すような視線で見つめている。

スラムヒロ

「もう一度訊ねるぞ、見知らぬ星の人よ。これは、この権利書は、いったい何という名前の星のものだね？ いいか、一語で答えなさい。私にも、憲兵たちにもはつきりとわかるように、星の名前だけを丁寧に、ゆっくりと、君自身の言葉で」

テバロが何を言いたいのか、僕にはすぐに理解することができなかった。

星の名前——グジグゲーニエにも訊ねられた。彼は僕が答える前に死んでしまったんだ。

ということは、あの権利書と、僕が三百万年前の地球でサインした権利書が同一のものならば……権利書に星の名前は書かれていない。

だからテバロは僕に星の名前を訊いているのか？

声を出そうとして、咽頭が痛む。負けるものか。

僕は、僕の星の名前を叫ばなければいけないのだ。

「『地球』」

ヴィナスク

もう「見知らぬ星」だなんて、誰にも呼ばせない。全天連合の異星人全員に、あの星の名前を知ってもらわなければいけない。

「……そうか。チキュウか。面白い名前だ」

テバロの顔が首ごと地球へと振り返る。

「見知らぬ星の人……いや、地球人よ。平和を望むものよ。我々は

お前たちの星を攻撃しようとしている。まったく、取るに足らん星だ。ラングイによる脅威も迫っている。お前が星の主ならば、これから先はすべてお前があらゆる問題を解決しなければならない。お前一人の肩に、星の生命すべての未来がのしかかっている。それでもお前は、あの星の所有権を主張するか？」

「もちろんだ。それに」僕は白咲さんを見た。「独りじゃない。白咲さんだって、アナだって……それに、ウイナスク全天連合の宇宙人だっているんだ。僕や地球人はけっして独りなんかじゃない！」

テバロが僕を凝視する。ただ地響きに似た呼吸音が艦橋の中をこだましている。

「そうか」

言ってテバロは大きく息を吸った。

「全軍、進撃を停止せよ！ 繰り返す。全軍、進撃を停止！ 和平交渉は成立した。我々<sup>ウイナスク</sup>全天連合軍は、チキユウを友好星とみなす。

全軍進撃を停止せよ！ 我らの新たな友に、生命の尊厳に栄光あれ」

## 6 詩人とアヴナルレ

その昔、つまり辛抱強いフェイエナフェ人でさえ時間を数えるのに飽きるほど宇宙の始まりに近いころ。

今は亡きアंकガーへ系アークッドに生まれたブゼリッド族で、宇宙的に偉大なる冒険家のロロリヨ・グジグゲーニエ二十三世は、まだ生まれたばかりの恒星にほど近い、小さな小さな惑星を見つけた。惑星ははじめ、ドロドロの溶岩に覆われた醜い星だったが、やがて冷え固まり無数の生命が栄え始めた。

ロロリヨ・グジグゲーニエ二十三世は、文明を築きあげるほどの知的生命体が誕生するのではないかと考え、しばらくしてから惑星に降り立った。

二足歩行の、細い毛に覆われた動物に寄生したロロリヨ・グジ

ツグゲーニエ二十三世はある日、川辺で夜空を見上げながら詩を詠う生命に出会う。ロロロリヨ・グジグゲーニエ二十三世は、詩を詠む生命をその惑星で唯一の知的生命体と認め、彼らに惑星の所有権利書を渡した。

それからまた、宇宙の彼方へ新たな冒険を求めて旅立った。それは、ロロロリヨ・グジグゲーニエ二十三世が、後継者であるロロロリヨ・グジグゲーニエ十二世にその宇宙史に輝く偉大な名を譲り渡すわずか六アークトド日前であった。

『伝記・ロロロリヨ・グジグゲーニエ、その偉大なる冒険家の血筋』

第八二巻 第四版五六ページより引用、ただし偽文書の疑いあり

ロニーで見つけた文章を読み終わったあと、背もたれのない椅子に腰掛けて、ただぼんやり地球を眺めていた。青い青い暖かな光を見つめていると、鼻がむずむずして目頭が熱くなってくる。

「見て、日本列島だよ」

白咲さんが壁に手を貼り付けながら呟いた。海に反射された光と、渦巻く白い雲の隙間から弓なりの列島が覗いている。遠すぎて見えないが、あの島々が描く弧の頂点から少し西のあたりに僕と白咲さんの街があるはずだ。

地球は今ごろ大騒ぎだろう。

突然姿を現し宇宙人と、まともな交渉もできないまま始まった戦争が、突然終わってしまった。地上の人類からしてみればなにが起こったのかもわからない。そもそもそんな出来事があったことを知らない人だっているかもしれない。

それはそれで平和だと思った。

「アキラ、マツリ」

太陽のように強かな笑顔、乳のように白い肌、どんな宝石よりも  
碧い瞳、さらさらの細い金髪。戦争終結が宣言されてから初めて会  
うアナは、擦り傷だらけで紺色のスーツもぼろぼろだった。

僕は椅子に座りなおして、アナのほうを向く。白咲さんが僕の影  
に隠れるようにして後ろに立ち、少しだけ顔を出している。少しで  
もアナを疑ってしまった自分を恥じているようだった。

「よくやったぞ、アキラ。いや……むしろ私は感謝しなければいけ  
ない」

「そんなことないよ。僕こそアナには言葉で表せないほど感謝して  
る。もちろん……白咲さんにも。二人とも、ありがとう」

アナが微笑む。

「あ、あの、わたしもその……アナちゃん、ありがとう。それから、  
ごめんなさい。わたし、アナちゃんに酷いこと言っちゃったんだ」  
「いいんだ。気にするな。私こそ、アキラにべったりですまなかつ  
たな」

白咲さんの顔が桃色に染まる。僕と目が合うと、拗ねたように口  
を尖らせてそっぽを向いてしまった。その様子を見ながら、アナは  
また笑って――

それから僕たちに背を向けた。

「アナ？」

腹の底から悪い予感がした。言い知れない不安だ。白咲さんも、  
不思議そうな表情を浮かべながら僕の腕をぎゅっと掴む。

「アキラ、マツリ。私はもう行かなくてはいけない」

「行くってどこへ？」

返事はない。

アナは無言で走り出した。

「待ってよアナ！」

椅子から飛び跳ねるようにアナを追いかける。しかし白咲さんが  
絡めた腕で、勢いが止まってしまう。

白咲さんが僕を見上げながら子犬のように寂しそうな表情をした。僕は無言で彼女を見つめ返す。

ふと、白咲さんは微笑んで、

「わたしは、ここで待つてるね」

掴んだ僕の腕を解いた。僕は心の中でごめん、と呟いて再び走り出す。

弛緩しきった筋肉がひりひり痛んで足がもつれそうになった。体力ももう限界を突破しているようだ。

アナにはなかなか追いつけなかった。まるでウサギとカメの競争だ。普段から軍人として訓練していたアナと、一ヶ月ほどサバイバル生活をしただけの僕では根底の走力からして差が大きい。

「アナ！ 待つてばっ！」

僕はアナに飛びついて、なんとか彼女の足を絡めとる。我ながら情けない追いつき方だ。

「いつたい……どこへ……行くんだよ」

激しい動悸と汗が気持ち悪い。抵抗するアナを逃がさないように捕まえているのがやっとだった。

「放せ！ 放してくれ！」

「アナがどこへ行くつもりか言ってくれたら放してやる！」

しばらくアナともみくちやになって押し問を答続ける。

彼女が根負けするころには、腕が痺れかかっていた。それくらい、僕はアナを放したくはなかった。

アナの肩が小さく震えている。ぐずぐずの鼻声で、うつむきながら、

「アキラには……見られなくなかったんだ……」

「君の泣き顔なら独房の中で見たよ」

「……バカ」

必死で声の震えを抑えているが、とうてい隠しきれていなかった。妙にしおらしいアナに、少しどきりとする。

「私はこれから……ぐずっ……裁きを受ける」

「裁きつて、どうして？ 戦争はもう——」  
戦争はたしかに終わった。けれども彼女にはそれ以前の罪が残っている——

「任務不履行、違法な断層跳躍、ぐずつ、禁錮処置からの脱獄、捕虜の脱獄幫助、軍への背理行為……それが私に突きつけられた罪状だ」

「だからそれは、僕たちを助けるためにやったんじゃないか。そんなのはみんな無罪に決まってる！」

「そういうわけには……ぐずつ……いかないのだ。それとこれとは、話がまったく別だ」

「なら僕が……僕が君の弁護をする」

アナが首を振った。もうなにも言つな、と僕の唇に手を添える。小さな手だがとても暖かい。

僕はその手を無理やり剥ぎとって握る。

「またすぐ会えるんだよね？」

泣きじやくつた顔で苦笑したままアナは答えない。

どうしてそんな顔をするんだ。やめてくれ。

「約束はどうするんだ。僕はまだ君のための詩を詠んでない」

「……アキラ。お前はこれから長い時間をかけて素晴らしい詩人になるだろう」

アナの顔はもう涙と鼻水でぐしゃぐしゃだ。

僕の目の前にいるのは、地球駐劄の外交官でも、銀河を駆け巡る宇宙人スパイでも、もちろん天才言語学者でもなかった。

ただの子供だ。思ってもいないことを口にしてしまう、まるで子供じみた女の子だ。それが少し嬉しかった。感情を丸出しにしているアナを、本当のアナを見ることができたのだ。

「それこそグテアंकをゆうに凌ぐ、『城』の一部になるような、偉大な詩人だ。お前の詩を聴く者、お前の詩を読む者すべての心を震わせる、宇宙一の詩人だ。その名前と詩はきつと、宇宙のどこにいても聞こえてくるようなものになる。みながみな、お前の詩を口

ずさむんだ……私は、そのときまで待っている。それで充分だ」

「そんなのいつになるか！」

叫ぶと同時に、アナの拳がみぞおちに打ち込まれた。

呼吸ができなくなり、目の前がだんだんと白んでいく……

「さよならだ、アキラ。お前と出会えて、ほんとうによかった。あ  
りがとう」

アナっ――

声にならない声だった。

## エピローグ『詩人は星を見上げて詠う』

エピローグ 『詩人は星を見上げて詠う』

地球に戻ると、すぐになんともない日常が戻ってきた。

僕と白咲さんがこの星から姿を消していた地球時間での三日間、日本は——いや、世界は異星人襲来によって未曾有の混乱に陥っていたらしい。

僕たちははじめ、駆け落ちという名の失踪扱いを受けていたようだが、いざ異星人たちとの戦争が始まってからは、彼らによる誘拐だと捉えられてしまっていた。

強ち間違いではないのが笑えないところだ。

無事に帰ってきた僕と白咲さんを見て、両親がおいおい泣く姿は一生忘れられないだろう。もちろん、僕が地球の所持者になってしまったということは、秘密にしておいた。

地球圏には、まだラングイは出現していない。テバロやシーシャ（彼女は僕にシーシャムレと呼ばれるのを強く拒んだ）によると、彼らは隠れているラングイの討伐が完了し次第、ゆつくりと時間をかけてもう一度地球人の前に姿を現すつもりらしい。

それがいつになるかはわからない。明日かもしれないし、僕の子供や孫の世代になるかもしれない。

けれども、次こそは彼らも平和のうちに事を運んでくれるはずだ。なぜならば、地球の所持者である僕が、そう望んでいるのだから。

しばらくして、僕と白咲さん、それと岡原で天体観測を決行した。岡原の野郎は僕たちの身を心配したり、心労を労ったりする以前に「羨ましい」の一言ですべてを片付けてしまった。呑気な奴だが、

すぐにもとの生活に戻ることができたのもこいつのおかげかもしれないと思うと、少しありがたいと思えた。

夏休み最終週、人気のない夜の学校の屋上。

夏の終わりが近づき、この時間でも天頂付近はすでに真っ暗だ。天の川とその兩岸に織女星、牽牛星が誇らしげに輝いている。

「どこかに宇宙船見えないかなあ」

望遠鏡を覗き込みながら岡原が呟いた。

僕と白咲さんは手すりを背もたれにしながら、二人でくすくす苦笑しあう。

「案外見えてるのかもしれないね」

白咲さんの甘い囁声が耳をくすぐる。

「アナちゃん、この星空のどこかにいるんだよね、きっと」

「……うん」

あの煌く星たちは、きっと生命の源なのだ。

恒星のまわりを惑星がぐるぐる回り、その惑星の上でたくさんの生物が生きている。どこかにアリメンシルがあつて、どこかにテューヴィリンがある。きっとどこかに、アナがいる。

アナの笑顔を思い出した。近くで見れば太陽の、遠くでは夜空の星の、美しい笑顔。

アヴナルレ。シュヴァミルで、『輝く女の子』。それが彼女の名前だ。ぴったりじゃないか。

——また会える。僕はそう信じてる。

「ねえ、瑛くん」

「なに？」

「瑛くんの詩を聴かせて」

『詩人とアヴナルレ』

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8179y/>

---

詩人とアヴナルレ

2011年11月24日09時01分発行